

フィロロギカ — 古典文献学のために

III

[目次]

< 論文 >

- 大芝芳弘：カトウツルスの難読箇所について (2)
—Catull. 107, 7-8— 1
- 納富信留：プロタゴラス『神々について』断片と伝承 24
- 安西 眞：言語と人間の社会的集団
—Il. 4, 422-45 の理解をめぐって— 48

< 本文批判にかかわる小論 >

- 安西 眞：ヒッポクラテス文書集成『医術について』本文校訂ノート (1)
de arte 4.1—Jouanna 66
- 安西 眞：ヒッポクラテス文書集成『医術について』本文校訂ノート (2)
de arte 11.6—Jouanna 72
- Akitsugu Taki : *A Thorn in the Flesh of Doctrinal Readers of Plato:*
a note on signum interrogandi at the end of an οἶμα sentence, Rp. 335d. .. 79
- 西井 奨：アコンティオスの弁明
—オウィディウス『名高き女たちの手紙』第 20 歌 21-32 — 88

2008

古典文献学研究会
(フィロロギカ編集委員会)

(編集責任)

『フィロロギカ』編集委員会

事務局長：葛西 康德

名誉編集委員：久保 正彰、E. Craik

編集委員：安西 眞、大芝 芳弘、納富 信留、佐野 好則

フィロロギカ 第Ⅲ号

カトゥルスの難読箇所について (2)

— Catull. 107. 7-8 —

大芝芳弘

前回に引き続き、カトゥルスの難読箇所のテキストと解釈上の問題について考えてみたい。今回は作品集後半のエピグラム集の中の第 107 歌、特にその 7-8 行目の読みについて検討する⁽¹⁾。

Catull. 107

Si quicquam cupido<que> optantique optigit umquam
 insperanti, hoc est gratum animo proprie.
 quare hoc est gratum † nobis quoque † carius auro,
 quod te restituis, Lesbia, mi cupido,
 restituis cupido atque insperanti, ipsa refers te 5
 nobis. o lucem candidiore nota!
 quis me uno vivit felicior, aut magis † hac est
 † optandus vita dicere quis poterit?

1 quicquam ε(γ), quoi quid Ribbeck : quid quid O, quicquid GR cupidoque Aldina
 optigit O : obtigit GR 3 nobis quoque V : nobisque hoc Statius, nobisque est Haupt,
 nobis, quod carius auro est coni. Thomson carius] carior Walker (Nisbet, Lyne)
 6 luce V : corr. B. Guarinus 7 hac est / optandus O, me est / optandus GR
 8 (post optandum in vita ...) quid Statius

もしも何事かが、熱望し念願している者に思いがけなく
 実現したなら、これこそまさしく心からの喜びだ。
 だからこれこそは、私(たち)にとっても黄金よりも大切な喜びだ、
 君が戻って来ることは、レスビア、熱望する私のもとに——、
 君が、熱望する私のもとに思いがけなくも戻り、自分から進んで 5
 帰って来る(ことは)。おお、ひときわ白い印に輝く日よ！

(1) 本稿は 2006 年 10 月 14 日に国際基督教大学で行われた第 5 回古典文献学研究会で発表する予定であったが時間の関係で割愛した部分に新たな論点を付け加えたものである。

誰か他ならぬ私よりも幸せに生きている人がいようか、あるいはこの
人生(こと)以上に念願すべきこと(人生)など、誰が語れようか?

7-8 への主な修正提案⁽²⁾

- (1) magis hac **quid** / optandum vita A. Guarinus, Thomson
- (2) magis hac **res** / optandas vita Lachmann, Goold
- (3) magis **hace** / optandam vita Ribbeck
- (4) magis hac **mi** / optandum vita Oksala
- (5) magis **esse** / optandam **vitam** Lenchantin de Gubernatis

- (6) magis **aevum** / optandum **hac** vita **ducere** quis poterit? Munro
- (7) magis **hace** / optandam **vitam** **degere** quis poterit? Baehrens
- (8) magis **umquam** / optandam **vitam** **ducere** quis poterit? Lyne

- (9) magis **ab dis** / optandum **in** vita Ellis
- (10) magis hac **rem** / optandam **in** vita Postgate
- (11) magis hac **re** / optandam **in** vita Kroll
- (12) magis hac **re** / optandum **in** vita Lee

類義語の連続と対照、反復と変化を巧みに生かしつつ、一般的な命題と個別の経験の対応を語り込んだエピグラムである。全体は「熱望し念願している」が「期待はしていない」人間にとって思いがけなく願いが叶ったらそれは「まさに心底喜ばしいことだ」という一般的な命題を、詩人個人のレスビアとの関係において語っている。1-2 *cupido*<*que*> *optantique* ... / *insperanti* が³、4-5 *mi* *cupido* / ... *cupido* *atque* *insperanti* で繰り返され、また 2-3 行目での *hoc est gratum* の繰り返し、4-5 *te restituis*, ... *mi cupido*, / *restituis cupido* *atque* *insperanti* の繰り返しと 5-6 *ipsa* *refers te* / *nobis* への変化、さらには 3 *carius* [*vel carior*] *auro* の比較級に(イメージの点でも)対応する比較級を含む 6 *o lucem candidiore nota!* の感嘆

(2) 以下の諸提案については、各種校訂本、注釈書、翻訳書に加えて、以下の論文による：H.A.J. Munro, 'Catullus 107.7', *Journal of Philology* 9 (1880) 185; P. Oksala, *Annotationes Criticae ad Catulli Carmina*, Helsinki 1965, 98-9; R.O.M. Lyne, 'The Text of Catullus CVII', *Hermes* 113 (1985) 498-500; H. Dettmer, 'Catullus 107.7-8', *CW* 80 (1987) 371-3.

が置かれ、さらにこれらの比較級を引き継ぐようにして、最終連では 7 *quis me uno vivit felicior* という比較級を伴う修辞疑問文で自分は誰よりも幸福だと捉える趣旨が、続く *aut* の後では今度は *magis ...* という比較級を含む同じ修辞疑問文 8 *dicere quis poterit?* に置き換えられて締め括られている。

難点は実は 1 行目と 3 行目にもあるのだが、本稿では特に 7-8 行目の問題に焦点を絞って論ずることにしたい。写本の読みがそのままでは成り立ち得ないことは明白で、何らかの修正が必要である。ではどういう修正が妥当か。

従来の修正は大きく分けて二通りに区分できるように思われる。つまり、*magis ... / optandus (-um, -am, -as)* の比較の対象を (明示的か否かはともかく) 「人生」全体に拡大して語るか、それとも 8 *in vita* 「人生において」という読みを採り、「念願すべきこと」を「ある出来事」に限定して語るのか、ということではないか。(1)―(8) は前者、(9)―(12) が後者に当たる。前者のうち、「この人生」を明示的に比較の対象とする読みは (1) (2) (3) (4) (6) (7) だが、(5) (8) もそれを言外に前提にしている。そしてこれらの内で、「人生」そのものを「念願すべきもの」と読む読みは (3) (5) (7) (8) であり、(6) *aevum* も同趣旨であるが、他方、何らかの「事柄・出来事」とする読みは (1) *quid optandum*, (2) *res optandas*, (4) *optandum* である。これに対して、後者の場合には「人生」は比較の対象ではなく「人生において」という形で言及され、比較の対象は (10) (11) (12) が明示的に「このこと (*hac [re]*)」と語られ、また (9) は *ab dis optandum* という独特の読みを採るものの言外に同様の比較対象を想定していると考えられるので、「より念願すべきこと」も何らかの「出来事・事柄」に限定されることになる。つまり、(9) *optandum*, (10) *rem optandam*, (11) [*rem*] *optandam*, (12) *optandum* である。なお、(6) (8) では動詞を *dicere* から *ducere* に、(7) では *degere* に読み替えて、「より願わしい人生を送る (ことが誰にできようか)」という読みを提示している点で他の修正読みとは異なる⁽³⁾。

以上をまとめてみると、次のようになろう。

(3) 以上の他に Riese は *magis hac re / optandam vitam* と読むが、これは「出来事・事柄」を比較の対象として「念願すべきもの」を「人生」とする点で他のどの提案とも異なり、内容的にも考えにくい提案である。また D. A. Slater, 'Catullus CVII', *CR* 38 (1924) 150-1 は 6 行と 8 行の大部分を入れ替え、7 行目末の写本の読みは本来 *aut magis hac me est* だったがそれは *haut magis Acme est* の誤写だったとした上で、次のように読む: 5-8 ... *ipsa refers te / nobis; 'invitam' dicere quis poterit? / quis me uno vivit felicior? haut magis Acme est / optanda. o lucem candidiore nota!*

(A) 比較の対象は「人生」：(1), (2), (3), (4), [(5)]; (6), (7), [(8)]

「より念願すべきもの」も「人生」：(3), (5); (6) *aevum*, (7), (8)

「より念願すべきもの」は何らかの「事柄・出来事」：

(1) *quid optandum*, (2) *res optandas*, (4) *optandum*

(B) *in vita* と読み、比較の対象は「このこと (*hac [re]*)」：[(9)], (10), (11), (12)

「より念願すべきもの」も何らかの「事柄・出来事」：

(9) *optandum*, (10) *rem optandam*, (11) [*rem*] *optandum*, (12) *optandum*

なお、(A) は「この人生」と比較して「より念願すべき人生」あるいは「より念願すべき事柄」を「語る」とするか ((1)―(5))、「より念願すべき人生を」「送る」と修正する ((6)―(8)) のに対して、(B) は「この人生において」「このことよりも」「より念願すべき事柄」を「語る」とする点で共通している。

さて、これらの諸提案のうち、どの方向性が最も妥当と言えるだろうか。考慮すべきことは恐らく、2つの点に絞られるだろう。〔1〕問題の詩句は冒頭の *optanti* に対応すると見られる *optandus* の語を含む以上、第1行の趣旨との呼応関係を考慮する必要がある。〔2〕この最後の修辞疑問文が直前の「誰が私以上に幸福に生きているか (= 私以上に幸福な人は誰もいない)」という言葉とどう関連するのかを考慮し、その趣旨に適合する読みが修復される必要がある。しかし、*quis ... vivit felicior* 「誰が幸福に生きているか」に対して、*dicere quis poterit* 「誰が語れるだろうか (= 語れる人が誰かいるだろうか)」は少なくとも表現の上では必ずしもうまく適合するようには見えない。「幸福に生きている (= 幸せな) 人」と何事かを「語れる (論評できる) 人」の間に齟齬があるように感じられるからである。その食い違いを容認可能なものと見るか、テキストの問題のために生じた難点なのかも考える必要がある。このことは、*quis ... vivit felicior* という言葉を一時的な喜びの表現と見るか、「人生」そのものを幸福と感ずるほどに誇張した言葉と見るかによっても違いが生ずるように思われる。(1)―(5), (9)―(12) の修正提案は、「幸せな人」と「語れる人」の相違にはあまりこだわらず、伝承のテキストから可能な修正を施そうとしている。しかし、*dicere* を (6) (8) のように *ducere* に読み替えたり、(7) のように *degere* に修正する提案はこの齟齬を重視してそれを是正しようとするものと思われる。特に (8) の Lyne は、*vivit felicior* の現在と *quis poterit* の未来の対比を重視し、*umquam / ... ducere quis poterit?* 「誰がこれから先もより念願すべき人生を送れるだろうか」と読むことを提案したものである。従って、これらの論点を上述の二通りの区

分と連動させて考えれば、問題は結局、magis ... / optandus 「より念願すべき」と言われるのは「人生」全体に拡大して語られているのか、ある一時的な「出来事・事柄」に限定されるべきことなのか、どちらが妥当か、ということになろう。

そこで、このエピグラムの内部の統一性という観点に立ち、上で問題〔1〕として挙げた冒頭の optanti と optandus の対応関係を重視するならば、optanti「念願」の対象は何らかの「事柄 (si quicquam ...)」であり、その後の 2-3 hoc est gratum の繰り返しや 4 quod 節もある「出来事」を問題にしているのだから、「より念願すべきこと」も何らかの「事柄・出来事」である方が妥当であるように思われる。その見方からすると、上述の (1) (2) (4) や、in vita と読んで「事柄」を読みとる (9)―(12) の読みが良さそうに見えるが、ところがこれらの場合にもやはり dicere quis poterit? 「誰が語りうるか」という締め括りは、直前の「誰が私以上に幸福に生きているか」との食い違いが大きいように思われる。従来の修正読みではこの点が違和感として残る。そこで、この観点から敢えて修正を施すならば、例えば

(13) magis hac re / optandum in vita **discere** quis poterit?

あるいは

(13') magis hac rem / optandam in vita **discere** quis poterit?

「人生においてこのこと以上に念願すべきことを誰が知ることができようか。」と読めるのではないか。この場合、discere = experiri 「経験から知る・学ぶ」であり⁽⁴⁾、従って「より念願すべき事柄」を「誰が経験できるだろうか」ということになるので、直前の quis me uno vivit felicior 「(現に今) 誰が私より幸福に生きているか」と並列に並べても「誰が語れるか」よりもズレは小さくなるであろう。つまりこの場合、vivit felicior は「人生」全体について言うのではなく、いわば現在進行形的な意味であって⁽⁵⁾、要するに「この出来事のおかげで私は今幸福だ」の意と考えられるので、discere と読めば「この私の経験以上に念願すべき (= 幸せな) 経験が誰にできようか」となり、7-8 行目の 2 つの修辞疑問文には実質的にはほとんど隔たりはなくなるように思われる。また、discere と読むならば、この詩句は第 1 行目の quicquam ... optanti ... optigit 「念願している人に何かが起こる (叶う、実現する)」が、出来事を主語にして述べたのに対して、その出来

(4) Cf. *TLL*, s.v. disco, 1335.15ff. そこにも引かれているように、Catull. 21.11 me met puer et sitire discet はこの用法の一例と考えられる。

(5) Lenchantin de Gubernatis ad loc. は vivit = est だと説明し、Catull. 8.10, 10.33, 111.1 を挙げている。

事を経験する人間の側から語った表現だということになるだろう。

このエピグラム自体の内的整合性を中心に考えるならば、このような読みが考慮できると思われるが、他方で、vivit felicior を詩人自身の高揚した気持ちを語る誇張表現として理解するならば、詩人がレスビアとの思いがけない和解と再会によって、人生そのものをも幸福と思うような気持ちを語っていると見る見方も捨てがたい。そして事実、そのような理解を促す根拠がある。すなわち第 68 歌の末尾には、この第 107 歌と照応するとと思われる詩句が見出される。

Catull. 68. 143-60

nec tamen illa mihi dextra deducta paterna
 fragrantem Assyrio venit odore domum,
 sed furtiva dedit muta munuscula nocte, 145
 ipsius ex ipso dempta viri gremio.
 quare illud satis est, si nobis is datur unis,
quem lapide illa diem candidiore notat.
 hoc tibi, quod potui, confectum carmine munus
 pro multis, Alli, redditur officiis, 150
 ne vestrum scabra tangat robigine nomen
 haec atque illa dies atque alia atque alia.
 huc addent divi quam plurima, quae Themis olim
 antiquis solitast munera ferre piis.
sitis felices et tu simul et tua vita, 155
 et domus ipsa, in qua lusimus, et domina,
 et qui principio nobis † terram dedit aufert †,
 a quo sunt primo mi omnia nata bono,
 et longe ante omnes, mihi quae me carior ipso est,
 lux mea, qua viva vivere dulce mihi est. 160

ここには明らかに 107 歌の幾つかの詩句と共通する発想や表現が見出される。つまり、レスビアが浮気相手である詩人のもとに時折やってきてくれれば詩人は満足であって、そのような幸福をもたらしてくれる彼女が生きている限り詩人にとって人生は喜びだ、という状況と、この 107 歌で歌われている状況は明らかに対応する。語句の点でも、147 nobis ... unis (~107. 7 me uno), 147-8 is ...

/ quem lapide illa dies candidiore notat (cf. 160 lux mea) (~6 o lucem candidiore nota!), 154 sitis felices (~7 vivit felicior), 159 mihi quae me carior ipso est (~†nobis quoque† carius [vel carior] auro), 160 qua viva vivere dulce mihi est (~7-8 vivit felicior, ... †hac est / optandus vita†)などの表現は明らかに類似している(下線部、特に太字部分)⁽⁶⁾。もちろん、第 68 歌と 107 歌では詩の形式も違えば調子にも相違が見られる。68 歌では第三者である友人への感謝を込めた語りかけの中でレスビアとの関係を比較的冷静に語っているが、107 歌では「思いがけない念願の成就」によって誰よりも幸福を感じるといふほどに高揚した気持ちが語られている。しかし、特に 68 歌末尾の 160 lux mea, qua viva vivere dulce mihi est と 107.7 quis me uno vivit felicior がともにやや誇張された表現と内容において対応していることを考えあわせれば、問題の箇所でも詩人がやはりその「より念願すべきこと」を「人生」全体にまで拡張して語っていると見ることも可能に思われる。しかし、ここでもやはり、dicere quis poterit? が抱えるズレが問題になる。しかしながら、(6) (7) (8) のように ducere や degere を導入した修正が必ずしも必須とは限らない。というのは、一つの可能性として例えば、次のように読むこともできると思われるからである。

(14) magis **hac mi** / optandam **vita** dicere quis poterit?

「私にとってこの人生以上に念願すべき人生を誰が(私に)語ることができようか。」

このように読めば、問題にされているのはあくまで詩人にとって「より念願すべき」人生であって、「誰が詩人自身より幸福に生きているか」という問いと「詩人にとってより念願すべき人生」を「誰が語りうるか」という問いとの間には隔たりはほとんどなくなるのではないか。写本の伝える hac est と me est という異読から見ても hac と mi の両方が伝承上両立しうる読みだった可能性があり、しかもこの文脈において mi 「私にとって」という「私」の強調は直前の me uno を受け継ぎ、また先ほども引いた 68.160 lux **mea**, qua viva vivere dulce **mihi est** とも対応するものとして意味がある。また、mi はこの場合 dicere の間接目的語と

(6) ちなみに、68.159 mihi quae me carior ipso est の表現は、107.3 nobis quoque, carior auro / quod te restituis (Walker [Nisbet, Lyne]) と読む根拠の一つとなる。この読みによって Lesbia はこの詩でも相応しい形容を与えられることになり、この後の o lucem candidiore nota! という言葉がやはり 68.148 quem lapide illa diem candidiore notat に対応することと並行的な呼応関係が成り立つのと同時に、107.3 nobis quoque という伝承通りのテキストも妥当な読みと認められるからである。

しても機能しうる語であり、その点からも「誰が語りうるか」という修辞疑問文の趣旨は要するに詩人にとって「より念願すべき人生」を誰も彼に対して語れはしない、詩人にとってこの人生が最も幸福な人生であることに異論の余地はない、ということであろう。従って「誰が私よりも幸福か(=私以上に幸福な人はいない)」に続いて、「私にとってより念願すべき人生を誰が語れるか(=私にとってこれ以上念願すべき人生はない)」という形で、ほぼ同一の趣旨を異なる表現で述べたにすぎないことになる。すでに(4) Oksala によって *magis hac mi / optandum vita* という提案がなされているが、「この人生」と比較されるべきは特定の「事柄」を指す中性の *optandum* よりもむしろ人生そのものとする方が妥当であろうし、上述のように念願すべきことを「人生」全体にまで拡張している文脈からして *optandum* と読むべきかと思われる。いずれにせよ、この連関においては *mi* は不可欠の一語であると考えられる。

*

*

*

だが、これまで見てきた修正提案はいずれも写本が伝える *hac est / optandus* または *me est / optandus* という読み、特に7行目末尾の *est* の存在にほとんど注意を払ってこなかった。構文上あり得ない語として無視されるか本来の読みから生じた誤記と見なされたのであろう。だが、仮にこの写本伝承が何らかの真正の読みを伝えるものだとするればどうか。もしもこの文脈で *est* が成り立ちうるとすれば、文の途中に挿入句的な詩句が入って来ている場合であろう。そのような詩句の存在を想定したとき、8行目後半の *dicere quis poterit?* の表現は *dicere* によって直接話法を導入した詩句だという可能性が考えられないだろうか。その場合、直接話法の引用はどこから始まると考えるべきだろうか。結論から言えば、(a) *magis* から始まる場合と、(b) *hac* から始まる場合があるように思われる。

そこでまず、(a) *magis* から始まる場合を考えてみたい。上述のいくつかの修正案に準じて考えれば *hac ... vita* を比較の対象と取るか、*hac ... in vita* と読むかによって、次のような可能性があるのではないか。まず

(15) “*magis hac est / optandum vita*” *dicere quis poterit?*

「『この人生以上に念願すべきことがある』と誰が語れるだろうか？」

または

(16) “*magis hac est / optandum in vita*” *dicere quis poterit?*

「『この人生には(それ)よりいっそう念願すべきことがある』と誰が語れるだろうか?」

さらに、上で示唆したように伝承の *me* が本来は *mi* だったとすれば、これらの読みの *hac* の後に *mi* を挿入する可能性も考えられよう。即ち、

(15') "**magis hac mi est / optandum vita**" *dicere quis poterit?*

「『私にはこの人生以上に念願すべきことがある』と誰が語れるだろうか?」

または

(16') "**magis hac mi est / optandum in vita**" *dicere quis poterit?*

「『私にはこの人生において(それ)よりいっそう念願すべきことがある』と誰が語れるだろうか?」

と読むのである。

これらの読みでは *magis ... optandum* と *hac ... (in) vita* という 2 つの *hyperbaton* が組み合わされた中央に当たる *hexameter* の行末に、やや異例な単音節語 *est* が配置されて「存在」を強調する言葉として用いられていると考えられる⁽⁷⁾。意味としては、(15) (15') は「この人生」即ち詩人の人生以上に念願すべきことがある、と言える人など誰もいない、つまり、詩人の今の人生こそが最も念願すべき、幸福な人生だと誰もが認める、ということになり、直前の「誰が私以上に幸福か」に続く自然な文脈を作ると言えよう。また、(16) (16') では「この人生」

(7) 類似した構成の詩句としては、cf. Hor. *Serm.* 2.6.115-6 *tum rusticus: 'haud mihi vita / est opus hac' ait*. この例では *haud mihi ... opus* と *vita ... hac* の中央に当たる(行末以上に強調的な)行の冒頭に *est* が配置されている(直接話法の引用であるのは単なる偶然の一致か)。「存在」を意味する *sum* の用法のカトゥッルスにおける例としては、e.g. 3.2 *et quantum est hominum venustiore*; 86.4 *nulla in tam magno est corpore mica salis* など。行末の単音節語という特殊なリズムによってその意味が強調されていると思われる例としては、cf. e.g. Cic. *Arat. fr.* VII 4 Baehr. *sed nautis usus in hac est*; Hor. *Serm.* 1.2.84 *siquid honesti est*; 2.3.6 *nil est* (cf. 1.5.87 *quod versu dicere non est*); *Epist.* 1.11.29 *quod petis hic est*; etc. 一般に行末の単音節語の効果については、E. Norden, *Vergilius Aeneis Buch VI*, ad 346, 466, Anhang IX, 438ff., 448f.; R. G. Austin (*P. Vergili Maronis Aeneidos Liber primus, quartus, sextus*) ad 4.132, 1.105, 6.346. なお、従来の提案のうちでは (5) *aut magis esse / optandam vitam* が「存在」の意を間接話法で表現した読みだと言えよう。また、最近になって A. J. D'Angour, 'Catullus 107: A Callimachean Reading', *CQ* 50 (2000) 615-8 は 7 行目末に *hypermetric elision* を想定して *aut magis hac esse / optandam vitam* と読むことを提案し、さらにそれを受けて J. L. Butrica, 'Catullus 107.7-8', *CQ* 52 (2002) 608-9 は *aut magi' nostra / vitam esse optandam* を提案しているが、これらの読みでも明らかに *esse* は「存在」の意味を強調した語である。

とは一般的にこの世の人間の生を指し、およそ人生において詩人が経験したこと以上に念願すべき(何か別の)ことがある、と言える人などいない、という趣旨だと理解できよう。つまり、詩人の経験こそが人生で最も念願すべきことだ、という意味になり、直前の「詩人こそが最も幸福だ」に続いて、その幸福の源泉となった経験こそが何よりも願わしい経験であることを強調することで、やはり整合的な文脈を作り出していると考えられる。従って、これらのいずれの読みにおいても、従来の修正読みのうちでは(1)(2)(4)や(10)(11)(12)が目指したのと同様の意味合いが、ただ *optandus* を *optandum* (in) に(あるいはさらに *me* を *mi* に)変更するだけで、ほぼ写本伝承のままで表現されていたことになる。のみならず、先に問題にしたような「誰が生きているか」と「誰が語れるか」の間に何らズレが生じることなく、十分に整合的に理解できる点が重要である。

だが、果たして、このように唐突に直接話法が導入されるような場合があり得るだろうか。それに対しては、次のような諸点を考慮すべきであろう。

[1] *dicere* のような言説動詞が引用の前ではなく、引用の後(あるいは中間)に置かれる例は珍しくない⁽⁸⁾。従って、ある程度引用が進んでから、それが引用だったと気づく例も少なくない。直接話法の引用が唐突に文の途中にその不可欠の構成要素とし導入され、少し先まで進まないとそれが発話の引用だとは気づかれにくいような例は、古代のように *punctuation* の記号の未発達な筆記法であるにも拘わらず、必ずしも珍しくない。例えば、キケローの弁論などの中にもそうした直接話法の引用の例が時折ある：e.g. Phil. 1.34 *Quod videmus etiam in fabula illi ipsi qui ‘oderint, dum metuant’ dixerit perniciosum fuisse* (cf. de off. 1.97). カトウツルスにも 10.13 ‘at certe tamen’ inquit, ‘quod illic / ...’; 24.7 ‘qui? non est homo bellus’ inquit. est; 45.1ff. *suos amores / tenens in gremio ‘mea’ inquit ‘Acme, ...’*, 12 ‘sic’ inquit ‘*mea vita Septimile*’; 55.12 ‘en hic in roseis latet papillis’などの例がある。また例えば、Hor. Serm.1.4.134 ‘rectius hoc est ...’が直接話法であることは、少なくとも次行の *hoc faciens vivam melius* まで聞かないと推測できないだろうし、はっきりとそう確認できるのは引用の後の 137f. *haec ego mecum / compressis agito labris* と語られた時点であろう。Ibid. 2.3.281ff. *Libertinus erat, qui circum compita siccus / ... currebat et ‘unum’/ (‘quid tam magnum?’ addens), ‘unum me surpite mortu!’ dis etenim facile est’ orabat, ...* のような複雑な例も見出される。ちなみに、

(8) *dicere* が直接話法を導入する例は *OLD* s.v. 2; *TLL* s.v. *dico*, 982.33ff. 発話動詞としての *dico* が、直接話法が導入された後に現れる場合については、ibid. 982.68ff.、引用の中間に置かれる場合については、ibid. 983.11ff.

特にオウィディウスには直接話法を詩句のうちに挟み込む形で効果的に用いる例が少なからず見出される：e.g. Am. 2.5.9-10 *felix, ... / cui sua 'non feci' dicere amica potest*; 2.9.25-6 *'Vive' deus 'posito' si quis mihi dicat 'amore', / deprecet*; 2.18.5ff. *saepe meae 'tandem' dixi 'discede' puellae: / ... / saepe 'pudet' dixi: ...*; 3.1.15 *et prior 'ecquis erit' dixit 'tibi finis amandi, / o argumenti lente poeta tui? / ...'*; Epist. 12.136 *ausus es 'Ausonia' dicere 'cede domo!'*; 204 *dos mea: 'Quam' dicam si tibi 'redde', neges*; 17.164 *nil illi potui dicere praeter 'erit'!*; Fast. 4.235 *et modo 'tolle faces', 'remove' modo 'verbera' clamat.*⁽⁹⁾ このように詩人たちは、むしろ何らかの効果を意図してであろうが、直接話法の引用をかなり自由自在に（時には複雑に組み合わせてまで）用いることができたようである。従って、直接話法の始まりがその時点で構文上明確に了解できなくとも、発話の引用が差し挟まれていたことが後から了解されるような場合も十分あり得ると考えられる。カトゥッルスのこの一節について言えば、選言的小辞の直後から直接話法の引用で始まる修辞疑問文が始まることになり、2つの同種の疑問文が *aut* を挟んで結ばれる形になるので、構文的には必ずしも了解し難いとは言えないであろう。

[2] この点を考えるとき、エピグラムの伝統の中にもこうした直接話法が活用される場合が多いことに留意すべきであろう。例えば『ギリシア詞華集』に収められたエピグラムには、しばしば直接話法が用いられ、しかも特に詩の締め括りに、ある人物の発話の引用が置かれる例が少なくない。つまり、直接話法がエピグラムの結末をつける役割を与えられている場合は珍しくないのである⁽¹⁰⁾。

そうしたエピグラムのうちで、カトゥッルスの詩との関連で注目すべき詩を

(9) Cf. *TLL* s.v. *dico*, 983.11ff., esp. 20ff.

(10) 例えば、カッリマコスのエピグラム集には63作品が含まれているが、そのうち何らかの直接話法や語句の引用を含むのは1, 4, 8, 11, 13, 15, 18, 23, 28, 29, 31, 34, 37, 41, 45, 46, 48, 55, 61の19作品におよび、そのうち詩の最後が直接話法に終わるものは4, 13, 18, 28, 34, 37, 46, 55, 61の9作品、最終行でのごく短い引用が効果的に活かされた作品としては28, 48, 55を挙げることができよう。カトゥッルスでは72.7 *qui potis est, inquis?* (cf. 85.1); 94.2 *hoc est quod dicunt: ipsa olera olla legit* に引用と呼びうる詩句が見出されるし、84.1 *chommoda dicebat*, 2 *et insidias Arrius hinsidias*, 4 *dixerat hinsidias* や 86.3 *totum illud 'formosa' nego* も一種の引用と言えるであろう。なお、*polymetra* の中では第10歌や42歌、45歌などに会話や発話の引用が活かされているほか、第53歌でも末尾の引用が効果的である。エレゲイア詩でも第67歌のように直接話法が活用されている例が見出される。

2 つほど見ておきたい。1 つ目は

A.Pl. (A) 236 (= HE, Leonidas of Tarentum 83: 2482-5)

Αὐτοῦ ἐφ' αἵμασιαῖσι τὸν ἀγρυπνοῦντα Πρίηπον

ἔστηεν λαχάνων Δεινομένης φύλακα.

ἀλλ' ὥς ἐντέταμαι, φῶρ, ἔμβλεπε. “Τοῦτο,” δ' ἐρωτᾷς.

“τῶν ὀλίγων λαχάνων εἵνεκα.” τῶν ὀλίγων.

このエピグラムでは、第1連でプリアーポスの像をデイノメネースなる人物が庭園の番人として建てたことが語られた後、第2連ではそのプリアーポスが語り手として盗人に「我が怒張した姿を見よ」と呼びかけ、続いて盗人の問いかけの言葉を代弁して「それは僅かばかりの野菜のためなのか」という直接話法が引用され、それに対して「僅かばかりのだ」という答えで締め括られている。このように人物の対話から構成されたエピグラムもしばしば見られるが、ここでは行の途中から急に直接話法の引用が始まり、その直後に小辞の δ' と直接話法を導く動詞 ἐρωτᾷς が置かれ、それを挟んで引用は次行の半ばまで続いている。これらの特徴には 107 歌の場合と類似する点がある。とりわけ、引用がいきなり hexameter の行末から始まり、直接話法を導く動詞が最初の言葉の後に来るため、前もって直接話法だという目印がないまま引用が始まり、後になってからそれが直接話法だと分かるような行文の先例として注目される。τοῦτο δ' ἐρωτᾷς という詩句を聞いた段階では τοῦτο が直接話法の引用だとは必ずしも理解されず、次行に至ってそれが了解されるのではないか。次に

A.P. 12.36 (= HE, Asclepiades 46: 1026-9)

Νῦν αἰτεῖς, ὅτε λεπτός ὑπὸ κροτάφοισιν ἱούλος

ἔρπει καὶ μηροῖς ὀξὺς ἔπεστι χνόος·

εἶτα λέγει· “Ἥδιον ἐμοὶ τόδε.” καὶ τίς ἂν εἴποι

κρείσσονα ἀνχμηρὰς ἀσταχύων καλάμας;

このエピグラムでは、青年期に成長した今頃になって恋人を誘う少年が「僕には今の方が嬉しい」と語る台詞が引用されている。詩人(語り手)は相手の少年にもっと早い段階で応じてもらいたかったらしく、「(髭や太股の)剛毛の方がいいと言う人などいるだろうか」という問いで締め括っている。一見カト

ウツルスの 107 歌とは無関係な詩のようにも見えるが、いくつかの表現の類似性などから、あるいは 107 歌の発想を促した詩である可能性さえ否定できないように思われる。なぜなら、少年の台詞 "Ἡδίων ἐμοὶ τόδε は magis ... (mi) est / optandum と比較の表現や意味内容の点でも類似した要素を含み、また、結びの詩句 καὶ τίς ἂν εἴποι κρείσσονα ... καλάμας; は Catull. 107. 7-8 magis ... dicere quis poterit? と同様の「誰が語れるだろうか」という問いかけであり、「語れる」ことの内容に比較級を含む点でも共通している。そう考えると、冒頭の Νῦν αἰτεῖς という言葉も、少年が青年期の始まりを迎えた「今頃になって誘ってくれた」ということであるなら、思いがけなく詩人の恋に応えてくれたという状況を述べていて、やはり思いがけなくレスビアと仲直りができたカトウツルスの状況と類似すると言える。なるほど、カトウツルスがその思いがけない念願成就に欣喜雀躍しているのに対して Asclepiades の詩の語り手はもっと早いほうがよかったといささか不満げである。また、引用された台詞は相手の少年の言葉であり、しかも直前の εἶτα λέγεις によって引用であることが予め明示されており、107 歌の場合のように τίς ἂν εἴποι (= dicere quis poterit?) によって引用が導入されているわけでもない。しかし、これらの類似性、特に直接話法の引用が活かされている点や修辞疑問文で締め括られている点などは、こうした工夫がエピグラムには凝らされる場合があることを示し、カトウツルスの第 107 歌に見られる同様の仕掛けの先例の一つとして認められるのではないか。

以上のことから考えて、直接話法が時として不意に導入されることは十分あり得ると判断できるだろう。従って、写本伝承を尊重する立場からは、上記の (15) (16) あるいは (15') (16')、中でも最も伝承との相違が小さく、内容的にも比較的単純明快な読みとして、(15) が真正の読みに近いと見るのが穏当な判断なのではないかと思われる⁽¹¹⁾。しかしまた、冒頭の optanti との呼応関係を重視して「事柄・出来事」が「念願すべきこと」であるとする見方からは (16) も無視できない。

(11) 以上の考察を含めた本稿全体を書き終えた後になって、この (15) がすでに Ghiselli によって提案されていた読みであることを見落としていたことに気付いた：A. Ghiselli, 'Il c. 107 di Catullo', *Filologia e forme letterarie: Studi offerti a F. Della Corte*, Vol. 2 (Florence, 1988) 339-48(筆者未見、A. J. D'Angour, *CQ* 50 (2000) 616 による)。論述の都合上、当初の議論展開をそのまま保つことをお許し願いたい。

さて、次に上述の (b) の場合、つまり直接話法が hac から始まるという可能性も考慮しておきたい。なぜなら、magis の比較の対象となる hac ... vita ではなく、hac ... in vita と読む場合には、直接話法が magis からではなく、その直後から始まることも考えられるように思われるからである。即ち、

(17) magis “**hac est / optandum in vita**” dicere quis poterit?

「私以上に『この人生には念願すべきことがある』と誰が語れるだろうか？」
この場合にもまた、mi を読み込むとするなら、

(17') magis “**hac mi est / optandum in vita**” dicere quis poterit?

「私以上に『この人生には私にとって念願すべきことがある』と誰が語れるだろうか？」

の可能性もある。これらの場合には、magis は従来のように optandum にかかる比較級ではなく、後続の動詞 dicere ... poterit にかかる副詞として「よりいっそう(強く、正当に)語れる」の意を表す。その比較の対象は、直前の me uno ... felicior に続く文脈から magis = magis me と理解できるであろう。韻律に合わせ伝承読み magis me est は magis = magis me だと説明する注記に由来するものと想定できるかも知れない。

このように読むと、magis から引用が始まるとする場合のように、直前の me uno ... felicior に続くはずの比較級 magis が第三者の発言の中に移動するのではなく、詩人自身による 2 つの修辞疑問文の中に並列にそれぞれ比較級が含まれることになる。つまり、「誰が私よりも幸福に生きているか」と「誰が私以上に語れるか」という 2 つの問いかけにより、「詩人ほど幸福な人はない(詩人が最も幸福だ)」「詩人ほどこう語れる人はいない(詩人こそが誰にもましてこう語れる)」という趣旨となる。その誰よりも詩人が一番語れることが「この人生には(私にとって)念願すべきことがある」という言葉であるのは、このエピグラムの冒頭からの文脈を考慮するとき、やはり整合的に理解できる言葉だと思われる。なぜなら、詩人は冒頭から「熱望し念願はしていても」「期待はしていない」ことを繰り返し強調していた。強く熱望し念願はしても、その実現に確信は持てなかったのである。しかし、思いがけなくもその念願が実現したことによって、彼は誰にも勝る大きな幸福を感じに至った。その高揚した幸福感を語る締め括りの一節において、詩人が誰よりも強く主張できることが「この人生には念願すべきことがある」という言葉だったとすれば、それはこのエピグラムの冒頭からの展開に合致した締め括りと言えよう。つまり、magis ... dicere quis poterit? という修辞疑問は、かつて念願の実現に確信が持てなかった詩人が、

今や誰よりも強い確信をもって「人生には念願すべきことがある (= 念願は実現しうる)」と語れるに至ったその変化の大きさ・激しさを表現するものとなる。その意味で、この読みもまた、エピグラムの締め括りとして効果的な結末を作り上げる読みと言えるのではないか。

だがこの読みの難点は、先の (15) (16) の場合と違って、構文上明確な切れ目とは言えない *magis* の直後から新たな文法的構成要素が始まることと、*magis ... dicere* という *hyperbaton* を認めなければならない点であろう。しかし、これも必ずしもあり得ないこととは言えない。なぜなら、〔1〕 *magis ... dicere* はすでに idiomatic な表現として確立していたらしく、その途中に直接話法が引用されるのも詩人による大胆な工夫だったかも知れないからであり、また〔2〕このように直接話法を挟む *hyperbaton* にも類例が見出されるからである。

〔1〕 *magis ... dicere* という表現については、*TLL* s.v. *magis*, 55.64ff. を参照のこと。そこでは、*fere i.q. rectius, iustius* として、Plaut. Capt. 871 *olim si advenissem, magis tu tum istuc diceret*; Mil. 1429 [*magis <id> dicas, si scias quod ego scio*], Pseud. 949 [*immo si efficies, tum faxo magis <id> dicas*], Cic. Lael. 25 [*tum magis id diceret, Fanni, si nuper in hortis Scipionis, cum est de republica disputatum, adfuisses*], Sen. contr. 2.6.3 [*Convivae certe tui dicunt, 'vivamus, moriendum est'; hoc nulli magis in domo dicitur quam mihi*], Cypr. Epist. 75.24.2 [... *ut de nullo alio magis quam de te dicat scriptura divina: 'homo animosus parat lites, et vir iracundus exaggerat peccata'*] を挙げている。最後の例は *magis ... dicere* が直接話法を伴う例と見ることもできよう。多くの例では *si ...* などに導かれた条件節の帰結節で「(そういう場合には) もっと正当にそう言える」という表現だが、「誰が私以上に (正当に・強く) こう言えるだろうか」という言い方も可能なはずである。なぜなら、「誰が私より幸福か」に続く「誰が私よりも正当にこう言えるか」という問いは、「誰かもし私より幸福な人がいたなら」その人は「私より正当にこう言えるだろう」、だが「誰かそう言える人がいるだろうか」という繋がりを、いわば縮約した問いだと了解できるからである。即ち、*quis me uno vivit felicior? > si quis vivit felicior, magis dicere poterit > quis poterit?* という連鎖である。このように、*aut magis ... dicere quis poterit?* は直前の *quis me uno vivit felicior* の比較級を受けて語られている点が重要である。つまり、*me uno ... felicior* に続く *aut magis* は「誰が私より幸福か」に続いて「あるいは (誰が私) より以上に」という問いを繋げていくが、その直後は直接話法の引用となり、それを挟んだ *dicere quis poterit?* によって最初の問いとの対応が完成することになる。このように直前の文脈との繋がりで直

接話法が唐突に引用される類似例としては、Hor. Serm. 1.3.11-5 *modo reges atque tetrarchas, / omnia magna loquens, modo 'sit mihi mensa tripes et / concha salis pura toga quae defendere frigus, / quamvis crassa, queat.'* を挙げることができよう。この場合には *modo ... modo ...* の呼応関係が、ちょうど *felicior* と *aut magis* の呼応関係に当たる。ただ、こちらではその途中で *omnia magna loquens* という文言が入ってくることで直接話法の引用が了解しやすくなるとは言えるだろうが、前半との呼応関係を示す *modo* の直後から急に直接話法が始まる点では類似していると言えよう。

〔2〕 *magis ... dicere* という *hyperbaton* が認めうるかという問題だが、これについてはまず、カトゥッルスやホラーティウスには時折、驚くべき語順の *dislocation* が見られること、それにはヘレニズム詩の先例があることに注意すべきであろう⁽¹²⁾。しかし、この場合には *magis* と *dicere* の間にまさに「より正当に語りうる」とされる文言が直接話法で引用される形になるので、上記の Plaut. Capt. 871 *magis tu tum istuc diceris* で目的語 *istuc* が間に挟まれているのと結局は同じである。Mil. 1429 *magis <id> dicas*, Pseud. 949 *magis <id> dicas* も補正読みを取れば同様であり、Cic. Lael. 25 *tum magis id diceris*, Fanni, ni ... もそうである。とすれば、むしろ「より正当に語れる」という言い方の *magis ... dicere* が通常その間に目的語を置く語順をそのまま活かしつつ、目的語の部分に直接話法を挿入した詩句だと言えるかも知れない。実際に、短いながら直接話法と言える文言が挟まる例も見出される：Plaut. Trin. 537-8 PH. *apage a me istum agrum! :: / ST. magis 'apage' dicas, si omnia ex me audiveris*. なお、直接話法を挟んで副詞と動詞が分離するような構文の例としては、Ov. Fast. 3.475 *nunc quoque 'nulla viro' clamabo 'femina credat'*; Met. 10.274ff. *et timide 'si, di, dare cuncta potestis, / sit coniunx, opto' non ausus 'eburnea virgo' / dicere Pygmalion 'similis mea' dixit 'eburnae.'* が挙げられよう⁽¹³⁾。この2番目の例のように、直接話法が副詞と動詞の間に長く引用されることで(しかもこの場合には主語も引用の中間に、しかも分詞構文を伴う形で置かれ、重要な文言が引用の最後に回されるという工夫も凝らされることで)効果的な叙述を作り出す場合もあることが分かる。

以上のような例から見て、*magis ... dicere* の間に直接話法がやや意外性をもって挟み込まれるような詩句をカトゥッルスが工夫したことは十分考え得るので

(12) Cf. Fordyce ad 44.8f., 66.18; Thomson ad 1.9.

(13) Cf. Fast. 6.443 *et magna 'succurrite' voce / 'non est auxilium flere,' Metellus ait*.

はないか。あくまでも一つの可能性としてではあるが、上記 (17) (17') のような読みもまた一考に値する点があるように思われる。

* * *

さてしかし、これら (15)(16)(17) などの読みは、上述のように確かに整合的な文脈を作るとは思われるが、「詩人の人生よりも」あるいは「この人生にはよりいっそう」「念願すべきことがある」と誰も語れはしない、あるいは、誰も詩人以上に「この人生には念願すべきことがある」と語れはしない、という結末は、エピグラムの締め括りとして必ずしも最適だとは思えない。それは恐らく、一つには不特定の「より念願すべきことがある」という表現が焦点の定まらぬ漠然とした印象を与えるからであろう。なるほど、漠然たる「念願すべきこと」が問題とされるのは冒頭の *quicquam* という不定代名詞に呼応していて、結末に至って何らか確かに「念願すべきことがある」ということが詩人自身の経験との関わりで改めて問題にされている、と見ることもできよう。しかし、「いったい誰が語れるか (= 誰にもそうは語れない)」という修辞疑問の内容としてやや具体性に乏しく、エピグラムの結末として今ひとつ不明確で的確さや鋭さに欠けるように思われる。また、「人生」と比較する読みでは、直前の「誰が私以上に幸福に生きているか」とは適合するとしても、詩全体との繋がりには弱いように思われる。なぜなら、先にも触れたように、冒頭では「念願」とは「念願する人に何事かが起こる (*quicquam ... optanti optigit*)」ことであつたのに、この結末ではそれが「人生」と比較されるようなものに増幅している点が首尾一貫しない印象を与えるからであろう。むしろ上述のように詩人の幸福感が「人生」全体にまで誇張して語られていて、その高揚感こそが詩の結末で強調されている、という解釈も可能ではあろうが、エピグラムとしての統一性や結末の効果という点からはやはり疑問が残るように思われるのである。

そこで、敢えて写本からは遠ざかるけれども、もう一つ別の角度からの修正の可能性を検討しておきたい。それは、伝承の *hac* は *vita* に引かれて女性形に書き換えられたものであり、本来は *hoc* であつたと想定する読みである⁽¹⁴⁾。この

(14) 例えば省略字体では *hoc* と *hac* はそれぞれ *h* の上に小さな *o* か *a* を記すものだったとすれば (cf. B. Bischoff, *Latin Palaeography*, Cambridge 1990, 159)、前後の文言に影響されるなどして両者が紛れる可能性も少なくなかったと思われる。なお、*hoc* への読み替えにより *hac ... vita* は成り立たないので、8 行目は *optandum in*

場合も *mi* を補う可能性を含めれば、次のような読みが考えられよう。即ち、直接話法の始まりの位置の相違により 3 種類の読みが可能であろう。まずは

(18[18']) "**magis hoc (mi) est / optandum in vita**" dicere quis poterit?

または

(19[19']) **magis "hoc (mi) est / optandum in vita"** dicere quis poterit?

さらには

(20[20']) **magis hoc (me) "est / optandum in vita"** dicere quis poterit?

と読む可能性が考えられる⁽¹⁵⁾。

これらのどれも、それぞれに理解可能な意味をなすと思われるが、結論から言えば、(19) が最も興味深い読みであるように思われる。だが、その含意を検討する前に一応 (18) (20) にも触れておきたい。

まず、(18) (18') のように読む場合には、*hoc* を主格と取るか奪格と取るかによって、『(私には)むしろこのことの方が人生においていっそう念願すべきことだ』と誰が語れるだろうか?』または『(私には) このこと以上に人生において念願すべきことがある』と誰が語れるだろうか?』と二通りに解することが可能であろう。だがいずれにせよ、詩人ほど幸福な人はいない、と言ったあと、詩人を幸福にした経験以上に人生において念願すべき別の事柄を指摘できる人などいないはずだ、という趣旨に理解できる。ただし、前者の解釈では *hoc est* の *hoc* は 2-3 行目で語られた *hoc* ではなく、何らか別の内容をさす言葉となり、その点で同じ *hoc est* の表現が違う対象を示すことであるいはエピグラムとして

vita と読むことになる。

(15) ちなみに、*hoc est* の *hoc* は韻律上長音節に当たる (cf. Catull. 76.15, 83.6, 94.2; TLL s.v. hic, 2695.70, 2697.18; LHS I 220)。当のこの 107 歌自体においても、2 *insperanti, hoc est*, 3 *quare hoc est* の *hoc* も (また 3 *nobisque hoc* (Statius) と読んだ場合や、さらにおそらく 100.3 *sororem. hoc est* の *hoc* も同様に) やはり長音節であろう。従って、この詩の末尾にもう一度 *hoc est* が同一の韻律で現れることは予め準備されていたとも考えられる。また、カトウツルスは何度か「つまり、即ち」の意味の用法を含めて *hoc est* ... を多用しているだけでなく (31.11, 42.15, 76.15, 83.6, 94.2, 100.3, 107.2, 3; cf. 68.34 *hoc fit*)、そのうちの 2 箇所においては *hoc est* + *gerundivum* の構文を用いており (42.15 *sed non est tamen hoc satis putandum*, 76.15 *una salus haec est, hoc est tibi pervincendum*)、詩人にとってなじみの表現だった可能性もある。この詩の構造上も *hoc est* が 2-3 行目の *hoc est gratum* に呼応する形で効果を持つことについては後述するが、特に (19) の読みではこの呼応関係が重要だと考えられるので、その途中で *mi* が介在する可能性は以下では除外して考えることにしたい。

の面白みに繋がると言えるかも知れない⁽¹⁶⁾。つまり、詩人が2度にわたって *hoc est gratum ...* と言ったことに対する反論が、別の人物の口からは別の内容について *hoc est /optandum* という異なる表現で主張されることになる(しかし、詩人自身はそのような人物が現れるはずはないと考えている)というわけだからである。また後者の解釈では、詩人が語った *hoc est gratum ...* と同じ *hoc* を比較の対象として、それ以上に念願すべき別の何事かを語れる人の存在を詩人は否定していることになる。すると結局、詩人は直前で自分こそが最も幸福だ、と言った後、自分の経験以上に「念願すべきこと」などあり得ない、そんな何事かを語れる人などいない、と言っていることになり、文脈上もやはり整合的に理解できる。どちらの解釈を取るにせよ、この読みの利点は先にも見た (15) (16) と同様に、直接話法の引用が *aut* の直後から始まることで、文の区切りと引用の開始時点が一致し、また *magis* と *dicere* の *hyperbaton* を想定せずに済むなど、構文上了解しやすい点であろう。しかしその逆に、*magis* から引用が始まるとすると、直前の *me uno ... felicior* に続く比較の趣旨が詩人自身ではなく第三者の発言の中に移行してしまう点がやはり問題かもしれない。

次に、(20) のように読む場合、*magis hoc* は直前の *me uno ... felicior* に続き、それを受けた *hoc = hoc homine = me* によって「この私以上に」ということを再度強調する表現だと考えられる⁽¹⁷⁾。先にも触れた *magis me est* という韻律に合わない伝承読みはこの場合には *magis hoc* が *magis me* の意味だという注記に由来するものと説明できるかも知れない。しかし、(20') はこの *hoc* にさらに同格の *me* を付加して *magis hoc me*, “*est / ...*” と読むものだが、*hoc me* が「この私」の意味となる例はあり得ないとは言えないが極めて稀のようである⁽¹⁸⁾。また、この (20) (20') では行末の *est* から引用が始まると想定するわけだが、そのような例も恐らくあまりないだろう⁽¹⁹⁾。だが他方で、行末の単音節語 *est* が「存在」の意

(16) 上述の Asclepiades のエピグラム (AP 12.36 = *HE*, Asclepiades 46: 1026-9) での少年の言葉 “*Ἡδίων ἐμοὶ τόδε*” とこの *hoc mi est / optandum* が表現・内容とも類似するのも興味深い。

(17) *hic = ego* については、cf. *TLL* s.v. *hic*, 2703, 40ff. 特に直前に人称代名詞 *ego* (あるいは動詞の一人称) が先行していて *hic* がその一人称を指す場合については、*ibid.* 79ff.

(18) Cf. *ibid.* 67f.

(19) しかし、行末の *est* から新たな詩句が始まる例は見出されるから、あり得ないことではない: Catull. 24.7 ‘*quid? non est homo bellus?*’ inquires. *est*:/...; Hor. *Serm.* 2.5.103-4 *est / gaudia prodentem voltum celare*; cf. *Epist.* 1.17.37-8 ‘*esto. / quid? qui*

味を強調しつつ行跨りで引用が続くのは、その表現の大胆さの点ではむしろ効果的だと言えるかも知れない。しかし、この読みでは何らか「念願すべきことがある」という漠然たる発言になるという上述の問題が生じてしまう。

さてそれでは、(19)のように *hoc est / optandum in vita* が直接話法の引用だと見る場合はどうであろうか。この読みで注目すべき点としては、次のようなことが考えられるのではないか。

〔1〕すでに (17) について見たように、*magis ... dicere quis poterit?* は、冒頭から繰り返し語られたような「熱望し念願はしていても」「期待はしていない」という詩人の自信のなさ、いわばその念願が真に「念願すべきこと」であるとは確信できなかった状況から、思いがけないその実現により、一転して強い確信を得るに至った大きな変化を語る言葉と解される。その詩人が、今や誰よりも確信をもって語れる言葉としては (17) のように何らか「人生には念願すべきことがある」という漠然たる台詞ではなく、むしろ実際の具体的経験を踏まえた「これこそが人生において念願すべきことだ」という言葉の方がふさわしいであろう。つまり詩人は、自分が抱いてきたレスビアとの和解という念願が実現した今、それこそがまさに「念願すべきことだ」と全肯定できる点で誰にも引けを取らない、と言うのである。それは、自分ほど幸せな経験を語る人はいない、と言うに等しい。こうして、「誰よりも語れる人」は「誰よりも幸福な人」の言い換えにほかならないことになる。

〔2〕従って、「誰が私以上に幸福に生きているか」と「誰が語れるか」の間の齟齬の問題が解消するのはもちろんだが、その2つの修辞疑問文の結びつきも、これまで見てきた (15) (16) (17) (18) などよりもいっそう緊密になる。2つの疑問文は比較級によって最上級を意味する趣旨や、*vivit* に対応する *in vita* 「人生」という契機で結ばれているが、6行目までに語られた思いがけない念願成就が「誰よりも幸福だ」という喜びに繋がったのだから、それに続けてその幸福の源である具体的な経験が言及されるのはむしろ当然である。逆に言えば、誰にもまして詩人が語りうることが何らか「念願すべきこと」であるならば、その念願の対象や比較の対象が、従来の修正提案 (A) や上記の (15) などのように、「このような(幸福な)人生」だというのは、冒頭で言及された「念願していること」とは必ずしも適合しない。なぜなら、詩人は最初からそうした「幸福な生」を

ではなく、レスビアとの仲直りと再会という一事だけを期待できないと思いつつも熱望し念願していたのであり、幸福な生はその思いがけない結果にすぎないからである。あまりの幸福感ゆえに高揚して、今のこの幸福な人生こそが「最も念願すべきことだ」とまで誇張して言っているのだとすれば、冒頭の *optanti* と最後の *optandum* の対象はかけ離れたものになってしまう。それに対して、まさに本来の念願を指す行末の *hoc est* に始まり行跨りによって「これこそが人生において念願すべきことだ」と強調する台詞の引用は、1 *optanti* および 2-3 *hoc est gratum ...* に呼応して「誰よりも詩人こそが語りうること」としてエピグラムの文脈の展開にぴったりと合致する。

[3] このように、この詩の全体的な構造という面からも、この読みの妥当性を考えることができる。この最後の直接話法の中で *hoc est /optandum in vita* と語られたとすれば、この *hoc* とは明らかに、冒頭で *si quicquam ...* として導入され、2 *hoc est gratum animo proprie* と語られた「思いがけなく実現したある念願」という一般的な事柄に対応し、さらに3行目以下で再び *hoc est gratum ... / quod ...* という形で語られた具体的な詩人の経験、つまり「思いがけなくレスビアが戻ってきた」という事実を指す言葉として明確に了解される言葉である。従って、ここで唐突に何の目印もなく直接話法に切り替わることがこの読みの難点として考えられるのは確かだが、*hoc est ...* が2行目と3行目に繰り返された *hoc est gratum* に続き、明らかにそれに呼応する形で独立した言明の冒頭の言葉として置かれた語句、即ち直接話法の引用の始まりを示すヒントとして機能している可能性が考えられる。先に見たギリシア詞華集のエピグラムでも、直接話法が不意に *τοῦτο* で始まっていたことが想起されよう。こうして、第1連の *si quicquam ... / ... hoc est gratum ...* という不特定なものが、第2連では *hoc est gratum ... / quod ...* という具体的事実に関わり、それがこの最終連に至って *optanti* と *optandum* の呼応関係を軸に、改めて *hoc est / optandum ...* という形で言及されることで、詩全体のうちに緊密な連関が生まれ、エピグラムとしての一貫性と統一性が作り出されるとともに、詩の結末も具体的で明確な印象を与えることになる。

[4] これをまた少し別の角度から見れば、次のようにも言えるだろう。直接話法が *hoc est ...* で始まっているとすると、*hoc* の内容は「熱望し念願していたが期待はしていなかったことの思いがけない実現」とも理解できる。このエピグラムでは冒頭からその趣旨が繰り返しの表現によって強調されていたのである。その締め括りとして、詩人が今や誰よりも確信をもって「これこそが人生

において念願すべきことだ」と語れる、と言うとき、その意味するところは、真に「念願すべきこと」とは、言うなれば実現可能性の高い事柄などではなく、むしろ逆に、強く熱望してはいても実現しそうにない念願、期待の持てない願望だ、ということになるであろう。なぜならば、期待の持てない念願こそが、そうであるだけにいつそう、思いがけなく実現したときの喜びと幸福感が大きいからである。つまり、エピグラム全体の趣旨として、冒頭からの文脈の流れを受けて、「これ」即ち「期待の持てない念願の思いがけない実現」こそが人生において真に「念願すべきこと」だという一種逆説的な結論に至っている、という点においても、この読みは詩の締め括りとして機知に富む効果的な詩句となっていると考えられる。

[5] 最後が *dicere quis poterit?* で終わっているのはなぜか。ことさらに「語れる」つまり何かある言明をなしうるか否かがなぜ問題にされるのか。もし (19) のように読むならば、この最後の修辞疑問文はそこに引用される直接話法の言葉を詩人こそが誰よりも強く語りうることを述べているのであるから、結局は詩人自身の言明が引用されているのと同じことになる。従って、その引用句はすでに語られた詩人の 2 つの言明 2 *hoc est gratum animo proprie*, 3 *hoc est gratum* に対応し、それを言い直した言葉であるからこそ、特に最後の修辞疑問文中の引用句の形で強調されているのではないか。レスビアとの思いがけない恋の喜びに満ちた高揚感の中で、詩人が最後に語れるに至った言葉を印象的に表現するために、最後は *dicere quis poterit?* という問いで締め括られているのではないか。とすれば、これもまたエピグラム全体の緊密な統一性を形作りつつ、最後を具体的で確固たる言明を印象的に提示することで作品全体を引き締める役割を担っていると言えるかも知れない⁽²⁰⁾。

以上、Catull.107.7-8 の詩句の読みと解釈の問題について検討してきた。従来の修正提案に加えて、新たに想定された読みとしては次のようなものが提示された。

(20) 査読者のお一人から、「念願の実現」が 1 *optigit*, 7 *vivit*, 8 *poterit* と過去、現在、未来の 3 つの時制で言及されているとの有益な指摘を頂いた。4 *restituis*, 5 *restituis ... refers* などの現在形をも考慮すると、このことはこのエピグラム全体の構造にも関わると考えられる。結末の *poterit* という未来形は (上述の (8) Lyne もその点を重視していたが)、「思いがけない念願の実現」を経験した詩人が 2 行目の一般論から 3 行目の個人的感慨を経て、最後の新たな言明を未来にまで妥当する確信として提示していることを示したものと見えよう。

(13[13']) **magis hac re / optandum [rem / optandam] in vita dicere** quis poterit?

(14) **magis hac mi / optandam** vita dicere quis poterit?

(15[15']) **“magis hac (mi) est / optandum vita”** dicere quis poterit?

(16[16']) **“magis hac (mi) est / optandum in vita”** dicere quis poterit?

(17[17']) **magis “hac (mi) est / optandum in vita”** dicere quis poterit?

(18[18']) **“magis hoc (mi) est / optandum in vita”** dicere quis poterit?

(19) **magis “hoc est / optandum in vita”** dicere quis poterit?

(20[20']) **magis hoc (me) “est / optandum in vita”** dicere quis poterit?

いずれも、詩全体の一貫性、特に直前の修辞疑問文との整合性に配慮した読みだが、特に (15) 以下は写本伝承が真正の読みを伝えている可能性を前提に直接話法の引用を読み取ろうとするものであった。その中では (15) が最も穏当かと思われるが、エピグラムの締め括りの効果や面白みを考慮した場合には (16) (17)(18)(19) なども考慮に値するであろう。とりわけ (19) は、もちろん *magis ... dicere* という *hyperbaton* が容認できると仮定した場合ではあるが、エピグラム全体の緊密な統一性と結末として効果的な締め括りを作り出す読みと言えるように思われる。

(首都大学東京)

プロタゴラス『神々について』断片と伝承

納富信留

1、プロタゴラスの著作『神々について』

プロタゴラスについて、ディオゲネス・ラエルティオス (DL)『哲学者列伝』は「現存する彼の書物」として 12 の著作名を報告している⁽¹⁾。ディオゲネスは、それらの内容を報告していないが、『真理』と『神々について』からは冒頭の 1 節を引用している。この 2 つの主著はおそらくプロタゴラスの死後に失われ、ディオゲネスも直接参照できなかったものと推測されるが、その 2 つの「断片」を古代の著述家たちはプロタゴラスの教説としてくり返し言及、批判してきた。「人間尺度説」として知られる『真理』冒頭部 (DK. 80B1) は、同時代のプラトンが『テアイテトス』で引用の形で報告しているため、後世ではそれを典拠にほぼ一定の扱いがなされていたが、『神々について』からの引用は不安定で問題が多い⁽²⁾。

私はライデン大学と共同でプロタゴラス証言集を編纂するにあたって、『神々について』を何らかの形で引用したり、それに明示的に言及する古代の証言を 18 箇所特定した⁽³⁾。本論考はそれらを逐一検討することで、プロタゴラスの 1 節

(1) DL. 9.55:『争論の技術』『レスリングについて』『数学について』『国制について』『名譽欲について』『諸徳について』『原初の状態について』『冥府の事について』『人々に正しくない行ないを為す者について』『教訓』『報酬の為の法廷弁論』『反論の技術』全 2 巻。ディオゲネス・ラエルティオス「プロタゴラス伝」については、拙論「プロタゴラス伝註解－古代哲学資料研究序説－」『フィロロギカ』2 号、2007 年のテキスト・訳・註を参照。

(2) 2007 年 7 月にライデン大学で開催されたプロタゴラスについての国際学会で、私は「断片 1：人間尺度説」に関する伝承史を検討した：“A Protagonist of the Sophistic Movement?: Protagoras in Historiography”。『神々について』の断片は、拙論「プロタゴラス伝註解」の註 13 で簡単に扱ったが、その議論は十分とは言えない。

(3) プロタゴラスについては、H.Diels & W.Kranz (DK. と略), *Die Fragmente der Vorsokratiker* II, Weidmann, Dublin/Zürich, 6. Aufl. 1952 で 50 余りの証言と 7 つ程の断片が編纂されており、現在でも広く用いられている。M.Untersteiner, *Sofisti, testimonianze e frammenti I: Protagora e Senade*, introduzione, traduzione e commento, La Nuova Italia, Firenze, 1^a ed. 1949, 2^a ed. 1961 も基本的にディールスの資料集に依拠している。A.Capizzi (Cap. と略), *Protagora, le testimonianze e i frammenti*, edizione riveduta e ampliata con uno studio su la vita, le opere, il pensiero e la fortuna,

がどう伝承されたかを検証する。以下、この著作に関わる後世の言及のうち、元の語句を何らかの形で用いていると判断されるものを T (証言)、他の関連言及を R (参考) として紹介する。

『神々について』冒頭の 1 節は、プラトンの暗示に始まり前 1 世紀のキケロ以降くり返し取り上げられてきたが、同一語句での引用はない。私たちが参照するディールスとクランツ『ソクラテス以前哲学者の断片集』の「断片 4」も、再構成によって作り上げられた復元案なのである。

【DK. 80B4】

περὶ μὲν θεῶν οὐκ ἔχω εἰδέναι, οὐθ' ὥς εἰσὶν οὐθ' ὥς οὐκ εἰσὶν οὐθ' ὅποιοί
τινες ιδέαν· πολλὰ γὰρ τὰ κωλύοντα εἰδέναι ἢ τ' ἀδηλότης καὶ βραχύς ὢν ὁ
βίος τοῦ ἀνθρώπου.

ディールスは、DL とエウセビオス『福音の準備』の 1 引用を接合させて「断片 4」としたが、どちらも少しづつ変えて用いている。だが、ディールスの復元作業は網羅的ではなかったため、後に触れるように資料の扱いに重要な欠落があり、私たちは再度全資料を慎重に検討する必要がある⁽⁴⁾。

半世紀後にプロタゴラスの証言を編集したカピッシによる復元案も見ておこう。

【Cap. B7 (p.207; cf. p.101, n.2)】

περὶ μὲν θεῶν οὐκ ἔχω εἰδέναι οὐθ' ὥς εἰσὶν οὐθ' ὥς οὐκ εἰσὶν οὐθ' ὅποιοί
τινες ιδέαν· πολλὰ γὰρ τὰ κωλύοντά με ἕκαστον τοῦτον εἰδέναι.

現存する証言がどれも異なった形での報告を与えているという事実は、私たちにいくつかの仮説を許す。まず、プロタゴラスのこの著作は早い時点で消滅してしまい、冒頭の箇所だけが間接的に後世に伝えられたことが想定される。多様で不安定な伝承は、各引用者がおそらく原本からではなく、記憶での言及や孫引きをくり返した結果と考えられるからである。『真理』断片の場合とは異

G.C.Santoni, Firenze, 1955 が 40 程の証言を付加して DK. を再検討したが、イタリアでの出版ということもあり、一般に用いられるには至っていない。

(4) ディールスが復元に用いたのは、DL.9.51 (T1) と Eusebius, *Praeparatio evangelica* (PE), 14.3.7 (T11) の 2 つであったが、カピッシ、101-102, n.2 が指摘しているように、DK. はより重要な Eusebius, PE. 14.19.10 (=Aristocles, *De philosophia*, T12) を用いていない(註 35 参照)。ディールスが 1903 年に編纂した初版(74B4, p.519)では 6 語目の“εἰδέναι”が抜けているが、これは単なる欠落であろう。復元案はその時点から固まっていたことが判る。

なり、プラトンやアリストテレスに引用されない中で、別の系譜で引用が伝承されていた。

『神々について』冒頭部を現存証言から再検討する場合、以上のような制約を十分に意識しながら、引用の背景や意図や文脈に細心の注意を払う必要がある。ここでは「断片」の再構成という(ディールスが最重視した)目標にも増して、教説としての扱われ方という伝承史に焦点を当て、現存テキストの網羅的な分析から迫っていく。その作業では、古代後期に盛んになる「不敬神裁判、無神論者」といった話題を追うことも重要となる。ただ、今回はプロタゴラスを離れてその主題を独立に精査することは控える。また、プロタゴラスが前5世紀後半に、どのような背景から、どのような趣旨の主張を展開したのか、元の文脈の検討も必要となる。この課題にも別の論文で取り組みたい。

プロタゴラスが『神々について』と呼ばれる作品を著し、それをアテナイで発表して物議をかもしたことは、諸証言から疑いない。まず、後3世紀、ディオゲネス・ラエルティオスの2つの言及を見よう。

【T1 : Diogenes Laertius, *Vitae philosophorum* 9.51-52 = DK.80A1】

καὶ ἀλλαχοῦ δὲ τοῦτον ἤρξατο τὸν τρόπον· “περὶ μὲν θεῶν οὐκ ἔχω εἰδέναι οὔθ’ ὥς εἰσὶν οὔθ’ ὥς οὐκ εἰσὶν.”⁽⁵⁾ πολλὰ γὰρ τὰ κωλύοντα εἰδέναι, ἢ τ’ ἀδηλότης καὶ βραχύς ὢν ὁ βίος τοῦ ἀνθρώπου”. διὰ ταύτην δὲ τὴν ἀρχὴν τοῦ συγγράμματος ἐξεβλήθη πρὸς Ἀθηναίων, καὶ τὰ βιβλία αὐτοῦ κατέκαυσαν ἐν τῇ ἀγορᾷ ὑπὸ κήρυκι ἀναλεξάμενοι παρ’ ἐκάστου τῶν κεκτημένων.

また、別の箇所では、次の仕方ではじめていた。「神々について私は、あるとも、ないとも、知ることができない。知るには障害が多いから。その不明瞭さや、人間の生が短いこと」。その書き物のこの冒頭部故に、彼はアテナイ人たちから追放処分にあった。そして、彼らは彼の書物を公共広場で焼却した。伝達官の命で各所有者から回収して。

ディオゲネス (T1, R1) と、後に見るキケロ (T5)、エウセビオス (T11, 12)、スダ (T18) から、この引用部が著作の冒頭にあったことが確認される。また、この主張の含意が不敬神にあたるとしてアテナイで問題となり、おそらくは裁判にかけられて追放処分を受け、あるいは、焚書もなされたとされる。問題作とし

(5) εἶθ’ ... εἶθ’ (あるか、ないか), FD: οὔθ’ ... οὔθ’, BP; エウセビオスの引用と合わせて一般に後者の読みが採用されている。

て知られたこの著作については、ディオゲネスがここで紹介する冒頭 1 節 (3 文) が最大範囲の引用となっており、この箇所以外は一切内容が知られていない⁽⁶⁾。但し、DL には著作にまつわる逸話が残されている。

【R1 : Diogenes Laertius, *Vitae philosophorum* 9.54 = DK.80A1】

πρώτον δὲ τῶν λόγων ἑαυτοῦ ἀνέγνω τὸν Περὶ Θεῶν, οὗ τὴν ἀρχὴν ἄνω παρεθέμεθα· ἀνέγνω δ' Ἀθηναῖον ἐν τῇ Εὐριπίδου οἰκίᾳ ἢ, ὥς τινες, ἐν τῇ Μεγακλείδου· ἄλλοι ἐν Λυκείῳ, μαθητοῦ τὴν φωνὴν αὐτῷ χρῆσαντος Ἀρχαγόρου τοῦ Θεοδότου.

自分の言論で最初に読み上げたのは『神々について』で、その冒頭部を私たちは上で引用した。彼はそれをアテナイで、エウリピデスの家、あるいは、ある人々によれば、メガクレイデスの家で読んだ。別の人々は、リュケイオンで、彼の弟子であるテオドトスの子アルカゴラスが彼に代わって声を出した〔代読した〕としている。

この書物は、他の書物同様、アテナイ人有識者の前で読み上げられたようである。ただ、この出来事の証言はここにしかなく、最初期に読み上げた著作が原因となって晩年に裁判に掛けられるという時間的隔たりにも問題がある。

ここでディオゲネスは『神々について』(Περὶ Θεῶν) という著作名に言及しているが、エウセビオスでも同じ標題が報告されている⁽⁷⁾。他方、テオドレトスは“τοὺς ἀμφιβόλους περὶ τοῦ θεοῦ καὶ ἀπίστους λόγους”と語っているが、その言及は書名としてのものではなからう⁽⁸⁾。そこで定冠詞と単数型が使われている以外は一貫して“Περὶ Θεῶν”(無冠詞で複数型)となっており、著作タイトルとして定着していたことが判かる。このタイトルは、プロタゴラス自身によって付

(6) 神々についてのプロタゴラスの考えには他に一切の証言がないことから、この主題で 1 巻の書物を成したかどうか、疑問を呈する研究者もいる (e.g. W.Jaeger, *The Theology of the Early Greek Philosophers*, Oxford, 1947, 189)。冒頭で「知り得ない」と語った以上、それ以上の議論は確かに想像しにくい。その場合、多様な主題を扱った議論集の一部であった可能性もある。M. Untersteiner, *I Sofisti* I, 2^a ed., 1967, 30-3, 55-57 は、これを『反論集』(Ἀντιλογίαι) の第 1 部と見なしている。

(7) Cf. Eusebius, *PE*. 14.3.7 (T11), 14.19.10 (T12) ; Joannes Chrysostomus, *In epistolam I ad Corinthios* 36-37 (T13 の後) でも “ἐν τοῖς περὶ Θεῶν λόγοις” という表現が見られるが、これはプロタゴラスの著作に限らない。Sextus, *M*.9.55 では無神論者テオドロスにも同じ標題の著作が帰されており、古代で広く用いられていたことが判る。

(8) Cf. Theodoretus, *Graecarum affectionum curatio* 2.113 (T14).

けられたか、あるいは、冒頭の字句がそのまま流通したことが考えられるが、『真理』という標題(冒頭の字句でないことに注意)にはプラトンが『クラテュロス』『テアイテトス』で揶揄を向けていることから⁽⁹⁾、こちらも同様に本人によって付けられたと見なしてよかろう。

2、証言の検証

(1) 初期の証言

前5世紀後半では、喜劇や悲劇での曖昧な暗示を除いて証言は残っていない⁽¹⁰⁾。前4世紀前半に対話篇を執筆したプラトンも、『真理』とは異なり『神々について』を明示的に取り上げることはなかったが、『テアイテトス』にはそれと分かる仕方での暗示がある。

【T2 : Plato, *Theaetetus* 162d-e = DK.80A23】

θεοὺς τε εἰς τὸ μέσον ἄγοντες, οὓς ἐγὼ ἔκ τε τοῦ λέγειν καὶ τοῦ γράφειν περὶ αὐτῶν ὥς εἰσὶν ἢ ὥς οὐκ εἰσὶν, ἐξαιρῶ...

君たちが真中に持ち出している神々とは、私が彼らを、あるか、ないかを語ったり書いたりすることから取り去っているところのものなのだ。

プラトンは「人間尺度説」批判の文脈で(想像上の)プロタゴラスにこう語らせることで、冒頭1行を読者に想起させている。プラトンは正名論などプロタゴラスの多様な主張を統一的に批判する戦略を採っており、ここでも「人間」を万物の尺度とする考えを「神々」の知恵との対比で吟味している⁽¹¹⁾。この批判

(9) Cf. *Crat.* 386c, 391c (DK.80A24), *Tht.* 161c (B1), 166d (A21a).

(10) 喜劇では前421年上演のエウポリス『追従者たち』*Kolakes*にプロタゴラスが登場するが、断片157 PCG (= DL. 9.50 + Eustathius, *Commentarii ad Homeri Odysseam* 1. 1547 = DK.80A11)の“ἀλιτήριος”という語が彼の不敬神を示唆するものとも推測されている(I. Storey, *Eupolis*, Oxford, 2003, 184-188は関連を否定)。また、アリストファネス『雲』の無神論的言説を(メロス人ディアゴラスと共に)プロタゴラスに帰する見方もある。悲劇では、エウリピデス『バツカイ』199-203での神々に関する言及が暗示とされている(DK. 80C4)。

(11) ソクラテス:テアイテトス、言ってくれ。最初に、今し方述べたことだが、突然、君が知恵の点で人間の誰かだけでなく、神々のうちの誰に比べても少しも劣らないものだと現れてしまったら、驚きはしないかね。それとも、プロタゴラスの尺度とは、神々に対しては人間に対して、より少ない意味しかもたないもの

は、『法律』での「神が万物の尺度である」という主張に帰着する⁽¹²⁾。

『神々について』への最初の明瞭な言及は、ティモンの諷刺作品『シロイ』（前3世紀；セクストスがT9の後で引用）に遡る。

【T3 : Timon, *Sylloi* II, fr. 5.3-6 PGF (Diels, 1901) = *Supplementum Hellenisticum* 779 (H.Lloyd-Jones & P.Parsons eds., 1983) = Sextus, *M.* 9.57 (DK. 80A12)】

... ἔθελον δὲ τέφρην συγγράμματα θείναι,
ὅτι θεοὺς κατέγραψ' οὐτ' εἰδέναι οὔτε δύνασθαι
ὅπποιοί τινες εἰσι καὶ εἴ τινες ἀθρήσασθαι,
πάσαν ἔχων φυλακὴν ἐπαικείης·

人々は彼の書き物を灰に帰そうとした。というのは、彼は神々について、あるかどうか、また、どのようなものであるか、知ってもおらず、観取することもできないと、書いていたからである。適正さにあらゆる注意を払い。

この自由なパラフレイズも、他の証言と比べることで、原文を何らかの仕方
で反映していることが判かる。また、この後には、プロタゴラスが不敬神で弾
効されたという最古の証言がある。

(2) キケロとエピクロス派

キケロ（前1世紀）は、『神々の本性について』第1巻でプロタゴラスを計4
回取り上げ、最初の本格的な報告を残している。著作冒頭近くでキケロは、神々
について哲学者たちの意見が異なることを述べ、神々の存在を認める人々との
対比で、懐疑的なプロタゴラスと神の存在を否定したディアゴラス、テオドロ
スの3名を挙げる⁽¹³⁾。

【R2 : Cicero, *De natura deorum* 1.1.2】

velut in hac quaestione plerique - quod maxime veri simile est et quo omnes⁽¹⁴⁾ duce
natura venimus - deos esse dixerunt, dubitare se Protagoras, nullos esse omnino

として語られているのかね。(Tht. 162c)

(12) Cf. *Leges* IV.716c；理想的法律の前文での宣言。

(13) キュレネ出身のテオドロスは前3世紀に『神々について』を著した無神論者
で、同出身地で同名の数学者テオドロス（前5世紀、プラトン対話篇の登場人
物にもなっている）とは別人である；*RE*, 'Theodoros (32)' (K. von Fritz)、三嶋輝
夫「小ソクラテス学派」内山勝利編『哲学の歴史1』中央公論新社、2008年、
381-385 参照。

(14) omnes fere, Plasberg, Dyck: sese, ω.

Diagoras Melius et Theodorus Cyrenaicus putaverunt.

この問いについては、ほとんどの者は神々があると主張してきた—それがもっとも真理に近いし、自然の導きで私たちすべてがそこに至る—が、プロタゴラスはそれに疑いをかけ、メロス人ディアゴラスとキュレネ人テオドロスはまったくないと考えた。

ここでは、プロタゴラスが他2人の「無神論者」と明瞭に区別されていることが注目される。続いてエピクロス派の立場から登場人物ウェレイウスが、神々に関する哲学者たちの説を通覧し批判する学説誌的記述で、プロタゴラスを取り上げる。

【T4 : Cicero, *De natura deorum* 1.12.29 = DK. 80A23】

nec vero Protagoras, qui sese negat omnino de deis habere quod liqueat, sint non sint qualesve sint, quicquam videtur de natura deorum suspicari.

プロタゴラスも、神々について、あるか、ないか、どのようなものであるか、明らかなことを持っていることを完全に否定していた。彼は何であれ神々の本性について疑っていたように見える。

次に、アカデメイア派を代表するコッタがエピクロス派に反論する中で、ディアゴラスとテオドロスら無神論者と並べて『神々について』冒頭部を紹介する。ウェレイウスによる、すべての人間に神の存在は認められているという前提に、彼自身の言及を逆用して批判と懐疑を向けるのである。

【T5 : Cicero, *De natura deorum* 1.23.63 = DK. 80A23】

nam Abderites quidem Protagoras, cuius a te modo mentio facta est, sophistes temporibus illis vel maximus, cum in principio libri sic posuisset, “de divis neque ut sint neque ut non sint habeo dicere”, Atheniensium iussu urbe atque agro est exterminatus librique eius in contione combusti.

あなたに言及されたアブデラの人プロタゴラスは、当時もっとも偉大なソフィストであったが、書物の冒頭で「神々について、あるとも、ないとも、私は言うことはできない」と述べていたので、アテナイ人たちの決議で市内からも田舎からも追放されて、彼の書物は集会の場で焼かれたのである。

ここでは引用に近い紹介が与えられているが、「ある、ない」の選択肢のみで「どのようなであるか」の句が欠如している。コッタの関心が、神々の存在を誰もが認めていた訳ではないという反証に向けられていることに影響されたもので

あろう⁽¹⁵⁾。

【T6 : Cicero, *De natura deorum* 1.42.117】

ego ne Protagoram quidem, cui neutrum licuerit, nec esse deos nec non esse.

私としては、神々があることも、ないことも、どちらも確かではないとしたプロタゴラスも〔迷信家には数えない〕。

T6でコッタはプロタゴラスを、ディアゴラス、テオドロス、プロディコスら「無神論者」と並べるが⁽¹⁶⁾、懐疑派はこういった素材を縦横に用いてエピクロス派などを批判していたのである。

キケロがプロタゴラスを他の問題ある人々と並べる時に、それ以前の「学説誌」記述を参照し、それを何らかの形で反映していたことが考えられる。神に関する事柄では、アリストテレスの弟子であったロドスのエウデモスが『神的な事柄の学説誌』全6巻(τῶν περὶ τὸ θεῖον ιστορίας α'-ζ')を著したという証言があるが⁽¹⁷⁾、他に確固たる資料はなく、テオフラストスにも『神的な事柄の学説誌』全6巻(τῶν περὶ τὸ θεῖον ιστορίας α'-ζ')、『神々について』全3巻(περὶ θεῶν)の著作があったと報告されている⁽¹⁸⁾。いずれにしても、アリストテレス学派で自然学研究の一部として「神々」をめぐる学説が整理されていたことが推定される(そこでのプロタゴラスの扱いについては、後で考察する)。

キケロと同時代のフィロデモスの現存(現在まで校訂された)パピルスに、プロタゴラスへの直接の言及はない。だが、重要な関連箇所が2つある。

【R3 : Philodemus, *De pietate* col. 22.1-4 (Gomperz) = DK. 80A23】⁽¹⁹⁾

ἢ τοὺς ἄγνωστον [εἰ] τινες εἰσὶ θε[οὶ] λέγ[ον]τας ἢ ποιοὶ τινές εἰ[σ]ιν...

神々があるかどうか、また、どのようなものであるか、知り得ないと主張する人々を...

(15) ここで「姿形がどのようなものであるか」の句が欠如していることに、ダイクは続く65節でこの主題が取り上げられるから、と註記している(A.R.Dyck, *Cicero, De Natura Deorum Book I*, Cambridge, 2003, 144)。その理由で十分とは言えないが、引用者(コッタ/キケロ)が自らの目的と文脈で適宜表現を変えて用いていることはあり得る。

(16) プロディコスの無神論については、DK. 84B5 (Sextus, *M.9.18*) 参照。*M.9.51-52*では、エウエメロス、ディアゴラス、プロディコス、テオドロスに取り上げられている。

(17) Cf. Damascius, *Dubitatioes et solutiones de primis principiis*, 124, I.319 (Ruelle) = fr. 150 (Wehrli).

(18) Cf. DL. 5.48; テオフラストスの著作名からも、『神々について』という標題が当主題を扱う際に一般に用いられていたことが判る。

(19) Th.Gomperz, *Philodem, Über Frömmigkeit, Erste Haupttheil*, Leipzig, 1866, 89.

ディールスはこれがキケロ『神々の本性について』(1.12.29; T4)と同じ源泉によるものとしているが、パピルスに問題があるのか、オビンクの新しい校訂版にはこの箇所が含まれていない⁽²⁰⁾。

【R4 : Philodemus, *De pietate* 1.519-530 = 1077 col. 19.1-15 (Obbink)】⁽²¹⁾

καὶ πᾶσαν μ[ανίαν Ἐ]πίκουρος ἐμ[έμψα]το τοῖς τὸ [θεῖον ἐ]κ τῶν ὄντων
[ἀναι]ροῦσιν, ὡς κα[ν τῶι] δωδεκάτωι Προ]δίκωι καὶ Δια[γόρῳ] καὶ Κριτίαι
καὶ ἄλλοις μ[έμψ]εται φᾶς πα[ρα]κόπτ[ει]ν καὶ μ[αίνεσ]θαι, καὶ βακχεύουσιν
αὐτοὺς [εἰ]κά[ζει], ...

エピクロスは、神的なものを存在者から除去する人たちを、全くの狂気と非難した。〔『自然について』〕第12巻で、プロディコス、ディアゴラス、クリティアスと他の人々を錯乱し狂っていると言って非難し、バッカスの信徒に喩えている。

フィロデモスはここでエピクロス『自然について』第12巻における無神論者批判を紹介しているが、プロディコス、ディアゴラス、クリティアスと「他の人々」と言っている。オビンクは註釈でここにプロタゴラスが含まれる可能性を示唆するが、プロディコスやクリティアスよりも著名であった(はずの)プロタゴラスの名を省略することは考え難い。むしろ、エピクロス自身はプロタゴラスを「神々を存在者から除去する人たち」に含めていなかったと考える方が自然であろう。エピクロスは他の文脈で、プロタゴラスの職業に触れてデモクリトスの弟子となったという(誤った)伝記記述を与えているが、プロタゴラスに批判的であったようには見えず、神々に関してもプロタゴラスの立場を別の仕方で位置づけていたものと考えられる。

エピクロス派のオイノアンダのディオゲネス(後2世紀)は、エピクロス派が神の存在を否定してはいないことを論じる際に、ディアゴラスとプロタゴラスを無神論として批判している。

【T7 : Diogenes Oenoandensis, fr. 16, II.1-III.14 (Smith) = DK. 80A23】⁽²²⁾

Πρωταγόρας δ' ὁ Ἀβδηρεῖτης τῇ μὲν δυνάμει τὴν αὐτὴν ἤνεγκε Διαγόρῳ

(20) Cf. H.Diels, *Doxographi Graeci*, Berlin, 1879, 535 (cf. 123). ゴンペルス版とオビンク版の違いについては、今後調査していく。

(21) D.Obbink, *Philodemus, On Piety, Part 1*, Oxford, 1996.

(22) M.F.Smith, *Diogenes of Oinoanda, The Epicurean Inscription*, Bibliopolis, Napoli, 1993, 174-176.

δόξαν, ταῖς λέξεσιν δὲ ἑτέραις ἐχρήσατο, ὥς τὸ λείαν ἰταμόν αὐτῆς ἐκφευξόμενος. ἔφησε γὰρ μὴ εἰδέναι εἰ θεοὶ εἰσιν. τοῦτο δ' ἐστὶν τὸ αὐτὸ τῷ λέγειν εἰδέναι ὅτι μὴ εἰσιν. εἰ μὲν γὰρ ἀντιτεθῇκει τῇ πρώτῃ φωνῇ “οὐ μὴν ὅτι μὴ εἰσιν”, [ἴσως ἂν] σχεδὸν εἶχε π[ερίφρα]σίν τινα πρὸς [τὸ μὴ δο]κεῖν τελέως ἀ[ναιρεῖν] τοὺς θεοὺς. εἶπε δὲ τὸ “εἶναι αὐτούς”, [ἀλλ' οὐ τὸ] “μὴ εἶναι”, τὸ ἀ[κρειβῶς] ποιῶν ἴσον Δ[ιαγόρα, ὅς] εἰπὼν τὸ μὴ [εἰδέναι] ὅτι εἰσιν ἀύπ[νω]ς οὐκ ἐπαύσατο. τ[οιγαρ]οῦν, ὥσπερ λέγω, ἦτ[οι] τότε τῇ δυνάμει ὁ [Πρωταγόρας] ἤγενκε [τὴν αὐτὴν Διαγόρα δόξαν ἢ]

アプデラの人プロタゴラスは、ディアゴラスと実質的に同じ考えを提出しているが、異なる語り方を用いており、過剰な大胆さを避けようとしている。というのも、彼は「神々があるかどうか、知らない」と語っているが、それは、「神々がないと、知っている」と主張するのと同じなのである。もし彼が、最初のフレーズ「神々があるかどうか、知らない」に「神々がないとも、知らない」と対置していたのなら、おそらく神々を完全に否定するという見かけを避ける適切な婉曲的言い回しとなっていたことだろう。しかし、彼は「彼ら〔神々〕があることを〔知らない〕」と言っているのであり、「彼らがないことを〔知らない〕」とは言っておらず、「神々がある」と知らないと休みなく主張して止まなかったディアゴラスと、正確に同じことをしている。従って、私が述べたように、プロタゴラスは実質的にディアゴラスと同じ考えを提出しているのである。

ここでディオゲネスがディアゴラスとプロタゴラスを並べている点は、フィロデモスの議論（エピクロス『自然について』第12巻に由来?）と異なっており、従って、この批判はディオゲネス独自のものである可能性が高い。「神々があるかどうか、知らない」という主張を批判する際には、ティモン (T3) やフィロデモス (R3) が紹介する「神々があるかどうか、また、どのようなものであるか、知り得ない」といった伝承が用いられているのであろう。もしキケロラの報告に含まれる「神々はない、とも知り得ない」という選択肢を考慮に入れていたのなら、ディアゴラスと同じ主張をしているという等値は不可能であったはずである。このような、プロタゴラスの元の主張への誤解（と私たちが判断するもの）が、古代における伝承過程を逆照射する。

(3) 不敬神者のリスト

アレクサンドリアのフィロン(紀元前後)は、プロタゴラスの不敬神について「人間尺度説」に言及して、彼をカインと比べている⁽²³⁾。そこでの「不敬神の考え」(ἀσεβοῦς δόξα)という表現は「不敬神裁判」への言及であるが、背後に『神々について』が意識されているはずである。

フラウィオス・ヨセフス(後1世紀)は、ソクラテス裁判に関連して、アナクサゴラスが「太陽」を論じた不敬神、さらにメロス人ディアゴラスに言及し、プロタゴラスも「神々についてアナテイ人たちに同意されないことを書き著したと思われた」(γράφαι τι δόξας οὐχ ὁμολογούμενον τοῖς Ἀθηναίοις περὶ θεῶν)と紹介している⁽²⁴⁾。このリストは、アテナイにおける「不敬神」の逸話を集めたものであり、プロタゴラスはすばやく逃亡したために死刑を免れたとされる。同様に、プルタルコス『ニキアス伝』もプロタゴラスの追放に触れ、アナクサゴラスとソクラテスの不敬神と併置している⁽²⁵⁾。この時代までに古い時代の「不敬神裁判」についてリストが定着し、こういった思想家の名前が挙げられていたものと推定される⁽²⁶⁾。

リバニオス(4世紀)の演示作品『ソクラテスの弁明』153-154では、ソクラテス裁判に関連して、アナクサゴラス、プロタゴラス、ディアゴラスを併置している。

【T8 : Libanius, *Apologia Socratis* 153-154】

Πρωταγόραν ἐξεκηρύξατε καλῶς καὶ προσηκόντως ζητοῦντα περὶ θεῶν εἶτ' εἰσὶν εἶτ' οὐκ εἰσὶ.

神々について、あるか、ないかを探求したプロタゴラスを、君たちは立派にかつ適切に公的追放にした。

これらの言及はプロタゴラスを、発言や思想の内容よりも、不敬神裁判とい

(23) Philo Judaeus, *De posteritate Caini* 35 (cf. 38).

(24) Flavius Josephus, *Contra Apionem* II.266.

(25) Plutarchus, *Nicias* 23.3 (= DK. 59A18, Cap. A11a).

(26) アテナイオス(2～3世紀)は『食卓の賢人たち』13.611A-Bでソクラテスらの裁判に触れ、テオドロスも死刑になり、ディアゴラスは追放されたと紹介している。ここにプロタゴラスの名はないが、ディアゴラスが航海の途上で難破したという伝承はプロタゴラスとの混同と見なされている。ヴィラモヴィッツ＝メレンドルフはここに欠損を想定しており、カイベル(Teubner版、1890)はその提案に従って“ἐξεκηρύχθη καὶ Πρωταγόρας”の字句を補っている。

う事件の文脈で扱っており、その罪に関わるとされた人々のリストが何らかの流布していたことが推測される。最初の証言者ティモンも、プロタゴラスの不敬神裁判をソクラテスの毒杯と比べていた⁽²⁷⁾。

他方で、アエティオス『自然学説の摘要』を用いたと推定されている偽プラタルコス『学説摘要』「神とは何か」の項では、メロス人ディアゴラス、キュレネ人テオドロス、テゲア人エウエメロスが神の存在を否定した人々として挙げられているが、プロタゴラスには触れられていない⁽²⁸⁾。ディールスの復元通りこれがアエティオス(150年頃)に由来するとしたら、その学説誌ではプロタゴラスは「無神論者」として扱われていなかった可能性が高い。プロタゴラスは神々の存在について懐疑を投げかけたが、それは不可知論ではあっても無神論ではなかったことが、その理由であろう。それは、テオフラストス以来の学説誌での扱いを反映したものであったと推測される。

他方で、プロタゴラスが無神論者として扱われている学説誌資料もある⁽²⁹⁾。エピファニオス(4世紀)の『異教徒論駁』では、プロタゴラスが神の存在を否定したとはっきり整理されている。

【R5 : Epiphanius, *Adversus Haereses* 3.2.9, 3.16 (DG.591) = Cap. A23】

Πρωταγόρας ὁ τοῦ Μενάνδρου Ἀβδηρίτης ἔφη μὴ θεοὺς εἶναι μηδὲ ὅλως θεὸν ὑπάρχειν.

メナンドロスの子でアブデラの人プロタゴラスは、神々はおらず、総じて神は存在しないと主張した。

学説誌はフレキシブルに素材を付加したり編集しながら継承されていったも

(27) Timon, *Sylloi* fr. 5.8 PGF = *Supplementum Hellenisticum* 779 = Sextus, *M.* 9.56 (= DK. 80A12)

(28) [Plutarch] *Epit.* 1.7, Τίς ἐστὶν ὁ θεός = Aetius, *Plac.* 1.7.1 (DG. 297); ストバイオス『自然学・倫理学抜粋集』「神について」には対応する箇所がない (cf. Stobaeus, *Eclogae physicae et ethicae*, I.1 (2), Περί θεοῦ = DG. 297-307)。

(29) 偽ガレノス『哲学誌』の無神論者リストでは、キューン版では「エレオン人プロタゴラス (Πρωταγόραν τὸν Ἡλείον)、キュレネ人テオドロス、テゲア人エウエメロス」が「あえて神々はないと語った」(οὐ γὰρ εἶναι θεοὺς εἰπεῖν τετολήμασιν)とされている (*Medicorum Graecorum Opera* XIX, ed. Kühn (1830), 250; [Galenus], *De historia philosophica* 2.29, Περί θεοῦ)。しかし、ディールス版の35節 (DG. 618) では、プロタゴラスの代わりに「メロス人ディアゴラス」(Διαγόραν τὸν Μήλιον) と印刷されている。テキスト校訂上の問題と思われるが、後者に註記はない。ディールス版の読みを採ると、プロタゴラスはやはり無神論者に含まれていなかったことになる。

のであり、不十分な現存資料からではあるが、プロタゴラスが遅い時期に神否定論者に加えられたと考えるのは自然であろう。プロタゴラスの扱いとしては、エピクロスーフィロデモスからオイノアンダのディオゲネスへの変化と同様に、学説誌において当初「無神論者」に含まれていなかったプロタゴラスが、やがて単純化され、そう見なされた過程が想定される。

テュロスのマクシモス(2世紀)は神々についてのプラトンの学説に関連して、その反対の立場にある者を列挙して、レウキッポス、デモクリトス、ストラトン、エピクロス、そしてディアゴラスとプロタゴラスを挙げている⁽³⁰⁾。ここでは、ディアゴラスが神の存在を否定したのに対して、プロタゴラスは「(神々が)何であるか知らない」(ἀγνοεῖν τι)と主張していた者とされる。これは、神を否定する立場がかなり多くの思想家を含むことを示している。ミニキウス・フェリクス(3世紀)も、プロタゴラスをキュレネ人テオドロスやメロス人ディアゴラスと併置している⁽³¹⁾。

このような扱いの流れで、懐疑主義者セクストス(2～3世紀)は「神々について」の先行学説を対置的に紹介するにあたって、プロタゴラスから引用を行っている。

【T9 : Sextus Empiricus, *Adversus mathematicos* 9.55-56 = DK. 80A12】

συμφέρεται δὲ τούτοις τοῖς ἀνδράσι καὶ Θεόδωρος ὁ ἄθεος καὶ κατὰ τινὰς Πρωταγόρας ὁ Ἀβδηρίτης, ... ὁ δὲ Πρωταγόρας ῥητῶς ποὺ γράψας “περὶ δὲ θεῶν οὔτε εἰ εἰσὶν οὔθ’ ὅποιοί τινές εἰσι δύνανται λέγειν· πολλὰ γὰρ ἐστὶ τὰ κωλύοντά με”. παρ’ ἣν αἰτίαν θάνατον αὐτοῦ καταψηφισαμένων τῶν Ἀθηναίων διαφυγὼν καὶ κατὰ θάλατταν παιίσας ἀπέθανεν.

無神論者テオドロスもこれらの人々と同様であり、ある人々によれば、アブデラの人プロタゴラスもそうである。(略)プロタゴラスはある箇所ではっきりとこう書いている。「神々については、あるかどうか、どのようであるかも、私は言うことができない。というのは、私を妨げることは多いから」。これが原因で、彼はアテナイ人たちから死刑評決を受け、逃亡したが海に落ちて死んだのである。

神々の存在を否定する議論を紹介していく中で、エウエメロス、ディアゴラス、プロディコス、クリティアスら無神論者に続いてプロタゴラスが扱われている。

(30) Maximus Tyrius, *Dialexeis* 11.5 (Τίς ὁ θεὸς κατὰ Πλάτωνα) = Cap. A23.

(31) Minucius Felix, *Octavius* 8.3 = Cap. A23.

セクストスは慎重に、プロタゴラスを「無神論者」と同等に扱うのが一部の人々の見方であると注意している。この後で、ティモンの『シロイ』(T3)が引用されている。

(4) キリスト教徒による批判

キリスト教の著述家たちの間でも、異教徒の「無神論」を批判する文脈でプロタゴラスへの言及が常套化する。

アンティオキアの司教テオフィロス(2世紀)は、神々についての哲学者たちの矛盾を論じて、アカデメイア派のクレイトマコスから始めて、クリティアス、プロタゴラス、エウエメロスを無神論者として紹介する。このリストはキリスト教徒以外の著述家のものと重なる。

【T10 : Theophilus, *Ad Autolyicum* 3.7 = Cap. A23】

τί δ' οὐχὶ καὶ Κριτίας καὶ Πρωταγόρας ὁ Ἀβδηρίτης λέγων. “εἴτε γάρ εἰσιν θεοί, οὐ δύναμαι περὶ αὐτῶν λέγειν, οὔτε ὁποῖοί εἰσιν δηλῶσαι· πολλὰ γάρ ἐστιν τὰ κωλύοντά με”.

では、クリティアスやアブデラの人プロタゴラスはどうか。彼はこう言っている。「神々があるかどうか、彼らについて、語ることを私はできず、どのようであるかも明示できない。というのは、私を妨げることは多いのだから」。

4世紀初めにラクタンティウスは、2つの著作でプロタゴラスに言及する。『神聖な教理』で、デモクリトス、エピクロスに続いて、神々に懐疑を呈したプロタゴラスと神の存在を否定したディアゴラスを挙げ、『神の怒りについて』では、神々の世界について人間理性では到達できないとする論者としてプロタゴラスに言及している⁽³²⁾。

アウグスティヌス(4～5世紀)は『ペティリアヌスの手紙批判』で「神があることを否定した無神論者プロタゴラス」(atheus Protagoras, qui esse deum negavit)をアカデメイア派の懐疑論者と並べて論じている⁽³³⁾。

もっとも重要な証言を含む、カイサリアの司教エウセビオス(4世紀)の『福音の準備』では、第14巻の中で2箇所異なった紹介がなされている。

【T11 : Eusebius, *Praeparatio evangelica* 14.3.7 = DK. 80B4 = Cap. B7】

(32) Lactantius, *Divinae institutiones* 1.2.2 = Cap. A23: “Protagoras qui deos in dubium vocavit”; cf. *De ira Dei* 9.1-2 = Cap. A23.

(33) Augustinus, *Contra litteras Petiliani* 3.21.25 (cf. 22.26).

ὁ μὲν γὰρ Δημοκρίτου γεγωνὼς ἐταῖρος, ὁ Πρωταγόρας, ἄθεον ἐκτίσατο δόξαν· λέγεται γοῦν τοιαῦδε κεκλήσθαι εἰσβολῇ ἐν τῷ Περὶ θεῶν συγγράμματι· “περὶ μὲν θεῶν οὐκ οἶδα οὐθ’ ὥς εἰσὶν οὐθ’ ὥς οὐκ εἰσὶν οὐθ’ ὅποιοί τινες ἰδέαν”.

デモクリトスの仲間であったプロタゴラスは、無神論者の評判を引き起こした。彼は少なくともこのような導入部を『神々について』という書き物で用いたと言われているから。「神々について、私は、あるとも、ないとも、姿形がどのようなものであるかも、知らない」。

エウセビオスはここで、プロタゴラスをデモクリトス、ヘラクレイトス、パルメニデスと対置して論じている。

同巻の少し後では、後2世紀のペリパトス派アリストクレスの『哲学について』第8巻を引用し、「人間尺度説」に先立って『神々について』を紹介している。

[T12 : Eusebius, *Praeparatio evangelica* 14.19.10 = Aristocles, *De philosophia* VIII, fr. 6 (Chiesara) = Cap. B7]⁽³⁴⁾

τὸν δὲ Πρωταγόραν λόγος ἔχει κεκλήσθαι ἄθεον. γράφων γέ τοι καὶ αὐτὸς Περὶ θεῶν εἰσβολῇ τοιαῦδε ἐχρήσατο· “περὶ μὲν οὖν θεῶν οὐκ οἶδα οὐθ’ ὥς εἰσὶν οὐθ’ ὅποιοί τινες ἰδέαν· πολλὰ γάρ ἐστι τὰ κωλύοντά με ἕκαστον τούτων εἰδέναι”. τοῦτον Ἀθηναῖοι φυγῇ ζημιώσαντες τὰς βίβλους αὐτοῦ δημοσίᾳ ἐν μέσῃ τῇ ἀγορᾷ κατέκαυσαν.

プロタゴラスは無神論者と呼ばれていたという説がある。彼は自身『神々について』を書くにあたり、このような導入部を用いた。「神々について、私は、あるとも、姿形がどのようなものであるかも、知らない。これらの各々を私が知ることを妨げるものは、多いから」。アテナイ人たちは彼を追放処分にし、彼の書物をアゴラの真中で公的に焼き払った。

この引用を先のエウセビオス自身の引用 (T11)、及び、DL (T1) と比べるといくつかの異同が観察される。主動詞が「知らない」と断定型になっている点、“ὥς οὐκ εἰσὶν”(ないとも) の句が抜けている点、“ἐστι με ἕκαστον τούτων” の4語が加わっている点で、DL と異なっている。理由を表す第2行はエウセビオス (T11) にはないが、“εἰδέναι” は DL (T1) から、“με” はセクストス (T9) とテオフ

(34) M.L.Chiesara, *Aristocles of Messene, Testimonia and Fragments*, Oxford, 2001, 36 : キエサラは、エウセビオスの2つの報告について、14.3(T11) はキケロ『神々の本性について』1.12.29 (T4) に近く、アリストクレスからの報告 (T12) はセクストス (T9) に対応するというジゴン説を紹介している (xxxiii)。

イロス (T10) から確認される。不思議なことに、断片 4 の復元にあってディールスはこの箇所を一切参照していない⁽³⁵⁾。

アリストレクスは「人間尺度説」批判との関係でプロタゴラスの『神々について』を引用するが、その文脈はプラトン『テアイテトス』に共通する。

ヨアンネス・クリュソストモスとテオドレトス (共に 4～5 世紀) には、資料上の繋がりも推測される。

【T13 : Joannes Chrysostomus, *In epistulam I ad Corinthios* 36 (Migne)】

καὶ γὰρ Πρωταγόρας παρ' αὐτοῖς, ἐπειδὴ ἐτόλμησεν εἰπεῖν, ὅτι οὐκ οἶδα θεοὺς...

プロタゴラスも彼らの仲間である。彼はあえて、神を知らないと言ったからである。

プロタゴラスは、ミレトス人ディアゴラス、無神論者テオドロス、ソクラテスと並んで論じられる。そこでの “Μιλήσιος”(ミレトス人) は、“Μήλιος”(メロス人) の綴り間違いであろう。

【T14 : Theodoretus, *Graecarum affectionum curatio* 2.113 = Cap. A23, B7】

βδελύσσεται δὲ καὶ Πρωταγόρου τοὺς ἀμφιβόλους περὶ τοῦ θεοῦ καὶ ἀπίστους λόγους· ἐκείνου γάρ ἐστι τὰ τοιαῦτα· “περὶ μὲν οὖν τῶν θεῶν οὐκ οἶδα οὔτε εἰ εἰσὶν οὔθ' ὥς οὐκ εἰσὶν οὔθ' ὅποιοί τινες τὴν ἰδέαν εἰσὶν”.

プロタゴラスの神についての両義的で不信的な言説も、忌み嫌われた。彼の論とは、このようであった。「神々について、私は知らない。あるかどうか、ないことも、姿形がどうであるかも」。

ここでは、ディアゴラス、キュレネ人テオドロス、テゲア人エウエメロスの無神論が論じられ、ストア派が神的な事柄を物体とした学説に続いてプロタゴラスが挙げられる。テオドレトスもディアゴラスを「ミレトス人」と誤って記していることから、ヨアンネス・クリュソストモスと共通の典拠を用いていたことが判る。

テオドレトスの同著作 6.6 では、ディアゴラスに続いてプロタゴラスが、エピ

(35) DK. に先立って編纂された DG.535 では、キケロ (T4) の箇所に “Euseb. P. E. XIV 3. XII 19 [= Theodor. gr. aff. c. II 113]” と註記されている。エウセビオスへの言及の前者は T11 にあたりますが、後者は XIV 19 (10) の誤りではないか。その場合、ディールスは T12 でのエウセビオス報告をテオドレトスの T14 と同一内容と見なしていることになる。しかし、両者は基本的に別である。なお、DK. の出典索引にも PE. 14.19.10 は含まれていない。カピッシ、101-102, n.2, 206-207 も参照。

クロスの前に論じられる。

【T15 : Theodoretus, *Graecarum affectionum curatio* 6.6】

Πρωταγόραν δὲ ἀμφίβολον περὶ γε τούτων ἐσχηκέναι λέγουσι δόξαν· φάναι γὰρ αὐτὸν εἰρήκασιν οὐκ εἰδέναι οὔτε εἴπερ εἰσὶ θεοὶ οὔτε εἰ παντάπασιν οὐκ εἰσὶν.

プロタゴラスはこれら〔神々〕について両義的な考えを持っていたと人々は言っている。というのは、神々があるかどうか、まったくないのかも知らない、主張していたと言われるからである。

(5) 伝記的資料

プロタゴラスに関する伝記には、3世紀頃に書かれたディオゲネス・ラエルティオス「プロタゴラス伝」をはじめ4資料があるが、どれも他の思想家の列挙抜きに彼の神についての言説を紹介している⁽³⁶⁾。ディオゲネスの扱いは、既に見た (T1, R1)。

フィロストラトス (2～3世紀) の『ソフィスト列伝』では、神々についての発言をペルシア的教育の影響として説明している。そこでは、プロタゴラス裁判とその顛末 (難破) も詳しく紹介されている。

【T16 : Flavius Philostratus, *Vitae sophistarum* 1.494 = DK. 80A2】

τὸ δὲ ἀπορεῖν φάσκειν εἴτε εἰσὶ θεοὶ εἴτε οὐκ εἰσὶ, δοκεῖ μοι Πρωταγόρας ἐκ τῆς Περσικῆς παιδείσεως παρανομήσαι·

プロタゴラスが、神々があるのか、ないのか分からないと主張して法を逸脱したのは、そのペルシア的教育ゆえであったと私には思われる。

ミレトス人ヘシュキオス (6世紀) に帰せられる『プラトン古註』(『国家』600c への註) でも、引用がなされている。

【T17 : *Scholia Platonica ad Rep.* 600c = Hesychius Milesius, *Onomatologos* = DK. 80A3】

ἐκαύθη δὲ τὰ τούτου βιβλία ὑπ' Ἀθηναίων. εἶπε γάρ "περὶ θεῶν οὐκ ἔχω εἰδέναι οὔτε ὥς εἰσὶν οὔτε ὥς οὐκ εἰσὶν"⁽³⁷⁾.

彼の書物はアテナイ人たちによって焼かれた。こう主張したからである。「神々について、私は知ることはできない。あるとも、ないとも」。

(36) これら4資料の関係については、拙論「プロタゴラス伝註解」参照。

(37) εἴτε ... εἴτε, Par.2622.

10 世紀に編集された『スダ』の「プロタゴラス」の項目も、同様の紹介をしている。

【T18 : *Suda*, Π.2958 (Πρωταγόρας) = Cap. A3a】

τοῦ δὲ Πρωταγόρου τὰ βιβλία ὑπὸ Ἀθηναίων ἐκαύθη, διότι λόγον ποτὲ εἶπεν οὕτως ἀρξάμενος· “περὶ θεῶν οὐκ ἔχω εἰδέναι οὔτε ὥς εἰσὶν οὔτε ὥς οὐκ εἰσὶ”.
プロタゴラスの書物はアテナイ人たちによって焼かれた。それは、彼が次のように始めて言論を語っていたからである。「神々について、私は知ることはできない。あるとも、ないとも」。

この引用が『プラトン古註』とほぼ同一であることから⁽³⁸⁾、両者が共通の資料に依拠していることは確実である。

プロタゴラスの神についての言説は、他の不敬神（無神論）者と並べて扱われるのが通例であったが、これら4つの伝記的資料とアリストクレス (T12) では、単独で扱われている。

3、断片と伝承の復元

プロタゴラスの次世代からビザンツまでの伝承を辿り、18 の証言を見てきた。元は1つであった著作冒頭部の1節をめぐって、異なった文脈と背景から引用された各証言は、その異同において伝承の性格を示している。それらの異同を部分ごとに整理してみよう。まず、著作冒頭は、標題にもなった「神々について」という1句であるが、引用の仕方も反映してか、小辞の有無や組み合わせ等にヴァリエティがある。

【1、冒頭箇所】

1a) περὶ θεῶν : リバニオス (T8)、プラトン古註 (T17)、スダ (T18) ;

de divis : キケロ (T5)

1b) περὶ μὲν θεῶν : DL (T1)、エウセビオス (T11)、[DK]

1c) περὶ δὲ θεῶν : セクストス (T9)

1d) περὶ μὲν οὖν θεῶν : アリストクレス (T12)

1e) περὶ μὲν οὖν τῶν θεῶν : テオドレトス (T14)

著作の書き出しとして接続詞がない場合 (1a) もあるが、小辞 “μὲν” で始まる

(38) 校訂本では文末の “ἐστιν” のニューの有無だけが異なっている。

場合 (1b) には、対応する “δὲ” の文が後にあったのか⁽³⁹⁾、単独用法 (μὲν solitarium) であったかのいずれかとなる。著作冒頭に “δὲ” がくる場合 (1c) もあり⁽⁴⁰⁾、“μὲν οὖν”(1d, 1e) も含めて決定はし難い。

次に主動詞と様相の有無にヴァリエーションがある。大きく分けて 2 パタン (とその合成) が見られる。

【2、主動詞】

2a) οὐκ οἶδα : エウセビオス (T11)、アリストクレス (T12)、[ヨアンネス・クリュソストモス (T13)]、テオドレトス (T14) ; μὴ εἰδέναι : オイノアンダのディオゲネス (T7) ; οὐκ εἰδέναι : テオドレトス (T15) ; [ἀγνοεῖν : テュロスのマクシモス]

2b-1) οὐκ ἔχω εἰδέναι : DL (T1)、プラトン古註 (T17)、スダ (T18)、[DK]

2) [ἀγνωστον : フィロデモス (R3)]

3) ἔκ τε τοῦ λέγειν καὶ τοῦ γράφειν ἐξαιρώ : プラトン (T2)

4) οὔτε δύναμαι λέγειν : セクストス (T9)

5) οὐ δύναμαι λέγειν οὔτε δηλῶσαι : テオフィロス (T10)

6) neque ... habeo dicere : キケロ (T5)

7) neutrum licuerit : キケロ (T6)

8) [ἀπορεῖν : フィロストラトス (T16)]

2c) (=2a+2b) οὔτ' εἰδέναι οὔτε δύνασθαι ἀθρήσασθαι : ティモン (T3)

「知らない」という断定の読み (2a) は、オイノアンダのディオゲネスの解釈の基盤となっている。その後は、エウセビオスやテオドレトスらキリスト教徒の報告に限られ、「無神論者」という性格づけと相即する。

事実の断定ではなく、可能性の否定とする言い方が (2b) である。知の不可能性 (2b-1) は、プラトン古註、DL、スダといった学説誌の系統に見られ、より原典に近いとも考えられる。但し “οὐκ ἔχω λέγειν” という形は報告されていない。「知る」という動詞が使われていたか、「語る」といった系統の動詞が用いられたかは、俄には決定し難いが、2a 系統の伝承との最大公約数としては「知り得ない」(2b-1) が有力であろう。

(39) W.Kranz は “περὶ δὲ ἀνθρώπων ...” 「人間については」と続いたとの推定を註記している (DK. II.265)。

(40) このやや不自然の用法は、ヘラクレイトスの著作冒頭にあったとされる DK. 22B1 に見られる。J.D.Denniston, *The Greek Particles*, 2nd ed., Oxford, 1950, 173 の説明では、神託等において通説に異を唱える用例が挙げられている。

【3、目的節の選択肢】

目的節の選択肢については、組み合わせで3パターンに分けられる。

3a) 2者選択「ある／ない」

- 1) ὥς εἰσὶν ἢ ὥς οὐκ εἰσὶν : プラトン (T2)
- 2) οὐθ' ὥς εἰσὶν οὐθ' ὥς οὐκ εἰσὶν, BP [εἴθ' ὥς εἰσὶν εἴθ' ὥς οὐκ εἰσὶν, FD] : DL (T1)
- 3) neque ut sint neque ut non sint : キケロ (T5)
- 4) nec esse deos nec non esse : キケロ (T6)
- 5) εἴτ' εἰσὶν εἴτ' οὐκ εἰσὶ : リバニオス (T8)
- 6) οὔτε εἴπερ εἰσὶ θεοὶ οὔτε εἰ παντάπασιν οὐκ εἰσὶν : テオドレトス (T15)
- 7) οὔτε ὥς εἰσὶν οὔτε ὥς οὐκ εἰσὶν [εἴτε ... εἴτε, Par.2622] : プラトン古註 (T17)
- 8) οὔτε ὥς εἰσὶν οὔτε ὥς οὐκ εἰσὶ : スダ (T18)
- 9) εἴτε εἰσὶ θεοὶ εἴτε οὐκ εἰσὶ : フィロストラトス (T16)

3b) 2者選択「ある／どのようなか」

- 1) ὁποῖοι τινές εἰσι καὶ εἴ τινες : テイモン (T3)
- 2) οὔτε εἰ εἰσὶν οὐθ' ὁποῖοι τινές εἰσι : セクストス (T9)
- 3) εἴτε εἰσὶν θεοὶ ... οὔτε ὁποῖοι εἰσὶν : テオフィロス (T10)
- 4) οὐθ' ὥς εἰσὶν οὐθ' ὁποῖοι τινες ἰδέαν : アリストクレス (T12)
- 5) [εἴ τινες εἰσὶ θεοὶ ἢ ποῖοι τινές εἰσὶν : フィロデモス (R3)]
- [6] εἰ θεοὶ εἰσὶν : オイノアンダのディオゲネス (T7) ; 1 選択肢のみ]

3c) 3者選択「ある／ない／どのようなか」

- 1) sint non sint qualesve sint : キケロ (T4)
- 2) οὐθ' ὥς εἰσὶν οὐθ' ὥς οὐκ εἰσὶν οὐθ' ὁποῖοι τινες ἰδέαν : エウセビオス (T11)、[DK]
- 3) οὔτε εἰ εἰσὶν οὐθ' ὥς οὐκ εἰσὶν οὐθ' ὁποῖοι τινες τὴν ἰδέαν εἰσὶν : テオドレトス (T14)

DL、フィロストラトス、プラトン古註、スダという伝記系は3aを採っており、共通する資料に由来することが推定される。3b-1, 2については、テイモンを引用したセクストスとそのパラフレイズに引きずられていることが推測される。オイノアンダのディオゲネスによる批判がおそらく3b系統の読みに依拠していることは、前述の通りである(仮に3b-6とした)。

3bの2者選択ではなく、3aのような対か、それを基本とした3cがプロタゴ

ラスにより相応しいと考える、外在的な証言がある。

【R6 : Seneca, *Epistulae Morales* 88.43-45 = DK. 80A20】

Protagoras ait de omni re in utramque partem disputari posse ex aequo et de hac ipsa, an omnis res in utramque partem disputabilis sit... Si Protagoras credo, nihil in rerum natura est nisi dubium;

プロタゴラスは、あらゆる事柄について、どちらの側でも同等に論じることができ、正にこの事柄、つまりすべての事柄についてどちらの側でも論じられるということについてもそうだと主張した。(略)もしプロタゴラスの言うことを信じれば、物事の本性において疑わしくないものはないことになる。

セネカは神の話題を取り上げていないが、プロタゴラスが扱う対象には「神々がある／ない」という対置も含まれていたであろう。「人間尺度説」における「ある／ない」の対置もこれに相応し、DLが2著作冒頭部を続けて引用した9.51では表現も対を成している。これらの引用は「すべての事柄について互いに対立する2つの言論がある」という主張を紹介した直後になされており、連関が意識されているはずである。プラトンが『ソフィスト』で、ソフィストを「すべてのことに反論する(ἀντιλέγειν)能力」と規定するにあたり、あえてプロタゴラスの名を挙げていることも想起される⁽⁴¹⁾。他方で、プロタゴラスの元の意図が神々の「ある／ない」の両方に向けられていたとすると、オイノアンダのディオゲネスの批判が片面に偏ったものであったことが判る。

以上3系統を統合的に理解するには、元来3cの3選択肢であったが、伝承の過程でどこかが省略されていたとの推定がなされる。

【4、目的節の接続詞】

目的節を導く接続詞にも、間接疑問文を導く“ei”(または“ei te”)と実詞節を導く“ὥς”の2種が見られる。

- 4a) εἴτε: ティモン (T3)、オイノアンダのディオゲネス (T7)、リバニオス (T8)、セクストス (T9)、テオフィロス (T10)、フィロストラトス (T16)、テオドレトス (T15)、[フィロデモス (R3)]
- 4b) ὥς: プラトン (T2)、DL (T1)、エウセビオス (T11)、アリストクレス (T12)、プラトン古註 (T17)、スダ (T18)

(41) *Sophist* 232b-233c; プロタゴラスの「レスリングについて」が232d-eで言及される。ウンターシュタイナーは「神々について」を『反論集』の一部として論じている(註6参照)。

4c) 両者の混合：テオドレトス (T14)

表現として 4a には懐疑的なニュアンスが、4b には不可知論的なニュアンスが感じられるが、主動詞における「断定／可能性否定」に必ずしも対応してはいない。「ある／どのようなであるか」の 2 者選択をとる証言 (3b) では、アリストクレスを例外として“ei”の系統 (4a) が用いられているが、構文上はそれが自然である。アリストクレスの場合、本来 3 つあった選択肢の 1 つが脱落した可能性が高く、引用者エウセビオスは自身の記述 (T11) では別資料を用いてより精確に報告していることになる。

4a の表現を想起させる古典的な 1 節がホメロス『イリアス』第 5 巻 183 行にある：“σάφα δ’ οὐκ οἶδ’ εἰ θεός ἐστιν.”「私は彼が神かどうか、知らない」。そこでコブラとして用いられていた動詞“ἐστίν”が、前 5 世紀後半に (チャールズ・カーンの研究ではギリシア語史上初めて) 神に関して「存在する」という意味に転用されたとすると、プロタゴラスがホメロスの章句をもじった可能性も考慮される。他方で、後世の人々がこの章句に引きずられて引用したという逆の可能性も無視できない。神々をめぐる表現の文化的背景も、プロタゴラスの発言を理解する上で重要となる。

【5、理由節】

- 5a) πολλά γάρ τὰ κωλύοντα εἰδέναι : DL (T1), [DK]
 5b) πολλά γάρ ἐστιν τὰ κωλύοντά με : テオフィロス (T10)
 5c) πολλά γάρ ἐστι τὰ κωλύοντά με : セクストス (T9)
 5d) πολλά γάρ ἐστι τὰ κωλύοντά με ἕκαστον τούτων εἰδέναι : アリストクレス (T12)
 5e) ἢ τ’ ἀδηλότης καὶ βραχύς ὢν ὁ βίος τοῦ ἀνθρώπου : DL (T1) のみ、[DK.]

まず、理由節前半の諸類型は、アリストクレス (5d) をもっとも完全な形とする各所の欠損型に整理される。ディールスは DL 報告 (5a) をそのまま採用しているが、テオフィロスとセクストスとエウセビオスの 3 者 (5b, 5c, 5d) に意味上の主語“με”が残っていることから、それが元からあったのは蓋然的である。また“με”が含まれていたとすると、それが動詞“εἰδέναι”と目的語“ἕκαστον τούτων”(5d) を伴っていたと考えるのが自然であろう⁽⁴²⁾。文章が長い場合にはコブラ動詞“ἐστι”も省略されずにあった可能性が高い。

(42) 動詞 κωλύω は、目的語に対格と不定詞を伴うのが通常である。LSJ は人の対格のみを目的語とする用例を 2 つ挙げているが、不定詞のみをとる用法を独立に論じてはいない。

理由節後半は、DL にしか報告がないことから、カピッシはディオゲネスによる説明であるとして「断片」から落としている。だが、やや凝った言い回しであり、不完全な文章であることが、逆にプロタゴラス自身の言葉である可能性を示すのではないか。従って、元来は 5d + 5e の形であったことが推測される。

以上の検討から、プロタゴラスの原文と推定されるものを提案したい。

【6、復元提案】

περὶ μὲν θεῶν οὐκ ἔχω εἰδέναι οὐθ' ὥς εἰσὶν οὐθ' ὥς οὐκ εἰσὶν οὐθ' ὅποιοί
τινες ιδέαν· πολλὰ γάρ ἐστι τὰ κωλύοντά με ἕκαστον τούτων εἰδέναι, ἢ τ'
ἀδηλότης καὶ βραχύς ὢν ὁ βίος τοῦ ἀνθρώπου.

神々について私は、あるとも、ないとも、姿形がどのようなものであるかも、知ることができない。これらの各々を私が知るには障害が多いから。その不明瞭さや、人間の生が短いこと。

4、結論

『神々について』冒頭部はきわめて多様な仕方で伝承されており、復元はそれ自体ではあまり意味を持たない。むしろ異なった伝承間の関係の検討が、プロタゴラスがどのような文脈でどう理解されてきたかを映し出す手掛かりとなる。また、原文を想定することで、その後の伝承で被った変化を仮説的に説明することが可能になる。

伝承における変容の 1 例が、目的節にあたる選択肢のパターンに観取される。選択肢が元来 “οὐθ' ὥς εἰσὶν οὐθ' ὥς οὐκ εἰσὶν οὐθ' ὅποιοί τινες ιδέαν”(あることも、ないことも、どのようなであるかも) と 3 つであったとすると、第 2 の選択肢を落として「あるかどうか、どのようなであるか」とするか、第 3 の選択肢を落として「あるか、ないか」とする伝承が分かれたことになる。前者が早い時期に流布していたことはティモンから知られるが、そこからオイノアンダのディオゲネスのような誤解に基づく批判が生じた事情が説明される。

他方で、元来懐疑的な挑発であったプロタゴラスの発言が、次第に「無神論者」に同化される過程もほぼ確認することができる⁽⁴³⁾。プロタゴラスの立場は、

(43) 「不敬神裁判」についてのリストと「神存在否定論者」の学説誌リストが別に存在し、それら 2 系列が時代と共に混淆されたものと推測される (C.W.Müller, 'Protagoras über die Götter', C.J.Classen ed. *Sophistik*, Darmstadt, 1976, 328-329 (原、

初期には比較的慎重に扱われ「無神論者」に含められていなかったが⁽⁴⁴⁾、後に「無神論者」と同列に扱われ、実際そう呼ばれたりもする⁽⁴⁵⁾。「知ることができない」という懐疑的、不可知論的な発言も、古代後期の「無神論」批判に回収され、主にキリスト教徒の間では「知らない」という断定形に置き換わったのかもしれない。

プロタゴラスの神々についての言説は、元来はあらゆることに向けられた彼の両面的言論の 1 ケースであったのであろうが (R6 参照)、その後限定された文脈でくり返し取り上げられ、古代における神をめぐる議論の一角を占めたのである。

(慶応義塾大学)

Hermes 95, 1967), G.B.Kerferd, *The Sophistic Movement*, Cambridge, 1981, 164)。詳細な調査は今後に期したい。

(44) 偽プルタルコス、ストバイオスが依拠するアエティオス学説誌、及び、エピクロスについての考察 (フィロデモス、R4) を参照。

(45) アリストクレス (T12)、エウセビオス (T11)、アウグスティヌスには「無神論者」という呼称が含まれる。オイノアンダのディオゲネス (T7)、セクストス (T9)、テオフィロス (T10) も実質的にそう扱っていた。

言語と人間の社会的集団 —II. 4. 422-45 の理解をめぐる⁽¹⁾—

安西眞

1 II. 4. 422-45 と翻訳の試み

私たちは現在言語の違いが人間の社会的な集団(たとえば国家)を区別することが当然であるような世界に生きている。しかし、このことは現在我々にとっては当然のことのようにも見えるが、言うまでもなく、歴史的な事態でしかない。たとえば次のような事実がある。古典期(ほぼ前5世紀以降のこととする)のギリシア人たちの間に「バルバロイ」という言葉が定着し、その言葉は、ギリシア語を発する人間に対して、そうではない人間、ギリシア語を使わない人間集団に属する人間たちを総称として表現する為に使われた。特にエーゲ海の向こう、現在のトルコ半島や、さらにその向こうのペルシャのひとびとを指すのに使われた。しかし、バルバロイがギリシア語においてそういう意味で使われたという事実は、当然のことながら、歴史的なことに属することであって、始まりがある。ホールという、私たちと同時代に生きる、こういう社会的なことから、文化的なことから、ギリシア古典との関わりにとりわけ深い関心を寄せる英国の女性古典学者⁽²⁾が主張するところに従えば、この言葉がギリシア語の中で大きな役割を果たすようになったのは、ギリシア人とペルシャ人の間の緊張が一気に高まった、2次にわたる、いわゆるペルシャ戦争(前490と前480)期がその始まりだという。本稿筆者は、彼女の指摘はその大略において正確だと判断している。

(1) 本稿は、その最初の形態が、2006年12月に、京都大学文学研究科西洋古典学研究室と古典文献学研究会との合同研究会で最初に口頭発表された。後、2007年8月、Genevaで開催された学術振興会からの委託研究プロジェクト『教養教育の再構築』(代表: 鈴木佳秀新潟大学教授)主催の国際シンポジウムに於ける、本稿筆者発表の“Tetsuro Watsuji as one of pioneering classicists in Japan and Homer's *Iliad*”の一部をなすものとして発表された。さらに、本論文に極めて近い形で、2007年10月、大妻女子大学で開催された『フィロロギカ』第7回研究集会で発表された。ご批判、ご忠告をいただいた方々にこの場を借りてお礼申し上げます。

(2) E.Hall, *Inventing the Barbarian, —Greek Self-Definition through Tragedy*, Oxford, 1989.

彼女の洞察は、ギリシア古典期の歴史家であり、ポリス社会・国家の本質に関して極めて鋭い理解を示したトュキュディデスによる、ホメロスの世界に関する次のような指摘とも一致する。すなわち、彼によれば、ホメロスの世界では、ギリシア人という総称およびそれに対応する集合概念はいまだ成立しておらず、したがってその対立概念であり、また、必須の対をなす概念である「バルバロイ」も成立していなかったということになる⁽³⁾。

私たち現代人がホメロスを学問的に読めることを可能にしているのは、ホメロスを文字にし、書き写して伝え、同時に研究してきた、ホメロス学者たちの尊敬に値する仕事の積み重ねである。その積み重ねに、本稿筆者は畏敬の念を抱いていない、というわけではない。しかし、尊敬すべきホメロス研究が、ほぼ一貫して、トュキュディデスの指摘が持つホメロス理解に関する重大な意味を無視してきた、という欠点を指摘しないわけにもいかない。ことはホメロス理解の根底に関係していることは明らかだからだ。ホメロスの叙事詩世界が成立したその背景にある社会の世界把握がこの箇所の問題になっているのだ。

あえて欠点と断言するが、この欠点はしかし、ホメロス研究が逃れることのできなかった歴史的な環境と密接な関係にあったと、本稿筆者はひそかに想像している。だが、文献学徒としては、その歴史的な環境を議論するよりも、その欠点を指摘し、排除することが、はるかに大切な責務であると考えたい。

『フィロロギカ』第2号では、『イリアス』第9巻の、アキレウスによる戦場復帰要請拒絶演説に背景として見える世界認識と、ホメロス研究が前提としてきたホメロス世界についての像との間に齟齬があるということを、指示詞の言語的な水準での理解の問題をつうじてあきらかにすることを試みた。

今回、議論する『イリアス』第4巻422-445は、かの箇所よりもはるかに鮮明に、ホメロスの叙事詩世界そのものと、研究者たちの想定するホメロスの世界とが、人間集団の構成原理をめぐって齟齬を見せている箇所であると本稿筆者は考えている。まず、本文と試訳を提示する：

Ὡς δ' ὅτ' ἐν αἰγιαλῷ πολυηχεῖ κῦμα θαλάσσης
 ὄρνυτ' ἐπασσύτερον Ζεφύρου ὑποκινήσαντος·
 πόντῳ μὲν τε πρῶτα κορύσσεται, αὐτὰρ ἔπειτα
 χέρσῳ ῥηγνύμενον μέγала βρέμει, ἀμφὶ δέ τ' ἄκρας

(3) Th. 1.3

κυρτὸν ἐὸν κορυφούται, ἀποπτύει δ' ἄλως ἄχνην·
 ὥς τότ' ἐπασσύτεραι Δαναῶν κίνυντο φάλαγγες
 νωλεμέως πόλεμον δέ· κέλευε δὲ οἷσιν ἕκαστος
 ἡγεμόνων· οἱ δ' ἄλλοι ἀκὴν ἴσαν, οὐδέ κε φαίης
 τόσσον λαὸν ἔπεσθαι ἔχοντ' ἐν στήθεσιν αὐδὴν, (430)

σιγῇ δειδιότες σημάντορας· ἀμφὶ δὲ πᾶσι
 τεύχεα ποικίλ' ἔλαμπε, τὰ εἰμένοι ἐστιχώωντο.
 Τρώες δ', ὥς τ' ὄϊες πολυπάμονος ἀνδρὸς ἐν αὐλῇ
 μυρίαὶ ἐστήκασιν ἀμελγόμεναι γάλα λευκὸν
 ἀζηχὲς μεμακνῖαι ἀκούουσαι ὅπα ἀρνῶν,
 ὥς Τρώων ἀλαλητὸς ἀνὰ στρατὸν εὐρὺν ὀρώρει·
 οὐ γὰρ πάντων ἦεν ὁμὸς θρόος οὐδ' ἴα γῆρυς,
 ἀλλὰ γλῶσσα μέμκτο, πολύκλητοι δ' ἔσαν ἄνδρες.
 ὄρσε δὲ τοὺς μὲν Ἄρης, τοὺς δὲ γλαυκῶπις Ἀθήνη
 Δεῖμός τ' ἠδὲ Φόβος καὶ Ἔρις ἄμοτον μεμαυῖα, (440)
 Ἄρεος ἀνδροφόνιο κασιγνήτῃ ἐτάρη τε,
 ἥ τ' ὀλίγη μὲν πρῶτα κορύσσεται, αὐτὰρ ἔπειτα
 οὐρανῷ ἐστήριξε κάρη καὶ ἐπὶ χθονὶ βαίνει·
 ἥ σφιν καὶ τότε νεῖκος ὁμοῖον ἔμβαλε μέσσω
 ἐρχομένη καθ' ὄμλον ὀφέλλουσα στόνον ἀνδρῶν.

まるで(その様子は)、とどろき渡る岸辺で、大海の波が、
 突き動かす西風を受けて、次から次へと立ち上がる時のようだった。
 沖合で、波はまず盛り上がる。そして次に、
 砂の上に砕けて、大きな波音をあげる。(大地が)岬状になったあたりでは、
 弓状になって進みながら、波頭を岬の上にせり上げて、塩辛い泡を吐き出す。
 ちょうど、そのように、その時のダナオイ勢の隊列は次々と、絶え間なく、
 いくさの場所へ向けて動いて行つた。彼らを、隊長らのそれぞれが
 指揮をする。彼らの方は、黙ったまま進むのだ。誰も、これほどの数の
 兵が、胸の内に声を押さえ込んだまま、後を進んでいるとは思わないほど
 静かに。指揮官を怖がっているのだ。それぞれが身にまよって隊列に加わった
 その武具がそれぞれの兵士の周囲で、光を放っていた。

一方、トロイア勢の方は、物持ちの家の中庭に、無数の羊たちが

集まって来て、白い乳を搾られる順を待って、立ち並んでいるかのようにあつた。牡羊たちの鳴き声を耳にしては、ひっきりなしにメエメエと鳴くのだ。そのようにトロイア勢の叫び声が、陣営じゅういたるところであがっていた。なぜなら、彼らすべての声は同じではなく、ひとつでもなかったからだ。発言は、混じりあつたもので、男たちは多くの語りかけを受けていたからだ。ある者はアレスが気持ちをかき立てる。ある者は輝くまなこのアテネがそうする。デイモスとポボスとそして、ひどく熱心にことを追究するエリスも加わる。男を倒すアレスの妹で(戦の際の)仲間でもあるエリスでもある。彼女(エリス)は、頭をもたげても最初は小さい。しかし、やがて頭を大空に高くかざして、大地の上を歩むのだ。彼女はこの時も兵士たちの真ん中に心をひとつにまとめる敵愾心を投げ込み、人ごみの中で、男たちのうめき声を育てた。

2 本試訳と伝統的な理解との大きな違い

上の試訳はこの一節の伝統的な理解とかなり根本的に違っている。その要所では、訳に下線が施してある。本稿の目的はもちろん、大胆に伝統的な理解と異なるこの試訳を弁護することにある。また、その訳の文脈全体の理解を弁護し、正しい文脈把握であることを主張することにある。しかし、本文の立て方というものを雑誌『フィロロギカ』の中心に置くとするならば、例えば、『イリアス』の最新の校訂版であるウェスト版と表面的には異なることはたったひとつではない。

ウェスト版⁽⁴⁾は、439行で字下げを採用している(他に上に挙げた本文と違う点はその字下げの対象となった単語の加音の扱いにもあるが、それは本稿の問題とは関係のない、音韻論形態論上の問題である)。本文の立て方という点では、少なくとも表面上は、小さな違いでしかないように見える。しかし、本文の立て方というものが作品のある部分の文脈と深く関わっている種類の問題である場合(まさしくここはその問題が中心にある)として上にあげた本文を見れば、この字下げは、文脈理解に関して決定的なことを語っている。ウェストは、439以下は、その前のトロイア勢についての詩行と続かないと理解すべきだと、字下げによって主張しているのだ。つまり、439以下にはアカイア勢に対する描

(4) M.L.West, *Homeri Ilias*, Leipzig, 1998 (vol.1), 2000 (vol.2).

写も含まれている（後述参照）と彼が読んでいると見て間違いはない。そして、この理解の仕方は、後で指摘するであろうように、この二つの比喻を含む文脈を理解するのに際して古代からほぼ一貫してそのようにされてきた読み方を、さらに鮮明にさせたものだと言える。その点がまず疑問だと、本稿の筆者は言いたい。

ともあれ、以下の議論を分り易くする為にも、本稿筆者訳と伝統的な理解と了解される読み方の違いをまず鮮明にしておきたい。以下、箇条書きで違いをまずあげる。

- 1 γλῶσσα を、民族その他の人間の集団を分けるめじるし（いわゆる使用言語）とは本稿訳は理解しない。一方、伝統的な理解では、民族・国家を分けるものという役割を与えられている。
- 2 πολύκλητοι を、『多くの場所から呼び集められた』という意味で、これまでは理解してきた（LSJ もその訳だけをこの箇所に関してはあげている）。しかし、本稿訳は、試みだが、πολύ- を、語構成上は、-κλητοι に含まれる動詞の内的目的語として読もうとしている。
- 3 τοὺς μὲν...τοὺς δὲ (439) を、前者はトロイア勢を指すものとし、後者をアカイア勢を指すものとして伝統的には読んで来た。これがウェストの字下げの根拠のひとつである。しかし、本稿筆者はこの理解は、言語的にも、文脈的にも成立させることが難しいと判断する。そして、両者ともにトロイア勢に属するものたちを指す、というように理解すべきだと考えている。

以上が表面的な違いである。もちろん、表面的と言ってもこの箇所で、特に2つの比喻を使って詩人が何を表現しようとしているかということに関して決定的な違いを両者は持っているということも出来る。しかし、さらにその奥に『イリアス』の世界が何か（あるいはもっと具体的に言えば『イリアス』の世界にとってトロイア人たちが何を意味しているか）ということに関して、私の言い方をすれば、伝統的な理解はある決定的な難点を持っていて、その深い根がここにも顔を出している、と思える。もう少し客観的に言えば、そういったことがらに関して試訳と伝統的理解は大きな違いを持っている。しかし、このことは、『フィロロギカ』的議論が終わって余裕があれば触れるという形にしたい。

おそらく、3の問題から追っていった方が問題は解きほぐし易い、というの

が見通しであるが、その問題に実際にとりかかる前に、1と2に関して、具体的な文脈理解の問題以前の段階で、既に語の水準で、見えている問題だけは指摘しておいた方が議論はより分り易いかもしれない。

3 伝統的な理解の単語理解の上での問題点—(1)

γλῶσσα について：この語が民族・国家を分ける際のめじるしとして使われている例がホメロスに皆無という訳ではない (Il.2.803-4)⁽⁵⁾。しかし、言うまでもなく、「舌」が、民族・国家を分ける役割を果たす「言語」としてではなく、民族・国家の意識をのぼらせていない段階のたんなる人間同士の交流手段としての「ことば」あるいは「ことばを発する能力」として使われた次のような例 (Il.2.488-9) が少なくともホメロスにおいては大多数である。

πληθὺν δ' οὐκ ἄν ἐγὼ μυθήσομαι οὐδ' ὀνομήνω,
οὐδ' εἴ μοι δέκα μὲν γλῶσσαι, δέκα δὲ στόματ' εἶεν,

もちろん、『イリアス』に他の類例がたとえ1例でも見つかる以上、人間の社会的な集団を分けるめじるしとしてここ (Il.4.438) でも使われているのだ、という理解は成立しうる。しかし、類例の分布を考慮すれば、ここの γλῶσσα の用法を本当に伝統的な読み方に従って理解してよいのかという疑問ぐらひは提出されたことがあってもよいと思われるが、私は過去においてその種の疑問が真剣に発せられたということを聞かない。ホメロスの叙事詩が成立した前後においてギリシア人は「ギリシア人」という一般概念も持っていなかったし、当然その対立概念であるバルバロイという概念をも持っていなかった、というトュキュディデスの洞察を考慮に入れるならば、もっと深い疑念が伝統的な理解の仕方に対して投げかけられてしかるべきであろう。

4 伝統的な理解の単語理解の上での問題点—(2)

(5) πολλοὶ γάρ κατὰ ἄστυ μέγα Πριάμου ἐπίκουροι,
ἄλλη δ' ἄλλων γλῶσσα πολυσπερέων ἀνθρώπων.
「なぜなら、プリアモスの大きな町には大勢の兵士たちがいて、
大地に多くまかれた人たちの言葉は、それぞれ異なっているから。」

πολύκλητοι について：この語を、『多くの場所から呼び集められた』という意味に解するのは、語構成を考えればいかにも異様である。もちろん異様であるのは、πολυ- の意味を「多くの場所から」と理解することが、である⁽⁶⁾。πολυ- は、数あるいは量を表現する形容詞あるいは副詞の幹として使われたから、もう一方の幹が名詞なら、「…が多い」(πολύβουλος「思案が多い (Od.16.282)」など) が普通の意味であろうし、もし、幹が動詞なら、その動詞の表す動作の主語、目的語、内的目的語(つまり、数量副詞)を πολυ- が受け持つのが普通であろう。

しかし、私には異様なものと感じられるこういう理解の仕方には、『イリアス』中の類例があるとされている：

ὄσσαι μὲν Τρώων πυρὸς ἐσχάραι, οἷσιν ἀνάγκη
οἱ δ' ἐργηγόρθασι φυλασσέμεναί τε κέλονται
ἀλλήλοισ· ἀτὰρ αὐτε πολύκλητοι ἐπάκουροι
εὐδουσι· Τρωσὶν γὰρ ἐπτραπέουσι φυλάσσειν·
οὐ γάρ σφιν παῖδες σχεδὸν εἴαται οὐδὲ γυναῖκες. (Il.10.418-22)

ここでも、πολύκλητοι は「多くの場所から呼ばれた」という意味で使われているとされている。そして、ここでは文脈とその意味は(特に Τρωσὶν で始まる後続の文を見よ)合致しているかに見える。だからといって語構成から考えてこの意味が異様であることは変わりがない。我々の文脈での意味と違って、この 10 巻では、深刻な文脈理解の上での問題を引き起こしているとは言えないが、それでもこの形容詞の意味が変だという事実には変わりがない。だが、この問題は、本稿の問題にとって副次的なものであるので、中心的な議論が一段落してから触れることにしよう。

5 これらの理解の歴史的な背景—エウスタティウスの注とアポロニウスの語釈

私は、我々の約 20 行ほどは、根本的に間違っ理解されて来た、と考えている。それも、間違い方は一様の方向に向いていると言えるだろうと思ってい

(6) 実は、ap.cr. を見ても分るように、この合成語の後半の構成要素 κλη-/κλει- についてもかなり深刻な疑問がある。しかし、この問題についてはここでは棚上げにすることにする。伝統的な読み方の問題点を指摘し、正しいと思える方向を示唆する、ということに本稿の目的を限定したい。

る。文脈的な水準でその間違いはこういうことである。詩人はトロイア軍を「羊のように多様な声を出す」と言っている。それを伝統的には、トロイア勢は言語に関して混成的であるから、と続くと理解して来た。すると、「羊のようなトロイア勢」という表現には一応の論理的な結末が付けられてしまうことになる。439 以下がトロイア勢に関する詩行として続けられているという読み方には当然合理的根拠が欠けるのだ、ととられ易い。

そこに、アレスとアテネが登場する。アテネは多く親アカイア的振る舞いを『イリアス』ではしている。従って話の舞台の表面にアカイア勢が登場してきた、つまり、439 行以下は全体としてトロイア勢とアカイア勢を対象としている部分だ、という読み方が成立することになる。そこでこの理解を明確にするには、ウェストのように字下げを施した方がよい、ということになる。

これが間違えた読み方だということは今あげた語釈の問題にもかなり明確に出ていると言えるだろう。問題3の議論を始めればもっとはっきりしてくるだろう。なぜ一様の方向に向いているかと言えば、それはこの間違えた理解がある伝統的な読み方に従ってきたからであり、その伝統的な読み方の根っこにある、ある傾向を踏襲して来たからであると本稿筆者には思える。こういった読み方が伝統的な読み方であることは例えば以下のような古代末期と中世の学者たちが残した『イリアス』理解等を挙げればあきらかになるだろう。

Eustathius ad 437-8⁽⁷⁾

«Οὐ γὰρ πάντων ἦεν ὁμός θρόος οὐδ' ἱα γῆρυς, ἀλλὰ γλῶσσ' ἐμέμικτο,
πολύκλητοι δ' ἔσαν ἄνδρες», ἤγουν ἐκ πολλῶν συγκληθέντες γλωσσῶν. οἱ γὰρ
Ἕλληνες ὡς ὁμόγλωσσοι κτλ.

Apollonius Sophista, *Lexicon Homericum*⁽⁸⁾, s.v. πολὺκλητοι: ἀπὸ πολλῶν τόπων
κεκλημένοι βοηθεῖν.

エウスタティウスとアポロニウスが我々の部分に関してどのような文脈理解をしていたか、ということには触れない。多分、これまでの説明でおおよその理解のありようは想像がつくだろうと思う。彼らの読み方にひとびとは従って

(7) Eustathius, *Commentarii ad Homeri Iliadem Pertinentes*, ed. van der Valk, Leiden, 1971, 1.783

(8) Apollonius Sophista, *Lexicon Homericum*, ed. Bekker, Berlin, 1833, 132

来たという事実も、ウェスト版の字下げを指摘すればじゅうぶんとも思えるが、念の為に、最新の『イリアス』注釈のスタンダード版(ケンブリッジ大学版)のカーク⁽⁹⁾も上に指摘したような「伝統的な読み方」に完全に従った記述を見せていることを付け加えておこう。

Kirk ad 4.439

“As usually but not invariably in Homer, the μέν-clause refers to the last to be named of a preceding pair (here, the Trojans) and the δέ-clause to the first, in a chiasmic arrangement. Ares is Athene’s pro-Trojan counterpart as war-deity.”

Kirk ad 440-1

“Despite the close relationship of Eris, Strife, to pro-Trojan Ares, these three are to be understood as spreading the spirit of war among both sides equally.”

論文を、効果的に組み立てる為の戦術的な意図から、意図して同一のことがらを論じていない部分を引用した。前者は、439 以下では、トロイア人たちのことばかりではなく、アカイア勢のことも歌の文脈に入って来ていることをカークが読んでいることを示している。後者は、440 以下に登場するデイモスやポボスやエリスが、両陣営の兵士たちに襲いかかるのだ、と理解していることを示している。この読み方は、439 の字下げと合致する読み方であり、それはまた γλώσσα (438) や πολύκλητοι (438) に関する伝統的な読み方と根っここのところで繋がっていることを理解してもらえばよい。そして、カークは、注釈者であるからこそ上のような理解を 439 や 440-1 について詳しく述べなければならなかったのだが、そのことによって彼のこの注釈は伝統的な読み方が含む解釈上の根本的な難点をあからさまにしているのである。

6 本稿訳の弁護—(1)

以下、「伝統的な読み方」がギリシア語の誤読の上に成り立っていることを明らかにし、それに代わる正しいと思われる方向を示したい。伝統的な解釈に代わる新解釈の総体を提示しようというつもりなのではない、ということを断っておきたい。

(9) G.Kirk, *The Iliad: A Commentary*, vol.1, Cambridge, 1985.

「伝統的な読み方」が破綻するのは 439 行以下の部分である。ここで「伝統的な読み方」は、上述のカークを見れば分るように、τοὺς μὲν Ἄρης (439) の τοὺς はトロイア勢を指し、τοὺς δὲ の τοὺς はアカイア勢を指す、と理解する。その読み方自体は『イリアス』の世界と一見合致したものように見える。つまり、既に言ったようにアテネはおおむね常に親アカイア的な女神であるし、アレスは親トロイア的であると私たちは『イリアス』全体の印象から感じている。

しかし、この理解は、いかにも唐突な変化を私たち読者に要求するものである。これまで、詩人は聴衆にトロイア勢を見渡した視線を要求して来た。それを突然、トロイア勢とアカイア勢を同時に眺められる視点へと移動するよう詩人はここで要求していることになる。「伝統的な読み方」に従うならば、である。両勢はまだぶつかり合っていない。徐々に近付きつつあるとはいえ、まだ離れた場所にいるのだ。その転換をホメロス叙事詩が、ὄρσε δὲ (439) の δὲ ひとつで実現するものであろうか。あるいは、トロイアに関する 438 までに区切りを付ける何らかの formula 詩行なしで成し遂げ得るものであろうか。

しかしこのことに関してはこれ以上追求しない。「たしかにギクシャクしている」、という譲歩が「伝統的な読み方」の側から得られるのがせいぜいであろうから。

問題はデイモスやポボスやエリスがいったい誰に襲いかかるのかを考えた時に決定的になるように思える(先にあげたカークの 440-1 への注参照)。これらの神々が襲いかかるということが、これらの神々が意味するある戦士としての感情を持つということであるとしたら、こういう戦場での感情の動きを示したのは誰なのか。上で引用したカークのごとく、τοὺς μὲν Ἄρης (439) の τοὺς はトロイア勢を指し、τοὺς δὲ Ἀθήνη (439) の τοὺς はアカイア勢を指す、と理解すると、例えばデイモスはどちらの側を ὄρσε すると読むべきなのか。

カークは、2 つめの引用でデイモスやポボスやエリスが襲いかかるのは双方だと読むべきだと明言している。全く恣意的な読み方を我々に勧めていると私には思える。τ' ἡ δὲ (440) と καὶ (440) は、基本的には単純な付け加えを意味していて、それ以上の機能を果たすことはできないはずである。τοὺς δὲ の τοὺς はアカイア勢を指していたのに(少なくとも「伝統的な理解」ではそのはずである)、次の行では両者へ掛かるというような人工的な、あるいは込み入った機能を果たすことは出来ない。そう私は確信する。だから、恣意的だと言っている。

まだ、3 体の神々がいずれもアカイア勢に関与する、という読みの方がましとも思えるが。誰もそう読もうとはしていないようであるし、多分それには

それなりの根拠があるのだろう。もちろん、本稿筆者もそちらに活路が見出せるとは考えていない。

これは簡単な論理の問題なのである。今、詩人が歌っている対象としては、直前にはトロイア勢がいる。そして、その集団がいままさにぶつかろうとしているアカイア勢がおり、これを、詩人は比喩を使って進軍する様を表現したし(422-438)、詩人と聴衆の意識の中心にまだいることは間違いない。

もし仮に百歩譲って、ὄρσε δὲ の δὲ ひとつでトロイア勢を見据えた位置から、トロイア勢とアカイア勢とをともに見据える位置へと視点を転換できた(普通に言えば、テーマの転換)としても、トロイア勢を一方とし、アカイア勢を一方とする分割を実行したとたんに、『イリアス』がこの文脈で歌うことのできる対象たる人間たちはこの分割ですべて尽くされてしまって、唯一可能なのは、カークの言うような両者をまとめた別の集団か、あるいはまた、アカイア勢を対象とした部分が続くという可能性である。もし、どちらも受け入れがたいと言うのであれば、分割の前提たる全体そのものを疑うべきなのだ。

それが試訳成立の前提である。つまり、百歩譲らない。τοὺς μὲν Ἄρης (439) の τοὺς はトロイア勢を指し、τοὺς δὲ の τοὺς はアカイア勢を指す、というような「世界の分割」は実行しない。必然的に、歌われる対象はあいかわらずトロイア勢であって(もちろん、ὄρσε δὲ の δὲ はこの機能を果たせる)、τοὺς μὲν Ἄρης (439) の τοὺς も、τοὺς δὲ .. Ἀθήνη の τοὺς もトロイア勢を指す、という理解になる。トロイア勢のある者はアレスが心をかきたて、トロイア勢のある者はアテネが心をかきたてた。デイモスやポボスやエリスがかき立てるのもいた(いずれも対象はトロイア勢)。つまり、トロイア勢の中には戦意を高揚させた者もいたし(アレス、アテネ、エリス)、臆病風にいったん吹かれた者もいた、というのだ。

上の説明は集合論の言葉で説明しようとしたからややこしく聞こえたかも知れないが、事態としてはギリシア語を読むひとなら簡単に理解できることだろう。ギリシア語を読めなくとも、日本語訳だけでも理解できただろう。わざわざ集合論の言葉を使って説明したのは、むしろ、これまでの「伝統的な読み方」が『イリアス』を読むに際してどういう枠組みを前提としてきたかを明らかにする為もあった。つまり、トロイア勢があり、「舌」が混じっていた、とホメロスが言えば、それは、トロイア勢の言語的雑多性を表現しているに違いない、とひとは読んで来たのであり、「あるものたちはアレスがあるものたちはアテネが」とホメロスが言えば、それはトロイア勢とアカイア勢の別々の集団を指し

ているに違いないと思ひ込んで読んで来たのだ。まわりにどんな警戒警報が鳴つていようとそれ以外にありえない、と読んできたのである。

もちろん、「伝統的な読み方」にもそれなりの根拠はある。先に触れたように、アレスは親トロイア勢、アテネは親アカイア勢という立場は、『イリアス』に貫徹されていることのようにも思えるからである。しかし、次のような場面が『イリアス』にもあることを忘れてはならない (II.18.516-9) :

οἱ δ' ἴσαν· ἦρχε δ' ἄρά σφιν Ἄρης καὶ Παλλὰς Ἀθήνη
 ἄμφω χρυσεῖω, χρύσεια δὲ εἴματα ἔσθην,
 καλὰ καὶ μεγάλω σὺν τεύχεσιν, ὥς τε θεῶ περ
 ἀμφὶς ἀριζήλω· λαοὶ δ' ὑπολίζονες ἦσαν.

これは『アキレウスの盾の描写』中に描かれた一場面である。河堤での戦いに至る部分でこういう描写がある。一方の側の軍隊の前にアレスとアテネが連れだつて現れる。二体の神は、同じくその一方の側の兵士たちの心を励ましている。ここでは両神は、アカイア勢に加担したり、トロイア勢に加担したりする神ではなく、戦おうとする戦士たちの前に、どちらかの側のひいきの神としてではなく、戦意を高揚させる戦の神として現れている。そして恐らく間違いなく、アレスとアテネの神としての性格は基本的には闘争心を象徴する戦神だったのであろう。両神ともに『イリアス』の中では比較的一貫してそれぞれのひいきを援助する役割を果たしているが、それは、『イリアス』中でどちらがどちらを味方するかが文脈のひとつの焦点として重要である場合の役割にしかすぎない。戦を象徴するあるいは戦意の象徴として働く神としての原始的な性格は、必要とあればどこでも顔を出すことができるのだ、と理解するならば、ここに無理矢理アカイア勢を登場させてそれに続く文の理解を難しくする必要はなくなる。

それとも、ひとつの兵士の集団がここ (439-445) で登場しているのではない、どうしてもアカイア方とトロイア方が同時に歌の対象として眼前に登場している、と言うべきだろうか。ありもしない切れ目を作り出し、字下をし、集合論理の基本的な問題を無視してまで。言うまでもなく、本稿筆者はギリシア語の指し示すすなおな読み方に従うべきだと考える。

さらに、439行以下にアカイア勢を登場させない読み方は、単に論理の面においてばかりではなく、最初に掲げた2つの比喻と呼応しあうという意味で、

極めて「文学的」な意味でも優れた読み方であると私は考えている。

7 本稿訳の弁護—(2)：怒濤の軍隊と羊の軍隊

γλώσσα μέμκτο をトロイア方の兵士たちの使用言語が入り交じっていたことと理解し、それに応じて πολύκλητοι を「多くの場所から呼び集められた」という意味で取る、という「伝統的な読み」は、アジア人、特にトルコ人や、オリエント世界の人間との深刻な対立が生じて以降の古代、古代末期および中世のギリシア語圏に住む人間たちを抜きがたい形で支配して来た、かの地のひとびとに対する偏った態度に端を発しているのであろう。この偏見は前述のホールが指摘するところであるが、その偏見が我々の議論してきた文脈の伝統的な読み方にも反映されてきた、といったんこれまでの議論をまとめることができるだろう。

ただ、ここでは、あくまでも2つの比喩を使った文脈全体を正確に理解したいと望んでいるので、そういう読み方がどういう文脈理解の上での事態を引き起こしているかに絞って見ていくことにしよう。

γλώσσα μέμκτο を使用言語が多岐にわたっていた、と読んでしまえば、既に言ったように、トロイア方の兵士たちが「集められた羊のようだ」という比喩が喚起した想像上の力はそこで閉じてしまう。「羊のようにうるさい」と「多言語で交流をしていた」は一方が一方を完全に説明してしまう役割を果たしてしまつて、論理は完結するからである。字下を決定した根拠、すなわちトロイア方の兵士たちに対する描写はいったん終わった、という理解は、アレスとアテネが連れだつて登場するから、だから、アカイア人のことが詩人や聴衆の意識に上ってきているに違いない、という思い込みだけで生じたのではない。438行で「羊のようなトロイア方の兵士たち」という像が生じたが、その像は438行でいったん閉じたという判断にも依っている。多分これで、γλώσσα μέμκτο や πολύκλητοι の意味に関する「伝統的な」意味理解と、439行から新しいパラグラフが始まるという判断とは互いに密接に支え合っている関係にあるという、やや飛躍があるように聞こえたかもしれない本稿の言い方が理解できたのではないか。

さて、438行でトロイア人に関する、比喩が喚起した文脈が閉じたとする理解が誤読である可能性が大きいとすれば、私たちはここにどのような文脈が生じていると考えるべきだろうか。それよりも前に439行以下が、先に触れたよ

うにトロイア方の兵士たちにだけ関わる描写であるとして、*γλῶσσα μέμκτο* や *πολύκλητοι* という語の意味理解を中心とする理解はどうあるべきだろうか。

既に答えは冒頭の訳で提示している。*γλῶσσα μέμκτο* は「発言は、混じりあっていた」と読み、*πολύκλητοι* は「多くの語りかけを受けている」と理解する。

γλῶσσα については簡単にコメントしておきたい。「舌」を人間の集団を、典型的には国家単位で分ける為のめじるしとしての言語ではなく、「言語音」あるいは人間の思いを表現する「ことば」という意味での言語を意味するものと理解する。これはホメロスで大多数の箇所で行われている意味である（前掲 II.2.448-9 参照）。

πολύκλητοι については少し詳しい説明が必要であろう。上の本文で印字したように、*πολύκλειτοι* ではなく、この形を採用すべきだと今は判断している。そのあたりを説明したい。まず、*-κλητος* はホメロス以降多用されている形だということをお告げしておこう。

この *πολύκλητοι* の「伝統的意味理解」の根拠のひとつとなっている、II.10.420 で使われている、同一形で印刷され、ほぼ同じく「多くの場所から呼ばれてきた」という意味を比定されている *πολύκλητοι* について、ここで必要な脱線を試みる。

τηλεκλειτός という形容詞がホメロス中に使われている。いくつかの叙事詩の登場人物の固有名詞 (*Epialthes*, *Od.*11.308 など) にかかる形容詞として行末に使われている (×3)。そしてここで重要なことは、*ἐπίκουροι* とともに (複数主格で×3、複数属格で×2)、*τηλεκλειτοὶ τ' ἐπίκουροι*、あるいは、*τηλεκλειτῶν ἐπίκουρων* という形で「男のカエスラ」からの後の hexameter 行を構成する。固有名詞との場合を詳しく検討する必要はないだろう。*τηλεκλειτός* という形容詞は、叙事詩に登場する固有名詞とともに、あるいは、叙事詩に極めて頻繁に登場する人間の種類を表す普通名詞とともに epithet として使われたのだ。「その名声が遠くまで聞こえた」という意味も英雄叙事詩にとって、「輝く」とか、「足の速い」とかと同様極めてふさわしいものであることも、言うまでもない。

II.10.420 の *πολύκλητοι* の意味を、「多くの場所から呼ばれた」と取るのは、語構成上極めて疑わしいと思われることについては既に述べた。「多くの場所から呼び集められた」という意味は、4.438 においては、本稿の見方からすれば、既に明らかになったごとく、誤った文脈理解の上に立っているように見えるが、一方、ここ (10.420) では適当なものであるようにも見える。少なくとも、語構成の問題を抜きにして、文脈に相応しいかどうかを考える限りは。「多くの場所

から呼び集められた者たちは(警備につかないで)眠った」と「トロイアびとらに警備を託した」と「被保護者を連れてきていなかった」はうまくふたつの γὰρ でつながるようにも見える。しかし、少し考えてみれば分るが、「多くの場所から呼び集められた」は必ずしもここで必要な意味ではない。ἐπίκουροι「助っ人」は、そのもともとの意味からして、「そこに守るべき被保護者を持っていない」という意味を担うことが出来るからである。

以上をまとめて、今のところの、II.10.420 の πολὺκλητοι について結論的な推定を言う。-κλητοι と -κλειτοι を、使い分けるならば、ここ (II.10.420) では πολὺκλειτοι と印字すべきであって、意味は τηλεκλειτός の epithet 的意味に準じて「極めて名高い」とすべきである。実際、Pi.O.6.71 ではその意味で使われている。「準じて」には、確かな実体がある。II.10.420 の πολὺκλειτοι の使われ方を見てほしい。ほぼ、телеκλειτοι τ' ἐπίκουροι の metrical variant と言ってよい使われ方と言ってよいだろう。ただし、телеκλειτοι τ' ἐπίκουροι と違って、τ' は使われていないし、使えない文脈にある。hiatus は、いくつかの写本に見える修正の試みにもかかわらず、避けられない状況にある。少なくともこの使い方に関するかぎり、この詩人は、formulaic language の正統な伝承からはずれるところに居ると言える⁽¹⁰⁾。

一方、4.438 では、「極めて名高い」では意味をなさず、本稿試訳のような訳がどうしても必要だと判断される。従って印字したように、-κλητοι と -κλειτοι を、使い分けるならば、πολύκλητοι とするべきだろう。そして、言うまでもないが、その韻律上の位置(カエスラの直後)にもかかわらず、телеκλειτοι τ' ἐπίκουροι という formulaic な半行との関連はほとんどない。formulaic language と関係が非常に薄いという感想は、II.4.422-445 の前半を成す 2 つの比喩全体の文体について誰もが抱く感想でもあろう。

最後に、本稿による試訳が作りだした、激突の直前に至る 2 つの比喩を中心とする部分全体をながめてみよう。

ここでは 2 つの軍隊のありようが比喩を使って表現されている。439 行以下がトロイア勢に対する描写であるという理解を失ってしまえば、波の立てる規則的な音と、互いに意思を疎通させる手段を欠いた集団が立てる、いわば外側の対比だけが残りの、439 行以下の役割は不透明なままである。なにしろ、439

(10) epithet + noun の格変化は起きていないが、ここで見られる現象は、Hoekstra の名付けるところの conjugation of formulae に近いとも言える。A.Hoekstra, *Homeric Modifications of Formulaic Prototypes*, Amsterdam, 1965, 88-9 参照。

以下は誰を描いているのかさえよくわからないということであるから。しかし、そうではなくて、439行以下は、敵を目前にした際のトロイア勢を相変わらず描いているとしたらどうであろうか。個々の兵士の感じる様々な感情、自由に、言い換えれば統制のきかない状態で全軍をおおっている状態から、敵の姿がより間近く見えて来るに従って、エリス（敵愾心）が働いて、そのエリスが彼らを戦い得る集団へと変えていく過程を描いていることになるのではないか。同じく戦闘開始の瞬間へむけて両軍が激突へ近付く過程を描きながら、戦闘を支える兵士たちの根拠の部分、心理の部分で詩人は対比を作り出そうとしているのではないだろうか。

核心は、指揮官をこわがって、次々と押し寄せる波のように「規律」を守った行進をし、自分たちの感情を抑えて沈黙を守るアカイア勢と、羊のように自分の心に湧き起こる感情のままに言語を発するトロイア勢（やがてトロイア勢も敵が近付いて来るのを前にしてエリスから、恐怖を忘れ戦闘集団としての体をなしていくのだが）という対比であろう。どちらも結局は戦場で激突する。しかし、そこまで兵士たちを引っ張っていくものが違うのだ。アカイア勢を導くのは言葉の原初的な意味での discipline ということであろう。アカイアの軍隊を支配するのは規律と規律を貫く為の訓練だと理解せよ、と詩人は我々に迫っている。トロイア勢を敵の前にまで連れていくのは、規律ではない。訓練でもない。兵士たちのある部分は恐怖を感じて逃げ出そうとまでした、とこの文脈は明らかに歌っている。それでも戦いは始まった。なぜなら、迫り来るアカイア勢に対する敵愾心がすこしずつトロイア方の兵士たちに浸透してゆき、ついには全軍を支配し、その敵愾心は空高くそびえ立つほどになる。そういう過程がここでは歌われている。つまり簡単に言えばトロイア勢の軍隊は、よく言えば自由、悪く言えば規律と訓練の行き届いていない軍隊だということを歌っているといってよい。行き届いていないところではないかも知れない。もしも、エリスやデイモスやポボスといった神の存在が多かれ少なかれトロイアの兵士たちの内心の状態と関係を持っているとすれば、アカイア勢との戦場に参加するかしないかさえ、トロイア方の兵士たちにとっては、その心の動きのままであったということがこの文脈では含意されていると言うことすら出来る。おおまかに言ってこういう対比が、怒濤のようなアカイア勢と羊の群のようなトロイア勢という2つの比喻を中心とする我々が扱っている文脈では意図されていると本稿は読む。

軍隊の組織は、文明ないしは社会の組織と深い対応関係を持っている。軍隊

の組織化が進み、軍が効率的になるということは文明の進歩、あるいは社会の高度化が進むということとかなり厳密に平行する関係にある。これは、我々が愛するギリシアの世界においても真実である。だから、古典期以前（おおよそ前6世紀より前ということにここではしておこう）にも古典期にも、disciplineに従うということは、詩人や歴史家や弁論家といったひとびとの残した書き物のいつも大きなテーマであり続けた⁽¹¹⁾。古典期ギリシアの極めて高い文明を維持するということと、disciplineの行き渡った軍隊を持つことはほぼ同じことであると、彼らギリシア人は自覚していたと言ってよい。そして軍隊のdisciplineに従うことと、ポリスを支配する法に従うことが平行する関係にあることも。もうこれ以上、一般的な発言を続けるのはやめよう。本稿筆者は、文明と軍の規律に関わる関係についての洞察に近いものが、ここで詩人が作り出している対比的な比喩には、その表現効果として意図されている、と理解したい。その根拠は以下のようなものだ。

『イリアス』に登場するトロイア勢が、この叙事詩にとって持っている意味に関して、ホールの説に従うならば、前480年以降、ひとびとは誤解して来たという事情のひとつの局面を本稿は、一部ではあるが明らかにした、としよう。『イリアス』を正確に読むには、ギリシアとトルコ、ギリシアとペルシアというような後に成立した民族差異を時代錯誤的に持ち込んではいけけないのだ、ということの一部を明らかにしたとしよう。しかし、一方で、この比喩にも明らかのように、『イリアス』には、トロイア勢をある対照の極として定位しようという傾向ははっきりと見える。では、その対照とは何と何についてのものであろうか。文献学的・言語学的な本稿の「文脈」を明らかにするという目的に沿う限りで簡単に触れたい。

対照は、民族的・国家的なそれではなく、ギリシア語英雄叙事詩の立つ世界

(11) たとえば、Tyr. frg.10-West 15-18に見える、「若者たちよ、戦列を離れるな、逃亡を考えるな」という教化を見よ。あるいは、与えられた戦列上の位置という意味が拡大するが、レオニダスの率いるスパルタ兵300を中心とする部隊がテルモピュライという与えられた部署を守って全滅にいたる、ヘロドトスによる感動的な記述(Hdt.7.198-233)を思い起こしてほしい。あるいは、アルキビアデスの息子の戦線離脱罪の嫌疑をめぐるリュシアスの弁論(Lys.14)も。これらが、「戦列を離れるな」という命題に関して筆者がすぐに思い浮かべることのできる箇所であるが、前古典期および古典期の詩と散文は「軍が、ポリスが、君に与えた部署を死守せよ」というメッセージに満ち満ちていると言っても言い過ぎではない、と思う。

認識があるとすれば、その世界の中心と周縁という関係の中で行われていると、本稿筆者は読んでいる。そして、中心と周縁という思考の組み合わせが、否応なくそこに歴史認識を包含しているとすれば、中心は文明史的歴史的に進んだ部分、周縁は遅れた部分ということになる。言うまでもなく、アカイア勢の故地たるギリシアの本土がここでは中心である。トロイア勢は周縁に位置するひとびととである。

(北海道大学)

ヒッポクラテス文書集成『医術について』本文校訂ノート (1)⁽¹⁾*de arte* 4.1—Jouanna⁽²⁾

安西眞

まず、この文書の中世伝承(関連するパピルスはない)についての現在のところ到達点と判断されている見解を簡単に説明しておくべきであろう。この文書の全体を伝える中世写本は20本⁽³⁾。そのうちM (Venetus Marcianus gr.269)の系統に属する本が19本。全くこの系統に属さないA (Parisinus gr. 2253)という本が別にある。M系が、直接Mに依存している(残りの18は、世代の距離こそ違いが、直系)のか(Jouanna⁽⁴⁾)。あるいは、MもM系というひとつの流れの、一番古いにしてもひとつの支流にすぎないのか(Gomperz⁽⁵⁾)。この問題については、筆者はいまのところ最終的な判断を保留している。事情があつてMが未入手で、さまざまな校訂版がMの読みについて報告するところと、実見可能な状態にあるI (Par. gr. 2140)、H^bなどというMと世代的に近い本を照らし合わせている段階にあるからだ。ただ、どうやらJouannaが想定する伝承形態が極めて実体に近いのではないかと考え始めている。

Jouannaは、従つて、本文再構築の基礎となるべき中世伝承の祖本を構成する段階で、M(10世紀書写)とA(11世紀書写)にもつぱら頼り、IH^bは書写者Mの手が確定できない場合に限って報告している。筆者がこの原則に変更を加える必要があると判断する箇所は*de arte*に関する限り見つかつていない。以上が、

(1) 本稿の査読をして下さったおひとりにここでお礼を申し上げておきたい。その査読者は一応掲載を可とするが、自分にはJouannaの印刷したフランス派ヒッポクラテス校訂の伝統とも言える本文(注6参照)が一応読めるようにも思える、と明快な意見を含む但し書きを付けた論評を寄せられた。筆者はかなり深刻にその論評を受け取り、いったん、本号でのこのノートの掲載を見送るべきではないか、という選択肢まで考えた。しかし、筆者の感じているフランスで伝統的に採用されてきた本文への疑問を今少し明確にした上で、現在一応これが最善であると考え案を提示するのもして無意味ではないだろうと考え、本号への掲載を決断した。このことをここでお断りしておきたい。

(2) J. Jouanna, *Hippocrate, Œuvres Complètes*, vol. V, Collection des Universités de France, Paris, 1988 (以下Jouannaという形で指示する)

(3) その詳細についてはJouanna 193に見ることができる。

(4) J. Jouanna, 192-211

(5) Th. Gomperz, *Die Apologie der Heilkunst*², Leipzig, 1910, 60-69

de arte の中世伝承についてのおおよその見取り図である。

次に、*de arte* の標準テキストとして現在認められている Jouanna の該当箇所の本文と、関連する写本情報その他を提示する。

καὶ φασιν οἱ τὰ χεῖρῳ λέγοντες διὰ τοὺς ἀλισκομένους ὑπὸ τῶν νοσημάτων
τοὺς ἀποφεύγοντας αὐτὰ τύχῃ ἀποφεύγειν καὶ οὐ διὰ τὴν τέχνην.

(Jouanna 訳：「そして医術を、病いに擱まるひとびと（の存在すること）を根拠に、より悪く言うひとびとは、それ（病い）を逃れるひとびとは、めぐりあわせでそうしているのであって、（医という）技術をつうじてそうしているのではない、と主張するのである」）

post νοσημάτων hab. καὶ M // τύχῃ A⁴M τύχει ? A

少なくとも 19 世紀以降は、ヒッポクラテス研究で大きな役割を演じてきたフランスの校訂者たち⁽⁶⁾はこの本文を印字してきたし、また訳を付ける場合はおおむねこのような訳を付けてきた。

筆者が上の本文について感じている疑問は 2 つある。ひとつは前置詞 διὰ（引用本文一行目に見られる方のそれ）の使われ方であり、もうひとつは、ap.cr. に記された καὶ の処置をめぐる対応である。

後者の方から考えてみよう。Jouanna の想定する伝承形態が正しいとすると、A と M は、この作品の中世伝承中の祖本から出る 2 本の線を意味していることになる。言うまでもなく、理論的には、variant が生じた場合、A が正しい、M が正しい、どちらも正しくない、この 3 つの可能性は同等の確率的価値をもって生じるはずである。具体的にくだんの καὶ の場合は、どちらも正しくない、はあり得ないので、M が正しく伝えているか、祖本にないものを書き加えてしまった、かは、あくまでも理論的には半々の可能性で認めなければならない。

さらに付け加えると、A と M は古い写本で我々はこの文書に関してはかなり古い形にまで、文字の跡を追ってたどりつけるという幸運に与れているのだが、どちらも非常に写し落としの多い本なのである。時間のあるひとはこの *de arte*

(6) E.Littre, *Œuvres complètes d'Hippocrate*, vol.6, Paris, 1849. この全集版は、今でも重要な校訂テキストであり、現在進行中の Jouanna たちのこれにかわる全集版出版の試みがまだ、比較的人気のある作品に限られている現状では、多くの作品に関する標準テキストたる評価を失っていない。

の10章の近辺を、校訂注をたんねんに見ながら、AとMが実際はどんな本なのか考えてほしい。どちらの本も、それぞれ単独で読むならば、おおげさに言えばギリシア語で書かれた敬意に値する文書だとは思えないような抜け落ち方を見せていることが分るだろう。ところが、AとMを重ね合わせてそれぞれ補っていくと、そこにはかなり緻密なギリシア語の文が見えてくる。こういう不思議な経験が出来る。

要するにここでの結論として、καίがMに見えることを、これまでのフランス派の校訂者たちの一致した態度ではなく(つまり不注意な付け加えとみなす)、正しい伝承である、と考える根拠は、少なくとも、私の理解する写本伝承の原理に関わることがからすればじゅうぶんにあると思える⁽⁷⁾。

この時点で前置詞 διὰ の問題を考えることを始めよう。さまざまに読み取る位置を変えて読んでみるのであるが、どうしてもこの前置詞に対する違和感は払拭出来ない。以下は、結局それを除去する試みとも言える。

この作品ではかなり前置詞 διὰ + 対格の形が使われている。すべて列挙してみよう：

ὁ δὲ παρεὼν λόγος τοῖσιν ἐς ἱητρικὴν οὕτως ἐμπορευόμενοι ἐναντιώσεται, θρασυνόμενος μὲν διὰ τούτους οὐς ψέγει, εὐπορέων δὲ διὰ τὴν τέχνην ἥ βοηθεῖ, δυνάμενος δὲ διὰ σοφίην ἥ πεπαιδευται. (I.3)

οἶμαι δ' ἔγωγε καὶ τὰ ὀνόματα αὐτὰς διὰ τὰ εἶδεα λαβεῖν. (II.3)

Εἰσὶ δὲ τινες οἳ καὶ διὰ τοὺς μὴ ἐθέλοντας ἐγχειρέειν τοῖσι κεκρατημένοισιν ὑπὸ τῶν νοσημάτων μέμφονται τὴν ἱητρικὴν (VIII.1)

ν δ' ἐν ᾧ τοῦτο ὁράται, κρατηθῇ διὰ τὸ βραδέως αὐτὸν ἐπὶ τὸν θεραπεύσοντα ἐλθεῖν ἢ διὰ τὸ τοῦ νοσήματος τάχος, οἰγήσεται. (XI.5)

かなりの頻度だと言えるであろう。しかも、これらの使い方は何もの(者／物)かの故に何かが起きるという原因等を言う表現に限られている(LSJ, s.v. “διά”, B, III 1 et 2)。さらに言えば、上の諸例ではすべてその起きる何かは明示的に示されている(θρασυνόμενος, εὐπορέων, δυνάμενος, λαβεῖν, μέμφονται, κρατηθῇ,

(7) フランス派以外の最近の対応は以下のようである。Gomperz (前掲)、Heiberg (I.L.Heiberg, *Hippocratis Opera*, C.M.G. I,1, Berlin, 1927) とともに、本稿の結論と同じ読みをとっている。

κρατηθῇ)。

以上の例示は結局、Jouanna の訳がこの作品での、そしておそらくは一般的な前置詞 *διά* + 対格の用法に即しているということを確認しているにすぎない。そして序でに、それが Jouanna の立てた本文を基礎にするかぎりほぼ唯一の可能な解釈であることも付け加えておこう。なぜなら、もうひとつこの *διά* + 対格を *ἀποφεύγειν* に関連させて読む方法があり得るが、しかし「病いに悩まる人がある故に、病いから（めぐりあわせで）逃れる」を認めれば、悪夢の世界に我々は存在していることになるだろうから、である⁽⁸⁾。

この例示によって、本稿筆者が何をいぶかしんでいたかが明らかに出来るように思われる。恐らく我々が問題にしている *διά* と最も近い使い方がされているのは上にあげた最初の例 (*θρασυνόμενος μὲν διὰ τούτους οὓς ψέγει*) ではないだろうか。

類似の第 1 点は、何かをつうじて何かが起きるとどちらも言っているが、その何かと何かの関係がやや屈折していて、にもかかわらず、第 2 点としては、その関係が直接には表現されていないということである。

屈折しているということの意味は、すぐ次にあげられた例 (*εὐπορέων δὲ διὰ τὴν τέχνην*) と比べてみれば分る。「技術のせいで算段に満ちている」と言われる時、*τέχνη* と *εὐπορέων* の関係は極めて直接的なものである。*νικήσαι διὰ .. Ἀθήνην* (*Od.8.520*-LSJ, s.v. *διά* B-III-1 で引用されている最初の例文) というように、対格のひとつ（ここでは神）が喚起するイメージと生じることの関係は直線的である。*θρασυνόμενος διὰ τούτους* (I.3) では、結局文脈から *τούτους* はそのものたちの「無能・無知」を含意していることが分る。しかし、我々の例 (IV-1) ではもっと分りにくい。一般に、古代でもそうであろうし、現在でもそうであるが、病いに悩まる（結局治癒しないで死ぬ、等々）者が居るからといって医術や医師を悪くは言わない。治療に際して明らかな過誤や失態を医師が演じない限り。

その *οἱ τὰ χεῖρω λέγοντες διὰ τοὺς ἀλισκομένους ὑπὸ τῶν νοσημάτων* の具体的な意味は文脈によって、就中、続く *τοὺς ἀποφεύγοντας αὐτὰ τύχη ἀποφεύγειν καὶ οὐ διὰ τὴν τέχνην* の句によって明らかになる。つまり、病いに悩まっ

(8) なお、Littré は、*νοσημάτων* の後ろにカンマを置いている。そうすれば、このやや構文が理解しにくい文を校訂者の理解するところに従って読むことが容易である。本稿が主張するように *νοσημάτων* の後ろの *Μ* による *καὶ* を読まないのであれば、せめてこのカンマは必要であろう。

うひとは「めぐり合わせ」によってそうになってしまうのであって、技術がそこに介在しなかったことは明らかなのだ。つまり、医術という技術が存在するということは極めて疑わしい、ということが τὰ χεῖρῳ λέγοντες には意味されているということになる。

そのように理解することは、ここで詳しく議論しはしないが、この文脈全体に合致する。簡単に言えば、我々が議論している文 (IV-1) の直前の文 (ὅτι δὲ οὐ πάντες, ἐν τούτῳ ἤδη ψέγεται ἡ τέχνη) の内容を、この文は敷衍・説明していることになる。

このような道筋で考えてくれば、νοσημάτων のうしろに M が伝えている καὶ が過誤による書き加えである可能性は極めて小さいと私には思える。以下、その語を含んだ本文と訳を提示して説明にかえたい。

καὶ φασιν οἱ τὰ χεῖρῳ λέγοντες διὰ τοὺς ἀλισκομένους ὑπὸ τῶν νοσημάτων καὶ τοὺς ἀποφεύγοντας αὐτὰ τύχῃ ἀποφεύγειν καὶ οὐ διὰ τὴν τέχνην.

「そして医術を、病いに攔まるひとびと(の存在すること)を根拠に、より悪く言うひとびとは、それ(病い)を逃れるひとびとの場合も、めぐりあわせでそうしているのであって、(医という)技術をつうじてそうしているのではない、と主張するのである」

つまり、読む側から言うところということになる。διά の使用法を検討することで一部明らかにしたように、ここでの著者の文は、かなり省略を含んだ、別の意味では屈折したものになっている。かろうじて νοσημάτων のうしろに M が伝えている καὶ があるために著者の意図した、διά の使用法を含むこの文の意味は曖昧にならずにすんでいると思えるのだ。そのような καὶ が不注意による付加だと考えることは難しい、と判断すべきではないのか。

現在、ヒポクラテス本文研究をリードしている Jouanna は、他のことはいざ知らず、A を M にくらべて過度に高く評価するという一点に関しては原理的な過誤におちいつているのではないかと筆者は危惧している。上の短い論は、そのことの小さな例示である。祖本を、そこから出る 2 本の線の上にある A と M を証人として再構築する場合、原理的には、A と M はどこまでも同等の証言価値をもつものとしていったん認めなければならない。どちらが真実を多く伝えているかは、すべての証言を総和して言いうる小さな結果にしかすぎないし、

まだ、我々はその総和について議論する位置にない⁽⁹⁾。

(北海道大学)

-
- (9) 本稿が最初に査読者に渡された時点では、Mの伝える και を読んだ上で、本稿が問題にした διὰ と、さらに νοσημάτων の後ろの τοὺς も削除する校訂案が示されていた。この案はギリシア語としては立派に読めると今でも確信しているが、なにぶん手術の範囲が広すぎて、最初から躊躇とともにあった校訂案でもあった。本稿は筆者にとっては書き手の διὰ のいくらか特異な用法を検討して、このノートが示した、より躊躇の小さい校訂案を納得する、という意味を持っている。たいして重要な意味を持っていそうもない些末な議論をしたかに見えるが、少なくとも、この作品の新しい校訂を目論む者にとってはけして無意味な議論だったとは思っていない。査読者と、さらに最初の校訂案に対して「手術が大きすぎる」と言って批判してくれたひとりの古典学者に対する感謝をここに記しておきたい。

ヒッポクラテス文書集成『医術について』本文校訂ノート (2)

de arte 11.6—Jouanna

安西眞

1

de arte 11.6—Jouanna⁽¹⁾の本文に関わる以下の議論は、本文に関わる処置(すなわち *paradosis* の擁護)に関して言えば、既に本稿筆者から見れば妥当と思われる判断が Daremberg によって 19 世紀の半ばに提示されている⁽²⁾。にもかかわらずここで筆者は、基本的には彼の処置をよしとすべきであるという内容の主張をしようとしている。彼の主張を繰り返す理由のひとつは、彼の提案が彼以降の本文校訂 (Ermerins⁽³⁾, Reinhold⁽⁴⁾, Gomperz⁽⁵⁾, Heiberg⁽⁶⁾) に残念ながら影響を与えなかったという事実そのものである。正しい理解はあくまで主張され、認められる必要がある。第2の理由は、この文書の書き手はかなり弁論術的な知識と経験の持ち主と見えるが、その事実をこれまでの校訂者あるいは注釈者たちが、現実には軽視してきたという事実である。Daremberg の提案が軽視されたのは、こういう事実と深い関連がある。Daremberg の提案に従うことによって、また、彼の本文選択を弁護することによって、現在の研究者たちの意識の水準を考慮に入れると、この文書の弁論術的性格をより正しい光のもとに置くことができると筆者は判断する。この文書の書き手の正体、ひいてはこの文書の性格を考える上で、この一節の理解は大事な意味を持っていると思う。だからあえて、「二番煎じ」、と言われかねない議論をする⁽⁷⁾。

(1) J. Jouanna, *Hippocrate, Œuvres complètes*, V, 1, Paris, 1988.

(2) Ch. Daremberg, *Œuvres choisies d' Hippocrate*, 2nd ed., Paris, 1855.

(3) F. Z. Ermerins, *Hippocratis et aliorum medicorum veterum reliquiae*, vol. II, Traiecti ad Rhenum, 1862.

(4) C. H. Th. Reinhold, *Ἱπποκράτης*, vol. I, Athens, 1865.

(5) Th. Gomperz, *Die Apologie der Heilkunst*, 2nd ed. Leipzig, 1910.

(6) I. L. Heiberg, *Hippocratis Opera*, C. M. G. I, 1, Berlin, 1927.

(7) ただし、筆者が二番煎じであることをあえて認めるのは、ひとつには、Daremberg が MA 写本をそのまま読むべきだという主張をしたという点について賛意を表するという点であり、もうひとつには、この文には明らかな均衡と対比が文構造として見えるということに賛意を表するという点である。この2点に類似は限られる。

2

問題の箇所は de arte 11.6—Jouanna である。文がどこで始まり、どこで終わるかということも校訂者たちを悩ましてきたことのひとつであるから、問題の箇所の前後をやや広く引用する：

.....θάσσον· προλαβὸν δὲ θάσσον·
 προλαμβάνει δὲ,διὰ τε τὴν τῶν σωμάτων στεγνότητα,
 ἐν ᾗ οὐκ ἐν εὐόπτῳ οἰκέουσιν αἱ νοῦσοι,διὰ τε τὴν
 τῶν καμνόντων ὀλιγωρίην,ἐπιτίθεται· οὐ λαμβά
 νόμενοι γὰρ ἄλλ' εἰλημμένοι...

A 写本 (Parisinus gr. 2253) の、この部分を写した頁 (80r) の配置を概念的に表示すると上ようになる。上の概念図ではカンマの後ろにスペースが取ってないが、それは A の配置に近づけてあるためである。中世伝承の祖本の形を定めるもうひとつの本である M (Marcianus gr. 269—筆者未見) については、Jouanna の報告に従い、また、M からの直接の伝承線上にあると判断される、I (Parisinus gr. 2140) と H^b (Parisinus gr. 2142) を参考にして、この校訂ノートは作られている。問題は上の最後の行にある ἐπιτίθεται を巡っておきている。

A は全体としても、上のようにして、スペースを使って文のはっきりした切れ目を表現している。句読点は多くは打たれていない。いくつか見える句読点的なものうち、high-stop 風のは A の写し手自身によるものと思える。ほぼ、スペースの「空き」と連動しているからである。上の表示でカンマで表現したもののほとんどは、後からこの写本に関わった者の手 (A²A³A⁴) によるのであろうと推測できる。これもスペースとの関連からである。これらカンマは語と語の間隔がないところへ、モノクロ写真でも明確に色合いの違いが分る、太さも違うもので記されているからである。

句読点について記したのは、ἐπιτίθεται という語の前のあるいは後ろの文への所属如何が校訂者たちの頭を悩ましてきたと思われるからである。Jouanna のテキストに付された、この語を対象にした ap.cr. をここに再録する。

ἐπιτίθεται AM: ἐπιτίθενται A^{com}: ὑπερτίθεται γὰρ Zwing.^{ms}: ἐπεὶ ἔοικε Littré: ἐπεὶ τί θῶμα; Gomperz

実際にはさらに多くの読み替えが提案されいるのだが、その中から選ばうというのではないので、Jouanna がじゅうぶんと判断した範囲にとどめておきたい。この範囲だけでも、ルネサンス以降の推測読みのすべてが ἐπιτίθεται を核にして別の文を作り出そうとしていることが分るだろう。そしてこれと全く無縁ではないのだが、ἐπιτίθεται の主語に関して、A^{corr} と同じ種類の疑問を持っていることも分るだろう。A^{corr} の推測していることは、そこになんらかの判断が働いているとすれば、ἐπιτίθεται の主語として可能性の高いのは、αἱ νοῦσοι だという判断であろう。複数形の動詞はそのようなものとしてのみ意味を持つからだ。

また、提案された推定読みのすべてが ἐπιτίθεται から別の文を作り出そうとしていることは、ἐπιτίθεται の前に A² あるいは A³ が打ったカンマが引き起こしたことだ、とも言えるであろう。

ついでに言えば、最も新しい、かつ、最も AM の伝承上の意味（祖本の形を決定する 2 本の伝承線そのもの）を正確に理解している校訂本（Jouanna 版）も、結局 ἐπιτίθεται の前に打たれたカンマに縛られている。彼は、προλαμβάνει δὲ で文を開始し、ἐπιτίθεται の前にカンマこそ打たないが、かわりに関係代名詞 ἣ を挿入し、そしてそれに ἐπιτίθεται を従わせてそこで文を閉じているからである。すなわちある種 ἐπιτίθεται を独立させているのだ。そして次のような訳を付す：「病いは患者に先んじる、ひとつには、諸病が見えないところに巢食う身体の隠蔽性の故に。もうひとつには、それに加わるところの患者の病いへの軽視によって。」

ここでこの文の置かれた文脈を簡単に説明しておこう。技術としての「医」に大きな障害がある。病いが直接視認できないことによって、病いの発見が遅れ、従って治療が後手にまわり、病いが先行し、破局に至る事態がある、という難問である。しかし、この視認の遅れ、そしてそれによって結果する破局に関しては、患部を見えないところに持つという「自然」と、患者の無知（ここでは軽視という表現になっている）と無力に責任を求めるべきことであって、技術としての「医」を責めるのは意味がない。ほぼ、こういう文脈中に上の文は置かれている。

校訂者たちを惑わしてきた理由は以上を要するに 2 つ。ひとつは、ἐπιτίθεται がどの文に所属するかということ。もうひとつはこの動詞の意味がどのようなものであり、またその主語は何か、ということである。両者は当然ながら連動する。

それから、もうひとつ。写本 A と M が CH *de arte* の中世書写伝承上の祖本の形を決める文句無しの 2 つの源泉であるということが、今日の文献学が到達した結論であること、そしてそれがきわめて説得力の高いものであるということは、それとして認めるべきであることは筆者も実感している。しかしその時、 $A^2A^3A^4M^2M^3$ などという形で Jouanna が校訂本で使用している記号に該当するそれぞれの写本への、原本成立の際の書写者以外の介入者の行為はどのような位置を占めるべきなのか？ こういうごく基本的なことがらについての問題もこの箇所は投げかけているように思う。もちろんこの基本的な問題についての態度は簡明であるべきだ。もし、 $A^2A^3A^4M^2M^3$ が原書写の訂正その他を行った際、AM が書写した祖本その他の原本と同じものを見て訂正等を行っていることが明らかである場合を除いて、これら後発の読みは、祖本の読みの再構築に生かすべきではない。少なくともそのことに関して慎重であるべきだ。それら後発の読みが、祖本の読みとは違う経緯で古代の読みを伝えているという可能性を留保しつつも、あくまでも、推定読みという基本的な色分けのうちにいったん分類した上で考えるべきなのだ。

それを、この ἐπιτίθεται をめぐる処理の問題の場合、Gomperz にせよ、Jouanna にせよ、それぞれ微妙に評価は異なるが、基本的には AM の持つ決定的な意味を承知している校訂者たちが、完全に上に記した原則を忘れて、 A^2 あるいは A^3 の打ったカンマから思考を開始しているとしか思えないのはどうした訳であろうか。Jouanna などは次のような補注を ἐπιτίθεται につけている：「ἐπιτίθεται は前の文についているのか、後ろの文についているのか判然としない」⁽⁸⁾。

確かに、I や H^p から推定するかぎり、M ではそうかも知れない。しかし、A を最初の書写段階の現状にもどして考えれば（それは A をたとえば写真をつうじてであっても目にしさえすれば、それほど難しいことではない）そんなことは言えないはずだ。その段階では ἐπιτίθεται の前にはいかなる句読点もなく、スペースも置かれていない。逆に ἐπιτίθεται の後ろには high-stop が打たれて、明らかなスペースが置かれ、続く οὐ λαμβανόμενοι γὰρ⁹ は明らかに新しい文単位が開始されていることを告げている⁽⁹⁾。

(8) Jouanna, 263

(9) γὰρ の後ろの high-stop は、スペースもなく、色は判断できないが、他の A によるそれとは違って点そのものがかなり大きく、恐らく A 以外の手によるもの。なお、ここでは οὐ λαμβανόμενοι は、続く ἀλλ' εἰλημμένοι（病いに捕まってしま

ちょっと、小ノートにしては長い脱線が多すぎたという反省があるので、結論を急ごう。Daremborg は、προλαμβάνει に始まり ἐπιτίθεται で終わる文にはきれいな平行、繰り返し、対比構図が見られるというのが、彼の主張を生かして、この文を次のような形で図式的に配置すれば AM の伝える読みが正しいものであるという可能性は一気に見えてくるだろう。

προλαμβάνει δὲ

διὰ τε τὴν τῶν σωμάτων στεγνότητα ἐν ᾗ οὐκ ἐν εὐόπτῳ οἰκέουσιν αἱ νοῦσοι

διὰ τε τὴν τῶν καμνόντων ὀλιγωρίην

ἐπιτίθεται

わざわざこのように図で示した意図は、言うまでもなく、προλαμβάνει と ἐπιτίθεται の主語は同じだということである。そのように少なくとも筆者は読む。つまり、最初の引用には見えていた分詞 προλαβόν に対応する中性名詞 νόσημα (病い) である。ἐπιτίθεται は LSJ, s.v. ‘ἐπιτίθημι’, B, III, 2 に分類される用法で使われている。すなわち、med. で、普通は与格とともに「～を攻撃する」という意味で使われる用法である。文脈によってはもちろん与格を省いた形で使われることもあることを LSJ は記している (Th.7.42.1)。ここでも、攻撃される者は文脈によって明白 (τῶν καμνόντων によって指示されている人間) であるから表現されていない。προλαμβάνει も、明らかに他動詞であるのに、対格なしで使われている。目的語が患者あるいは τῶν καμνόντων によって指されている存在であることは明白であるからだ。そして文全体を形を生かして翻訳すると：「(病いは) 先制攻撃を仕掛ける、諸病が巢食う場所が身体によって隠蔽されているが故に可視ではないという事実をつうじて。そしてまた、(病いは) 病いにおかされた人間たちの不注意をつうじて追加攻撃を仕掛けるのだ。」

さらに、προ- と ἐπ- という前つづりの持つ対比的な意味(「さきに～する」と「あとから～する」)にも注目したい。その「さきに～する」が文の先頭に来て、「あとから～する」が最後に来る。そして中間は明らかに並行的な構造を持ったものの繰り返しで構成される。これはほとんど詩的というよりもう遊戯に近い文の構成法である。上にあげた図はそういう構造を我々に見せてくれている。

って) と対応してひとつの概念、つまり、病いに捕まりつつある状態、を表現している。γὰρ が文開始の 2 語目ではなく、ひとつの句の後ろ (語の単位で数えれば 3 番目) にくるケースである。cf. Denniston, *GP* 95-96

最後に、校訂者たちに、そしてCH読みたちにさまざまな混乱をもたらしてきた ἐν ᾗ οὐκ ἐν εὐόπῳ οἰκέουσιν αἱ νοῦσοι という「付加物」について、やはりひとことふたこと言っておかねばなるまい。

まず、先きにあげた図式からこの部分を取り去ってみよう。そこには、完璧な構造が出来上がる。完璧な構造は見れば分るから説明しない。この文書の原初の書き手に対して、不遜にもギリシア語作文教師となって「これを取ったらどうか」などと勧めてみたくもなる。そのことは、いくら真剣な意味も含意された冗談としておくけれども、この部分が、校訂者や中世写本に書き込みをした者たちに多大の混乱をもたらしてきたことは説明してきたように事実である。特に νόσημα という単数形で表現される概念と、αἱ νοῦσοι という複数形で表現される事象との弁別の難しさがこの混乱の根底にあることは簡単に見て取れるだろう。もちろん、この文書全体を知る者には、書き手が当時(前5世紀後半)の哲学的な議論をよく知る者であることはじゅうぶん分っている⁽¹⁰⁾。要するに単数で普通示される概念枠とそれに包含されうる諸事物との関係を区別できる者には、混乱は生じない、とも言える。しかし、そこにはひとつ重大な問いが潜んでいる。この文書は明らかに演説の形を取っているのだ。

ギリシア語作文の水準の、あるいは文芸批評的な水準の問題は別としても、文献学的にこの文書に接近しようとする者にも、この付加された ἐν ᾗ に導かれた関係節が実際にもたらして来た混乱は、実はある重大な意味を持つ。つまり、中世あるいはルネサンス以降の読み手が見せた混乱の一番奥にある問題、νόσημα と νοῦσοι の区別を、この文書のもととなったかもしれない、実際に行われたとされている演説行為の聴衆はできただろうか、ἐπιτίθεται の主語が νόσημα であることを理解できただろうか、という疑念である。少なくとも、Aに介入した「直し手」や、ルネサンス以降の校訂者たちには区別は難しかったのだ。これがさきの冗談の背後にある深刻な意味のひとつである。

この疑問に対しては現在のところ筆者は2様の解答を用意している。実際に演説は行われた。その言わば上演行為の中で、προλαμβάνει と ἐπιτίθεται の主語の同一性は、休止や、抑揚、音声の強弱などの手段をつうじて確保できただろう。これがひとつの答えである。

もうひとつには、演説の形態を持つてはいるが、この文書は実際には「上演」を予定したものではなかった、という可能性を指摘したい。プラトンの「弁明」

(10) 古代哲学史家である Gomperz (注5参照)をして、かなり真剣にこの小冊子の作り手をソフィストの流れの中に位置づけようと試みさせたほどに。

を思えばよい。「弁明」は言うまでもなく、実際に陪審員の前で演じられることを目的としたものではない。

筆者は、後者が事実ではなかったかと疑い始めている。確かに、立派な *peroratio* を持ち、ウィットに富んだ *prooemium* をこの「演説」は持っており、作者の並ではない文章構築技術は、その一部を紹介したばかりではある。しかし、この文書には、聴衆らしきものたちに対する呼びかけも、それらの存在無しには考えられないような2人称表現を使った言語交流も見出すことができないのである。こういう特徴は少なくともアテナイの古典的な演説には見出すことができない。そこに、たとえばアンティフォンの、上演されなかったことが確実なものを含めてもそうなのである。

以上、CH *de arte* を正確に理解するには、あるいはまた、この文書の校訂・注釈本を作るのにも、この文書の作り手が他のCH文書の作り手とは質的に違った修辭的能力を持つ者であること、またこの文書そのものも、明らかな修辭的な意図をもって作成されたのだということを自覚した上でなければ難しいということを、ルネサンス以来の校訂者たちの—あるいはここに中世写本へ書き込みを行った者を含めてもいいが—ある箇所をめぐる混乱と、その部分を伝える2つの根本写本の読みの正しさとを対比するという形で論じた。

(北海道大学)

*A Thorn in the Flesh of Doctrinal Readers of Plato:
a note on signum interrogandi at the end of an οἶμαι sentence, Rp. 335d.*

Akitsugu Taki

Οὐ γὰρ θερμοτήτος οἶμαι ἔργον ψύχειν ἀλλὰ τοῦ ἐναντίου. Ναί.⁽¹⁾ (Rp. 335d)

The copyist of Parisinus graecus 1807 (Codex A), no one knows on whose advice, used a question mark to end the sentence at Rp. 335d⁽²⁾, and this punctuation has been followed by the copyist of the Lobcovianus manuscript, according to Schneider's report. As far as I know, however, no modern editors⁽³⁾ do this, nor do any commentators⁽⁴⁾ explain such a trifle; yet among over forty translators of this *magnum opus*⁽⁵⁾, Davis, Jowett, Robin, Lindsay, Vretska and Grube & Reeve put a question mark. They left no note *ad locum*. Hence, in what follows I vindicate their practice, not least Robin's.

First, the parenthetical use of οἶμαι occurs with a wh-question, like the verbs ἀπορώ and ἔρωτῶ, once at D. 36.44 (cf. γ 255), or with an explicit interrogative force, once at Rp. 558c-d, although modern readers drown out the interrogative tone there⁽⁶⁾.

Second, the parenthetical use of "I believe /think /suppose" in English suggests that by the parenthetical use of οἶμαι a speaker can intend to ask a question. According to anglophone linguistic philosophers' analyses⁽⁷⁾, someone who says, "I believe / think / suppose" parenthetically still has to be sincere in commitment to the embedded

Thanks are due to Alan Evison, Damien Nelis, Gilles Kennedy, Harold Tarrant, Kelly Ise, Makoto Anzai, Margaret Sonmez for information about the English language, comments etc, but most of all, to Michael C. Stokes and Peter J. Rhodes for reading earlier drafts in detail and giving useful criticisms and suggestions. Yet the responsibility for the remaining shortcomings is mine.

(1) F (here and below, according to Burnet's sigla): omit ναί; supra ναί (translation following F's reading: Jowett (a); Saisset). No editors adopt this reading.

(2) *Pace* Boter, 80. See Taki, 2008.

(3) See the bibliography below.

(4) See the bibliography below.

(5) For the translations I consulted, see the bibliography below.

(6) For D. 36.44, Sandys & Paley, Pearson, A.T. Murray; For Rp. 558c-d, Vretska, Waterfield.

(7) Urmson, 1952; Simons, 2007.

proposition. Even though, in spoken language, weakening in anticipation the assertiveness of what the respondent is ready to assert (e.g. ἄρα ... ὥς ἔοικε) triggers his or her response, they assume that the parenthetical use of opinion verbs unavoidably has an assertive character, however much it may be weakened. This use may be too subtle to be reduced theoretically to the standard and explicit, and hence unsophisticated, performative utterance⁽⁸⁾, “I hereby ask you whether ...” However, linguistic data such as The Bank of English⁽⁹⁾ show that there are a number of examples, in both written and spoken sources, especially in British English and with the verb “I suppose”, of a sentence with a question mark. Also anglophone informants, asked about the parenthetical use of these verbs, suggest that while the type “_ p _, I believe / think / suppose” (‘p’ for a proposition such as “the earth is flat”), if used to intend to ask a question, sounds rather unnatural, the type “You mean that _ p _, I believe / think / suppose”⁽¹⁰⁾ sounds more natural. Therefore, in practice, although the potential interrogative force varies among parenthetical verbs and among local and social dialects, the parenthetical use of the opinion verbs can be, and sometimes is, found in an utterance of interrogative force. Among the ancient Greek parenthetical verbs Kühner enumerates (II, 2, 353, 3), οἶμαι (ὁίω)⁽¹¹⁾ is the only verb with such function (Ast’s *Lexicon s.v.*).

(8) For the standard and explicit performative utterance, see Austin.

(9) *Wordbank*, Collins COBUILD on CD-ROM, HarperCollins, 2001.

(10) Any speech embodying the proposition which refers or alludes to the respondent in action, speech, intention, belief, disposition, and social position as logical subject can sometimes be reduced to this type.

(11) Parenthetical use of οἶμαι, οἶμαι, ὁίω (references with an asterisk leave the possibility that the omitted copula is εἶναι): Θ 536, N 153, β 255, ξ 363, π 309, χ 140, ψ 261; A. Ch. 758; Pr. 758, 968*; S. Tr. 536, Ant. 1051; Ph. 498; Fr. 583.4; E. Alc. 353, 565; Med. 311, 331, 588; Heracl. 511, 670, 968; Hipp. 458; El. 1124; Ba. 321; IA 392; Ar. Nub. 1185; Pax. 1286; Av. 75; Th. 2.54.3; 4.64.3; And. Myst. 19.8, 39.2, 99.2; Isoc. In Soph. 8.5; Plat. 13.4; Antid. 137.1, 236.5; Philip. 27.1; Is. 2.29; Lycurg. Leoc. 96.1; Aeschin. Tim. 13.2, 19.2, 24.2, 47.8, 58.3, 69.5, 71.6, 78.4, 78.5, 139.6, 147.5, 178.4; Fals. Leg. 3.1, 38.7, 89.1, 159.4; Ctes. 10.4, 33.2, 40.3, 137.1, 140.1, 180.2, 194.7, 211.7, 218.6, 233.7; Epist. 10.10.12; D. Ol. 1.5, 11, 20; 2.10, 14, 20, 23; 3.19, 32; Philip. 1.45; 2.4, 7, 11; 3. 64; 4.3, 6, 40; Pax 3.2; Cor. 46, 149, 225; Or. 8.12, 20, 32; 13.24, 25; 16.20; 19.24, 30, 37, 64, 67, 76, 80, 82, 95, 97, 113, 137, 173, 185, 197, 227, 254, 268, 320; 20. 3, 60, 113, 162; 21.27, 59, 67, 113, 139, 140, 147, 194; 22.25, 42, 63; 23. 47, 101, 122 (bis), 172; 24.60, 74; 29.27; 31.12; 36.12, 44, 54; 37.24, 26, 47, 56; 41.24; 43.10; 44.3, 35, 53, 66, 67; 45.20, 29, 82; 54.19, 38; 55.7, 20; 56.29; 57.46, 53; 58.20, 38; 59.48, 51,

In addition, just as the parenthetical opinion verbs of English, in the same way as adverbs such as ‘perhaps’ and ‘surely’, sometimes by position qualify part, not the whole, of an utterance, so does the verb οἶμαι (s.v. LSJ IV 2).

The reason for choosing the parenthetical use instead of a direct yes-no question is, according to anglophone informants, mainly politeness and the informed anticipation of the interlocutor’s answer. One comments, “in conversation, it may be more polite to

59; *Ex.* 24.2; *Ep.* 13.7; *Hyp. Lyc.* 6.27; *Din. Dem.* 76.7; *Fr.* 7.6.7; *X. Hell.* 5.4.32, 6.4.16; *Mem.* 2.2.9; *Oec.* 3.9, 5.19, 7.39, 15.7, 16.2, 18.1, 19.15, *Symp.* 2.10, 3.11, 8.7; *Anab.* 1.9.22, 2.1.16, 3.1.29, 3.1.35*, 3.2.8, 5.8.22, 7.6.16; *Cyr.* 1.3.11, 1.6.29, 1.6.43, 2.1.5, 2.2.3, 2.2.15, 2.2.19 (bis), 2.2.23, 2.3.6, 2.3.12, 3.1.16, 3.1.28, 3.1.34, 3.3.53, 3.3.59*, 4.1.2, 4.1.3, 4.3.4, 4.3.8, 4.5.54, 4.6.4, 5.1.13, 5.1.14, 5.2.27, 5.4.19*, 5.4.25, 5.4.34, 5.4.36 (bis), 5.5.9*, 5.5.30, 6.1.18, 6.1.40, 6.2.21, 7.1.9, 7.1.13, 7.5.50, 8.2.6; *Hier.* 1.35, 7.8; *Vect.* 4.4, 4.16; *Hipp.* 7.4, 9.5; *Pl. Euthphr.* 4a*, 8c, 8d, 8e, 12c*, 14a; *Ap.* 23c, 23d, 28b, 31c; *Phd.* 59b, 75e, 81b, 81c, 83d, 85b, 87c, 87d (bis), 95e, 101a, 102a, 103d, 106a, 106d; *Cra.* 385c, 386d, 393c, 402b, 410e, 413d, 414c, 414e, 422c, 423a (bis), 424e, 426e, 430c, 433c, 437c; *Thr.* 144e, 145d, 155b, 160b, 161e, 164e, 165b (bis), 165c, 166a, 167b, 171d, 178c, 180b, 184b, 189c, 191a, 195d (bis), 198a, 207a, 209c; *Sph.* 220d, 220e, 233c, 240e, 250c*, 251b, 267a, 267d*; *Plt.* 258c, 259e, 260a, 271b, 283c, 285d, 290b, 291d, 292b, 293a, 295a, 300b, 304d*, 307d; *Prm.* 129b, 129c, 143a, 144c, 153b, 153c, 165b; *Phlb.* 19b*, 23d, 27d, 29d, 31c, 35a, 40d, 40e, 43a, 46c, 48e, 49b, 55d, 56b (bis), 58e*, 59b, 65c; *Smp.* 181d, 182b, 182c, 183d, 198e, 204c, 205e, 208d, 209b, 209c; *Phdr.* 235c, 236a*, 240c, 252b, 258d*, 268d (bis), 270a, 276e; *Alc.* 1.106e, 107b, 107c, 110d, 112c, 113d (bis), 117a, 130c; *Chrm.* 154b, 163b, 166c, 170b, 174a; *La.* 184e, 188d, 189e, 191e, 195b, 196e*, 197b; *Ly.* 206c, 208b, 209c, 210a, 211e, 213b*, 217a, 218e; *Euthd.* 280e; *Prt.* 323d, 327b, 328a, 352e; *Grg.* 450c, 457a, 457b, 483b, 483c (bis), 483e, 484a, 484e, 485a, 492a*, 495e, 496b (bis), 496e, 505a, 510e, 511d, 511e, 514d, 520d, 525e, 526a; *Mn.* 76d, 80c; *Hp.Ma.* 284d, 288e, 290a, 290c, 295b (bis), 299b; *Ion* 536d, 540b; *Clit.* 408c, 410c; *Rp.* 332b, 333a, 335d, 336e, 337b, 340d (bis), 341d*, 346b, 351a, 352a, 353a (bis), 368d, 370b*, 370b, 389e, 390a*, 392a, 394b, 396a*, 404d, 406b, 408e, 411d, 425b*, 425c, 429b, 434a, 436c, 439b, 441d, 442b, 444a, 444a*, 444b, 452d, 453b, 455e, 458d, 460a, 461b, 462d, 465a, 466e, 468b, 485d, 487e, 490c, 491a, 491d, 492a, 494b, 501b (bis), 505c, 508b*, 508d, 509b, 516a, 516b, 539a, 550e, 553b, 553d, 554b, 554e, 555c, 555d, 557a, 558d, 559e, 560a (bis), 560b, 560c, 561a, 562c, 564a (bis), 564e (bis), 565b, 566b, 566c, 566e, 567a, 568b, 568c, 571d, 573d, 578b (bis), 579b, 583d, 587b, 596e (bis), 597b, 597d, 598c, 599b, 604a, 606b, 608d; *Ti.* 18a; *Lg.* 629b, 629d, 635c, 640c, 647a, 649b, 661c, 662e (bis), 665b, 676a, 678c (bis), 682c, 700b, 707d, 709d, 711a, 716d, 722a, 779a, 788d, 795c, 798d, 801a, 801b, 812b, 818b, 819e, 822b, 832d, 864d; (*Alc.* 2.140b, 144a, 145b, 145d, 146a (bis), 146c, 147a, 147d, 148d, 149e, 150a; *Hipparch.* 230c; *Thg.* 124b, 124e, 125e, 126a; *Demod.* 385e); *Arist. Metaph.* 1041a1; *Mu.* 391a14, 400b30, *Protr.* 62.2.

anticipate the expected answer in a tentative way rather than to ask a bald open question. It depends on whom you are addressing and how much you know about their views/ideas.” Another comments, “A reason for the choice could be, for example, wanting to show that we know our interlocutor so well that we can guess what his/her response in a certain situation [is].” Accordingly, a speaker who prefers to use some opinion verbs parenthetically, when intending to ask a question, is in a position to take advantage of the interlocutor’s attitude, commitments, and common sense. This is not far from the *ad hominem* argument of Plato’s Socrates.

Third, putting a question mark after a declarative sentence with a parenthetical οἶμαι has sometimes been tried, although it may be unnecessary, for modern linguists, and perhaps, classicists⁽¹²⁾, knowledgeable in the theory of indirect speech act, unless they wish to express a rising intonation. Hence, possible interpretations implied in this practice are worth exploring⁽¹³⁾. In editions, *e.g.*, of Plato, Burnet, although rather parsimoniously and not the first to do it⁽¹⁴⁾, tried this at *Grg.* 496b, *Phd.* 81c, *Rp.* 333a, 558c-d, and 567a, and of other classical works, *e.g.* of Euripides, Murray did it at *Heracl.* 670 and 968. In translations, the mark ‘?’ is easier to catch (*e.g.* Zeyl, *Grg.* 496a-b). Stokes, in his interpretation of *La.* 184e, queries the speaker’s full commitment⁽¹⁵⁾.

Fourth, in the structure ... γάρ ... οἶμαι ... in general, the verb οἶμαι, if it is used parenthetically rather than as the main clause finite verb governing an infinitive⁽¹⁶⁾, qualifies all the other parts including γάρ. Also the particle γάρ, if not an assertive connective, can sometimes refer not to the speaker’s but to the addressee’s previous speech (*e.g.* *Rp.* 429b; *Alc.* 1 107b, 107c; *X. Cyr.* 1.6.29; *Ar. Nub.* 1185-1186). And the causal γάρ can sometimes be used with a question (*e.g.* *S. O.T.* 1017; *Pl. Euthphr.* 12d, *Alc.* 1 125c, 130b). Accordingly, the structure γάρ ... οἶμαι ... , if it is “You said thus

(12) Diggle changes Murray’s question mark at *E. Heracl.* 670 and 968; Page Murray’s at *A. Pr.* 968.

(13) The absence of the parenthetical use of οἶμαι in *Prt.* 329d-331a and *Mn.* 82a-86a is a minor other reason.

(14) A question mark is put at *Grg.* 496b in Codex F (fol. 20^v l. 11), not in Codex B (fol. 390^v l. 7); at *Rp.* 333a in both Codices A (fol. 5^v col. 2 ll. 19-20) and F (fol. 84^v l. 4); at *Rp.* 558c-d and 567a neither in Codex A (fol. 89^v col. 1 l. 43; fol. 93^v col. 1 l. 40) nor in Codex F (fol. 185^v ll. 16-17; fol. 188^v ll. 33-36).

(15) Stokes, 1986: 59.

(16) Cf. *Lycurg. Leoc.* 28; *D. Ep.* 4.2.

because ..., I suppose”, not “In fact, I believe, ...”, comes near to being the type “You mean _ *p* _, I suppose.”

Fifth, the structure οὐ ... ἀλλά ... is, if used in discussion, often a marker for the contrast between the opponent’s and the proponent’s ideas. In that case, if the speaker is on the proponent’s side, this structure is usually used in a declarative sentence. Mostly in Plato’s works, editors put a full stop to a sentence with this structure. However, the structure as a whole can sometimes also be a unit of idea or form a contrast between a disputant’s own two admissions or ideas (e.g. *Rp.* 335d (*se excepto*), 564a-b; *Demod.* 385d-e). Hence, the structure can also be used in a question.

For these reasons, the speech at *Rp.* 335d can formally be a question as far as its grammatical and semantic structure is concerned, but whether it is depends on its meaning and context.

The context clearly is Socrates’ examination of Polemarchus’ view by asking questions. Socrates is also in an ignorant stance.

The verb οἶμαι here is being used parenthetically because, as it turns out from the ellipsis in Socrates’ next two speeches, the omitted copula is not εἶναι (*pace* Ficinus, Bastien, Bloom) but ἐστί. And as the word order and ellipsis of Socrates’ next speeches at 335d indicates, by its position in the structure οὐ ... ἀλλά ..., οἶμαι qualifies not the whole but just θερμότητος ἔργον⁽¹⁷⁾, and by splitting the phrase, it specifically qualifies θερμότητος in contrast to τοῦ ἐναντιοῦ.

The structure οὐ ... ἀλλά ... here, when “it is not X’s function but the opposite of X to do so-and-so” is fully or elliptically repeated, is used not to express a contrast in disputation between the interlocutors but by means of an indirect and contrasting formulation to reject a popular idea of the synonymy in cause and effect.

In contrast to *Grg.* 496b or *Rp.* 333a, it may appear harsh if the structure here οὐ γάρ ... οἶμαι ... ἀλλά ... is reduced to the type “You mean _ *p* _, I suppose” (οἶμαι rendered non-parenthetically: “if I am not mistaken” Davies & Vaughan; “as I imagine” Spens, T. Taylor; not rendered at all: Schleiermacher, Jowett (a), (b), Andreae, Lee, Vretska, Grube & Reeve). The particle γάρ here is troublesome if it is to be causal (Spens, Schleiermacher, T. Taylor, Ast, K. Schneider, Hirshig, Heß, Saisset, Bastien, Preisedanz, Andreae, Lee, Robin, Vretska, Bloom, Yamamoto, Rufener, Waterfield; “Yes, for ...”

(17) Cf. *Grg.* 520d. Contrast *Euthphr* 4a, 8c; Aesch. *Ctes.* 33.

and the like: Davies & Vaughan, Davis, Griffith). Whose and what opinion does Socrates imagine is the reason for the negatively formulated specific synonymy in the cause and effect of cooling? If none, γάρ here is asseverative (Apelt, Chambry, Fujisawa, Vegetti; no translation for γάρ: Jowett (a), (b), Horneffer, Lindsay, Grube & Reeve). This may be a logical conclusion⁽¹⁸⁾. Certainly Polemarchus, if prompted to consider his reason for his previous admissions, would have thought of the synonymy in cause and effect in a general, not specific, form, and would be ready to admit this general theory. Therefore, if one says that Polemarchus' reason for specific synonymities is his belief in another physical specific synonymy, which perhaps he has never thought of, does it sound absurd? Logically it is not well-ordered. However, if this orderliness is queried in conversation, it is allowable and it is perhaps for Socrates, if he is alert to every sign of his interlocutor's, dialectic. How could Socrates need, suddenly in his series of questions, to assert his own belief in a specific synonymy in cause and effect? Following Robin's translation I would rather take the dialectical *hysteron proteron* as arising from logical looseness.

Whether by omitting the copula Socrates deliberately makes the verbal structure grammatically and thus semantically ambiguous⁽¹⁹⁾, and whether his interlocutor by responding ναί catches its effect besides attending to the embedded proposition are open to further scrutiny. Furthermore, whether Socrates' intention to ask a question by the parenthetical use of οἶμαι, thus staying non-committal, is entirely fulfilled, I doubt from the interlocutor's response at 335d (παντάπασί μοι δοκεῖς ἀληθῆ λέγειν). However, the verb οἶμαι in parenthetical use or, perhaps, as a main clause finite verb if properly set in conversational interaction, will be a problem for readers, ancient⁽²⁰⁾ or modern⁽²¹⁾, who try to elicit Plato's doctrine.

(18) If Socrates were being ironical here, the verb οἶμαι could be ironical with the particle γάρ asseverative. See Paley on A. *Pr.* 777; 968 and Griffith on A. *Pr.* 968. The ironical use of οἶμαι is a criterion by which to decide whether Thrasyarchus' speech at *Rp.* 344e is a question or not (Schneider *contra* Stallbaum and Adam; see also Jowett & Campbell).

(19) The splitting position of οἶμαι appears in the infinitive structure once at *Phlb.* 22c.

(20) Bekker and C.E.Ch. Schneider propounded that from this passage Sextus Empiricus (*Math.* 11.70), Porphyrius (*Abst.* 2.41) and Eusebius (*PE.* 4.22.8) deduced Plato's thought (cf. Plutarchus *Non posse suaviter vivi secundum Epicurum* 1102D; Iamblichus *Myst.* 2.10).

(21) E.g. Whewell, Cornford and Richards in their compressed translations.

Bibliography

Editions: Adam, J. (c. comm.) *The Republic of Plato*. 2 vols. Cambridge, 1902; Ast, F. (c.tr.) *Platonis quae exstant opera*. 11 vols. 1819-1832, Leipzig; Baiter, J. G. *Platonis Opera Omnia*. ed. by J.G. Baiter, C. Orelli & A.G. Winckelmann. 6th ed. vol. 13. London, 1887; Bekker, I. (c. comm.) *Platonis et quae...scripta graece omnia*. 11 vols. London, 1826; Burnet, J. *Platonis Opera*. Vol. 4. Oxford, 1902; Chambry, É. (c. tr.) *La République*. 3 vols. (Budé) Paris, 1932; Hermann, C.Fr. *Platonis Dialogi*. Vol. 4. Leipzig, 1911 (*Praefatio*, 1852); Jowett, B. and L. Campbell. (c. comm.) *Plato's Republic*. 3 vols. Oxford, 1894; Musurus, M. *Omnia Platonis opera*, ed. by Aldus Manutius and Marcus Musurus. Venice, 1513; Schneider, C.E.Ch. (c. comm.) *Civitas Lib. I-III, Platonis opera Graece*, Vol. 1. Lipsiae, 1830; Shorey, P. (c. tr.) *Plato, the Republic*. 2 vols. (Loeb) Cambridge, Mass. 1930; Slings, S. R. *Platonis Rempublicam...*, Oxford, 2003; Stallbaum, G. (c. comm.) *Platonis Politia sive De Republica*. 2 vols Gotha and Erfurt, 1858; Stephanus, H. *Platonis philosophi / Πλατων quae exstant Graece ... cum Marsilii Ficini interpretatione* Vol. 6. Zweibrücken, 1784

Translations: Andreae, W. (c. txt.) *Staat*. Jena, 1925 (*Platons Staatsschriften, griechisch und deutsch*. 4 vols. Jena, 1923-26: vol. 2); Apelt, O. *Platon der Staat*. rev. ed. Leipzig, 1923; Bastien, A. *L' État ou La République de Platon*. Paris, [190-]; Bloom, A. *The Republic of Plato*. 2nd ed. [n.p.], 1968; Cornford, F.M. (tr.) *The Republic of Plato*. Oxford, 1941; Davies, J.L. & D.J. Vaughan. *The Republic of Plato*. London, 1912. (tr. in 1852); Davis, H. *The Republic, Timaeus and Critias*. (*The Works of Plato*. Vol. 2.) London, 1854; Fujisawa, N. (藤沢令夫) 『国家』 2 卷 (岩波文庫) 東京、1979; Griffith, T. *Plato, The Republic*, ed. by G.R.F. Ferrari. Cambridge, 2000; Grube, G.M.A. (tr.) & Reeve, C.D.C.(rev.) *Plato, Republic*. (Hackett) Indianapolis, Ind., 1992; Heß, G. *Der Staat*. (*Platos Werke*. Vol. 2) Berlin & Stuttgart, [n.d.]; Hirschig, R.B. *Platonis Opera graece et latine*, ed. by R.B. Hirschig, C.E. Schneider, J. Hunziker, F. Deubner. 3 vols. (Didot) Paris, 1856-1873 (*Rp.* ed. by C.E. Schneider); Horneffer, A. *Platon der Staat*. Leipzig, [192-]; Jowett, B. (a) *The Dialogues of Plato*, vol. 2, Oxford, 1953 (orig. 1871); *The Dialogues of Plato*, vol. 4, ed. by R.M. Hare and D.A. Russell, London, 1970; *id.* (b) *The Dialogues of Plato*, vol. 2, New York, [n.d.]; Lee, D. *Plato, The Republic*. rev.

ed. (Penguin) Harmondsworth, 1955; Lindsay, A.D. *Plato, The Republic*. (Everyman's Library) London, 1935; Preisedanz, K. *Platons Staat*. Jena, 1916; Richards, I.A. *Plato's Republic*, London, 1966; Robin, L. *Platon Œuvres complètes I*. (Pléiade) Paris, 1950; Ruefener, R. *Platon der Staat*. Zürich und München, 1973; Schleiermacher, F. *Platons Werke*. 2nd ed. 6 vols. Berlin, 1862; Saisset, M.É. *La République ou L'État*. (Œuvres complètes de Platon vol. 7) Paris, 1873; Schneider, K. *Plato's Staat*. Breslau, 1839; Spens, H. *The Republic of Plato*. (Everyman's Library) London, 1916. (tr. in 1763); Taylor, T. *The Republic*. (*The Works of Plato*, tr. by F. Sydenham and T. Taylor. 5 vols. London, 1804: vol. 1); Vretska, K. *Platon, Der Staat*, (Reclam) Stuttgart, 1958; Waterfield, R. *Plato, Republic*. (World's Classics) Oxford, 1993; Yamamoto, M. 山本光雄訳『国家』(The State)、『プラトン全集』第7、8巻 角川書店、東京、1973; Whewell, D.D. *The Republic and Timaeus*. (*The Platonic Dialogues for English Readers*. Vol. III) London, 1861.

Analyses: Allan, D.J. (c. txt) *Plato Republic I*. Bristol, 1993 (orig. 1940); Annas, J. *An Introduction to Plato's Republic*, Oxford, 1981; Benardete, S. *Socrates' Second Sailing: On Plato's Republic*. Chicago, 1989; Croiset, M. *La République de Platon*. Paris, [1946]; Cross, R.C. & A.D. Woozley. *Plato's Republic: A Philosophical Commentary*. London, 1964; Jowett, B. "Introduction and Analysis" [Analysis of the Republic], *The Dialogues of Plato*, 4vols, New York, [n.d.]: vol. 1, 1-302; Lycos, K. *Plato on Justice and Power: Reading Book I of Plato's Republic*. Houndmills, 1987; Nettleship, R.L. *Lectures on the Republic of Plato*. London, 1925; Schmelzer, C. (c. txt.) *Der Staat*. (*Platos ausgewählte Dialoge*. Vol. 7) Berlin, 1884; Vegetti, M. (ed.) (c. tr.) Platone, *La Repubblica*, vol. 1, Bibliopolis, 1998; Warren, T.H. (c. txt) *The Republic of Plato*, Books I – V. London, 1892; White, N.P. *A Companion to Plato's Republic*. Indianapolis, Ind., 1979; Wells, G.H. (c. txt.) *The Republic of Plato Books I and II*. London, 1917.

Others: Ast, D.F. *Lexicon Platonicum sive Vocum Platoniarum Index*. 3 vols. (repr.) New York, 1969. (orig. 1835); Austin, J.L. "Performative Utterances" *Philosophical Papers*, ed. by J.O. Urmson and G.J. Warnock, 3rd ed., Oxford, 1979: 233-252; Boter, G. *The Textual Tradition of Plato's Republic*. Leiden, 1989; Diggle, J. *Euripidis Fabulae*. Vol. 1. (OCT) Oxford, 1984; Griffith, M. *Aeschylus, Prometheus Bound*, Cambridge, 1983; Kühner, R. and B. Gerth, *Ausführliche Grammatik der griechischen Sprache*, Hannover, 1898; LSJ = Liddell, H.G., Scott, R. & H.S. Jones, *A Greek-English Lexicon*.

With a supplement. Oxford, 1968; Murray, A.T. *Demosthenes IV: Private Orations XXVII-XL*. (Loeb) Cambridge, Mass., 1936; Murray, G. *Aeschyli tragoediae*. 2nd ed. Oxford, 1960; *Euripidis Fabulae*. Vol. 1. (OCT) Oxford, [1901]; Page, D. *Aeschyli septem quae supersunt tragoedias*. (OCT) Oxford, 1972; Paley, F.A. *The Tragedies of Aeschylus*. 2nd ed. London, 1861; Pearson, L. *Demosthenes, Six Private Speeches*. Oklahoma, Okla., 1972; Simons, M., “Observations on embedding verbs, evidentiality and presupposition” *Lingua* 117 (2007) 1034-1056; Sandys, J.E. & F.A. Paley. *Select Private Orations of Demosthenes*. 2 vols. Cambridge, 1896; Stokes, M.C. *Plato’s Socratic Conversations*. London, 1986; Taki, A. (瀧章次) 「プラトン著作中世ビザンツ写本 Parisinus graecus 1807 fol. 1^r col. 1 – fol. 14^r col. 1 (『クレイトポン』、『国家』第1巻) に付されたる疑問符の形態、出所、特質について」、『城西国際大学人文学部紀要』(2008); Urmson, J.M. “Parenthetical Verbs” *Mind*, N.S. 61 (1952): 480-496; Zeyl, D.J. *Plato, Gorgias*. (Hackett) Indianapolis, Ind., 1987

(Josai International University)

アコンティオスの弁明
—オウィディウス『名高き女たちの手紙』第20歌21-32—

西井 奨

1

オウィディウス『名高き女たちの手紙』(以下、*Her.*)第20・21歌は、アコンティオスとキューディッペーの往復書簡という形の作品である。この作品は、カッリマコス『縁起物語』(以下、*Aet.*)によって伝えられるアコンティオスとキューディッペーの物語を題材としている。この物語の概要は、次のようなものである。

ケオス島の美少年アコンティオスは、デーロス島の祭りに来た際、ナクソス島から来た美少女キューディッペーに一目惚れをする。彼はそこでエロースに策を授けられ、リンゴに誓いの言葉を彫りつけて彼女の侍女の足元に転がす。侍女はそれを拾ってキューディッペーに渡し、彫り付けられた文字を読むように促す。そして彼女は「アルテミスにかけて私はアコンティオスの妻になる」と、意図せずに誓ってしまう。その後、彼は孤独に恋の苦しみを嘆く。一方、彼女には許婚との婚礼が準備される。しかしその度に彼女は病に陥る。心配した父は神託を受け、病の原因は彼女の誓いの所為であると知る。真相が明らかになると彼女は回復し、二人は結ばれる。

*Her.*20-21 は、この物語においてキューディッペーが何度か病に伏している時に、それを知ったアコンティオスが彼女に送った手紙(*Her.*20)と、その手紙に対する彼女からの返信(*Her.*21)という形で作られている。

さて、この作品の題材となった *Aet.* におけるアコンティオスとキューディッペーの物語は、前世紀に至るまで数行の引用断片からしか読むことができなかった。それまでは、この内容をほぼそのまま散文で書き表していると考えられる、後5世紀の作家アリストイネトスの『愛の手紙』第1巻第10書簡から、*Aet.* の内容を推測するしかなかった。

しかし、オクシュリユンコス出土のパピルス断片の公刊により、*Aet.* におけるアコンティオスとキューディッペーの物語を直接に読むことが、かなりの程度できるようになった。まず1910年に公刊された *P. Oxy.*1011により、キューディッペーの婚礼の準備から物語の結末にまで至る場面が77行に渡って読み取

れるようになった⁽¹⁾。次いで 1948 年に公刊された *P. Oxy.* 2211 により、物語の冒頭と考えられる表現から両者の出自の紹介、そしてキューディッペーの美しさの描写までが、14 行に渡って読み取れるようになった⁽²⁾。これらのパピルス断片はそれぞれ断片番号 75・67 として、引用断片と共に Pfeiffer の校訂でまとめられている⁽³⁾。

これらの公刊と *Aet.* 研究の進展は、*Aet.* のこの物語を題材とし、ここから多くの表現を負っている *Her.*20-21 の解釈にも新たな展開をもたらした。特に、エロースがアコンティオスに策を授けた事を述べる *Aet.*fr.67.1-4 の表現と、アコンティオスがリングの策略について弁明する *Her.*20.21-32 の表現との対応が明らかになり、このことは *Her.*20.21-32 の本文の読みにも影響を与えることとなった。*Her.*20.27 の行末で、従来、P 写本の *a me* という読みを採るのが主流であった箇所が、*Aet.*fr.67.3 の *τέχνην* との対応を考慮して、G 写本の *arte* という読みを採るのが良いとされたのである。また一方で、この箇所の前後の文脈と表現から、ここは *a se* と読むべきであるという修正案も示されている。

そこで本稿では、このような研究の動向を踏まえて、改めて *Aet.*fr.67.1-4 と *Her.*20.21-32 を比較検討し、併せて問題の箇所の文脈も考察することで、この *Her.*20.27 の行末の箇所をどのように読むべきかを提示する。

2

まず、問題となっている *Her.*20.21-32 を以下に示す。これは、アコンティオスがリングの策略によってキューディッペーを欺き、結婚の誓いをさせてしまったことについて弁明する一節である。ここでアコンティオスはキューディッペーに、リングに書いた誓いの言葉を思い出すように願い、彼女への恋心が時間とともに大きくなっていったことを告げた後 (9-20)、次のように述べる。

deceptam dicas nostra te fraude licebit,
dum fraudis nostrae causa feratur amor.

(1) Hunt, 24-9.

(2) Lobel, etc., 17.

(3) Pfeiffer, 70-84.

fraus mea quid petiit, nisi uti tibi iungerer uni?

id te, quod quereris, conciliare potest.

non ego natura nec sum tam callidus usu: 25

sollertem tu me, crede, puella, facis.

te mihi compositis –si quid tamen egimus– **a me**

astrinxit uerbis ingeniosus Amor.

dictatis ab eo feci sponsalia uerbis

consultoque fui iuris Amore uaffer. 30

sit fraus huic facto nomen dicarque dolosus,

si tamen est quod ames uelle tenere dolus. (Ovid. *Her.* 20.21-32)⁽⁴⁾

僕の欺きによって騙されたのだと君は言ってもいい、僕の欺きは恋心の所為だとしてくれるなら。僕の欺きの目的は、君一人と結ばれるため以外にはない。君が抗議するもので、君を手に入れることができる。僕は生まれついてでも経験によってでもそれほどずる賢くはない。信じてくれ、乙女よ、君が僕を巧みにするのだ。実際僕が何かしていたとしても、僕によって作られた言葉で、才覚あるアモルが君と僕を結びつけた。彼によって教えられた言葉で僕は婚約を結んだ。アモルが法律顧問になることで僕は巧妙になった。この行為に欺きという名をつけてもいいし、僕は策略家と言われてもいい、愛するものを手に入れたと思うことを策略とするならば。

ここでアコンティオスは、キューディッペーを欺いてしまったのは、もともと自分がそのように人を欺くような気質だったからなのではなく、彼女への恋心、すなわちアモルの所為でこのようなことをしてしまったのだと弁明している⁽⁵⁾。

さて、ここに引用したように、27の行末では a me という読みを、Palmer, Showerman, Bornecque, Häuptli が採用している。これは、*Her.*20 を伝える主要写

(4) *Her.*20.21-32 の引用に際して、本稿で問題とする箇所以外に、読みについて説の分かれている uni (23) や te (24) に関しては、Thompson (1989), ad loc., Id (1993), 258, Kenney (1996), ad loc. に従う。

(5) ここで、自らの巧妙さをキューディッペーの所為にする 26 の表現と、27 以下で自らの欺きの原因をアモルに帰する内容には、一貫性がないように思えるかもしれない。しかしこれは、恋心としての amor と神としての Amor の区別が曖昧にされていると解釈できる。Cf. Thompson (1989), ad loc.

本 (P, G) のうち⁽⁶⁾、伝存する最古の写本である P 写本 (Paris lat. 8242) と少数の中世後期写本の示している読みである。これに対して、G 写本 (Wolfenbüttel Extrav. 260) と多数の中世後期写本ではこの箇所を *arte* と読んでいる⁽⁷⁾。また、13 世紀後半に活躍した学僧マクス・プラヌデスによるギリシア語訳⁽⁸⁾で、この箇所に対応する訳語は ἐντέχνως「巧に」となっていることから、プラヌデスも *arte* と読む写本から翻訳をしたことが窺われる。

さてここで Palmer は、*arte* とする読みに関して、*artē*「緊密に」と解釈して *astrinxit* (28) にかける可能性を示唆しながらも、改竄者が *ars* の奪格形として“by a trick”の意味で、単純に直前の *si* 節内の *egimus* (27) にかけて解釈したのだとして、この読みを退けている⁽⁹⁾。実際、プラヌデスによるギリシア語訳でこの箇所は、

ἐμοὶ μέντοι σε, εἴ τι καὶ πεπλασμένοις ῥήμασιν ἐντέχνως εἰργάσμεθα, ὁ πολύτροπος συνήρμοσεν ἔρως. (Planudes. *Her.* 20.27-9)⁽¹⁰⁾

だが、もし僕が巧みに作られた言葉で何かしたとしても、機知に富むエロースが僕と君を結びつけたのだ。

となっており、ἐντέχνως の位置から、彼は *arte* を直前の *si* 節内に入れた解釈をしている。このギリシア語訳において *arte* は *compositis* (27) と *egimus* (27) のどちらかにかかって解釈されているのが分かるが⁽¹¹⁾、いずれにしても *arte* を *si* 節内に入れた解釈となっているので、*compositis* (27) に向けられるとしても間接的に

(6) *Her.*20 を含む *Her.* の写本伝承に関しては、Palmer, xxxiii-xlv, Tarrant, 268-73, Thompson (1989), 28-32, Kenney (1996), 26-7, Richmond, 462-9 参照。

(7) なお、Palmer の ap.cr. によると、Palmer 以前の校訂本では、Burman, Merkel, Ehwald が *a me* を、Jahn, Loers, Dilthey, Sedlmayer が *arte* を採用している。一方、Dörrie の ap.cr. は、*a me* を Merkel の修正案とし、*arte* がいずれの主要写本にもあるかのように記しているが、これは Thompson (1989), ad loc. が指摘するように誤りである。

(8) このプラヌデスのギリシア語訳については、Palmer, xlvi-liii, Thompson (1989), 33, Michalopoulos 参照。

(9) Palmer, ad loc.

(10) 引用する本文は Palmer を用いた。プラヌデスによる *Her.* のギリシア語訳の本文は、Papathomopoulos が最新の校訂本であるが、残念ながら参照することができなかった。

(11) この *Her.*20 のギリシア語訳の邦訳では、どちらにもかけられるように訳した。

egimus (27) を修飾することになる。しかし *Her.*20.21-32 は「もともと恋の手管に長けるほどずる賢くなかったアコンティオスが、恋心(アモル)のためにそうなった」という文脈なので、ここで *arte* の読みを採るにしても、アモルの助けのない状況でのアコンティオスの行為である egimus (27) を修飾するのは不適切である。*arte* の読みにはこのような不適切さがあることから、Palmer は *a me* の読みを採用し、Showerman, Bornecque, Häuptli もこれに倣ったのだと思われる。

3

一方、G 写本の *arte* の読みを支持する要素として新たに注目されたのが、*Aet.* fr.67 である⁽¹²⁾。この断片のうち、*Her.*20.21-32 との対応が指摘される⁽¹³⁾ のが以下の箇所である。

Αὐτὸς Ἔρως ἐδίδαξεν Ἀκόντιον, ὁππότε καλῇ
 ἦθετο Κυδίππῃ παῖς ἐπὶ παρθενικῇ,
 τέχνην - οὐ γὰρ ὄγ' ἔσκε πολύκροτος - ὄφρα λέγοιτο
 τοῦτο διὰ ζωῆς οὐνομα κουρίδιον. (Callim. *Aet.* fr.67.1-4)⁽¹⁴⁾

エロース自らがアコンティオスに技術を教えた。少年だった彼が美しい乙女キューディッペーに恋の炎を燃やした時である。彼は機知に富んでいなかったから、生涯の間正式な夫と呼ばれるようにとエロースは計らったのだ。

これは、おそらく *Aet.* のアコンティオスとキューディッペーの物語の冒頭の箇所であり、物語の主題が述べられていると考えられる。この後、両者の出自や美しさについての記述が続く (fr.67.5-14, 68, 69)。

この *Aet.* fr.67.1-4 は、「エロース(アモル)の助けで、アコンティオスは恋の手管を身につけた」という内容面で、*Her.*20.21-32 と対応するといえる。そして

(12) この断片を含む *P. Oxy.* 2211 は 1948 年に公刊されたので、初版が 1898 年の Palmer や 1914 年の Showerman、1928 年の Bornecque はこれを利用できなかった。なお、Showerman の校訂本は 1977 年に Goold によって改訂されたが、このことには言及されていない。

(13) Pfeiffer, ad *Aet.* fr.67.3, Kenney (1970), 393-4, Id (1996), ad loc., Barchiesi (2001), 121, Knox, 137-8, Cairns (2003), Nesholm, 186, n.316.

(14) 引用する本文は、Hopkinson を用いた。なお、この *Aet.* fr.67.1-4 についての考察は、Cairns (2002) に詳しい。

ここでは、Kenney が指摘するように⁽²⁹⁾、アモルが *iuriscousultus* 「法律家」に準えられている。法律家はその専門知識によって人々に「教え」を与える存在と見なされていたので、この表現は ἐδίδαξεν と *dictatis* との対応をより強めるものであるといえる。

このように、*Her.20.27* の行末の読みと関係なく、*Her.20.21-32* には *Aet.fr.67.3* の τέχνην との対応を見出すことができる。それゆえ、τέχνην との対応を重視して、*Her.20.27* の行末は *arte* の読みを採るべきであるという、上述の Barchiesi らの主張の根拠は十分なものではないといえる。

そこで、*arte* の読みも *a me* の読みも不自然であるとして退け、*a se* という修正案を提示する、上述の Thompson の見解が最も妥当なものであると思われる。この修正案は、*a me* や *arte* という主要写本の字面ともあまり離れていない、という点においても妥当である。さらに、*a se* という読みは、行為者であるアモル(エロース)を強調するという点で、*Aet.fr.67.1* の Αὐτὸς とも対応しているといえる。

上述の Thompson の解釈のように、*a se* という読みによって、アコンティオスは自分がキューディPPERにした欺きの原因を、より強くアモルに帰することができる。これは、「欺くような方法で自分がキューディPPERに結婚の誓いをさせてしまったのは、自分が生来そのようにずる賢い気質だからではなく、彼女への恋心、すなわちアモルの所為だからである」という、*Her.20.21-32* におけるアコンティオスの弁明の文脈によく合致する。

以上の考察から、*Her.20.27* の行末の読みについては、主要写本によって伝えられている *a me* や *arte* という読みを採らず、*a se* という修正案の読みを採るのが妥当であると思われる。

引用文献

Barchiesi (1996): Barchiesi, A., Review of Kenney (1996). *BMCR* 96.12.1< <http://ccat.sas.upenn.edu/bmcr/1996/96.12.01.html>>.

Id (2001): Future Reflexive: Two Modes of Allusion and the *Heroides*. in his *Speaking Volumes. Narrative and intertext in Ovid and other Latin poets*. London, 105-27

(29) Kenney (1996), ad *Her.20.27-30*.

(=HSPh 95 (1993), 333-65).

Bornecque, H., *Ovide. Héroïdes*. Paris 1928.

Burman, P., *Publii Ovidii Nasonis Opera omnia*. 4 vols. Amsterdam 1727.

Cairns (2002): Cairns, F., Acontius and his οὐνομα κουρίδιον: Callimachus Aetia fr. 67. 1-4 Pf.. *CQ* 52, 471-77.

Id. (2003): The «etymology» in Ovid Heroides 20.21-32. *CJ* 98, 239-42.

Dilthey, C., *De Callimachi Cydippa*. Leipzig 1863 (Includes critical text of *Her.* 20-21).

Dörrie, H., *P. Ovidii Nasonis Epistulae Heroidum*. Berlin and New York 1971.

Ehwald, R., *P. Ovidius Naso*. Leipzig 1888.

Giomini, R., *P. Ovidi Nasonis Heroidae*. 2 vols. Rome 1975.

Hauptli, B. W., *Liebesbriefe. Heroides epistulae*. Zürich 1995.

Hopkinson, N., *A Hellenistic Anthology*. Cambridge 1988.

Hunt, A. S., *The Oxyrhynchus Papyri VII. Nos. 1007-1072*. London 1910.

Jahn, J. C., *P. Ovidii Nasonis quae supersunt opera omnia*. Leipzig 1828.

Kenney (1970): Kenney, E. J., Love and Legalism: Ovid, Heroides 20 and 21. *Arion* 9, 388-414 (orig., Liebe als juristisches Problem. Über Ovids Heroides 20 und 21 *Philologus* 111 (1967), 212-32).

Id. (1996): *Ovid: Heroides XVI-XXI*. Cambridge.

Knox, P. E., The *Heroides*: Elegiac Voices. in B. W. Boyd (ed.), *Brill's companion to Ovid*. Brill 2002, 117-39.

Loers, V., *P. Ovidii Nasonis Heroides et A. Sabini Epistolae*. Cologne 1829.

Lovel, E., E. P. Wegener, C. H. Roberts and H. I. Bell, *The Oxyrhynchus Papyri XIX. Nos. 2208-2244*. London 1948.

Merkel, R., *P. Ovidius Naso*. Leipzig 1852.

Michalopoulos, S. N., Ovid in Greek: Maximus Planudes' Translation of the Double Heroides. *C&M* 54 (2003), 359-74.

Nesholm, E. J., *Rhetoric and Epistolary Exchange in Ovid's Heroides 16-21*. Ph. D. Diss. Univ. of Washington 2005.

Palmer, A. P., *Ovid Heroides. vol.1: Introduction and Latin Text, with Greek Translation by Maximus Planudes. vol.2: Commentary*. new introduction by D. F. Kennedy. Bristol 2005 (Oxford 1898, Hildesheim 1967).

Papathomopoulos, M., *Μαξιμου Πλανούδη μετάφρασις των Οβιδίου Επιστολών*. Ioannina 1976.

- Pfeiffer, R., *Callimachus*. New York 1979 (Oxford 1949, 1953).
- Richimond, J., Manuscript Traditions and the Transmission of Ovid's Works. in B. W. Boyd (ed.), *Brill's companion to Ovid*. Brill 2002, 443-83.
- Rosati, G., *Ovidio Lettere di Eroine*. Milan 1989.
- Sedlmayer, H. S., *P. Ovidii Nasonis Heroides*. Vienna 1886.
- Showerman, G., *Ovid, Heroides and Amores*. 2nd ed. rev. by G. P. Goold. Cambridge, Mass. and London 1977 (1st ed. 1914).
- Tarrant, R. J., Ovid. in L. D. Reynolds (ed.), *Texts and Transmission: a survey of the Latin classics*. Oxford 1983, 257-84.
- Thompson (1989): Thompson, P. A. M., *Ovid, Heroides 20 and 21 : a commentary with introduction*. Ph. D. Diss. Univ. of Oxford.
- Id. (1993): Notes on Ovid, Heroides 20 and 21. *CQ* 43, 258-65.

(京都大学)

「フィロロギカ」研究活動の趣旨

- 1 本文批判、文字伝承研究、注釈が古典学の中で極めて重要な研究部門であることを認識した研究者たちの集団でありたい。
- 2 その研究は、この種の研究を直接に実行したものであるか、あるいは、この種の研究を十分に意識した間接の実行であるか、を問わない。
- 3 この種の研究を実行することをつうじて日本の古典学の水準向上に寄与したい。
- 4 外に向けて、まず第一に、多くの古典研究分野が存在する日本において、西洋古典文献学の分野における研究を提示することによって、特に文献学方法論の部分で、我々の研究が寄与しうところがじゅうぶんにある、と信じたい（日本語による活動）。他の古典文献学分野との協同は将来に向けての検討課題である。
- 5 外に向けて、第二に、我々の以上のような研究は、欧米の古典学研究の中心と重なりあうものであるから、研究の水準によっては、そのまま直接の研究推進寄与となりうるであろう。この寄与をじゅうぶんに意識した集団でありたい（欧語による活動）。

フィロロギカ—古典文献学のために

第3号(2008):2008年5月刊

発刊:古典文献学研究会(フィロロギカ編集委員会)

研究会事務局:葛西康德研究室(大妻女子大学)

印刷・製本:北海道印刷企画株式会社

